

神の名に於て教を宣べた彼の不思議な働を見、無いことまでも附加へたことは有りさうなものである。彼等は毎日のやうに奇蹟や不思議を見てゐたのであるから、パウロが市場で説教してゐる處に来て、手拭あるひは前垂を彼の體にさはらせて、其を家に持歸つて病人につけると、病氣が治り悪靈が出る。と騒いだのは無理もない。然し是は他の處に於けるパウロの行動とあまりかけ離れてゐる。多分パウロ自身は人々のしてゐることを知らなかつたのであらう。

そこに諸國遍歴のユダヤ人で呪文師と稱せられ、市中の魔法師等と同じやうな事をする連中がやつて来て、臆面もなくイエスの名を籍りて呪文を唱へ、「われパウロの宣ぶるイエスによりて、汝らに命す」と悪魔につかれた者に命する程になつたと云ふ。

エルサレムの祭司長スケワの七人の息子も此様な呪をして市を歩いてゐたが、ある日其中の二人が氣狂の家に行つて例の如くやると、悪靈が「イエスやパウロなら解つてゐるが、お前等は何者だ？」と叫んで、二人に飛びかかり、着物を引裂いて傷を負はせ、街に逐出したさうである。是が評判になつて呪文師等は仕事が出来なくなり、基督信徒等は大いに喜んだのである。

さうなると信徒になつて魔法秘術を棄てた連中は公衆の前で、從來、人を欺いて商賣をした罪を懺悔するやうになつた。幾百年來百合師欺瞞者の手によつて書かれた無數の魔術占星の書呪文のあつたのを、皆持出して山と積み、是に火をかけると云ふ騒である。本と云つても今のは違つて、バビリ

紙草製の長い巻物であるから積み大變な山となり、火をかければ家よりも高く炎が上るので、之を仰いだ人々の胸にはパウロの傳道の方が、ひしくと感へた。焼かれた書物は皆丁寧に寫字生の寫したもので中には昔の大魔法師のものもあつて、再び得られないのも多かつたので、其當時の銀五萬に價したと評されたのも無理ではなかつた。

パウロは彼等魔法師呪文師等に如何なる教を述べて感激させたであらうか、彼の書簡中に教へて曰ふ、――

「諸君、人の虚しき言に欺かれるな、神の怒は、これらの事によりて不從順の子等に及ぶのである。この故に彼等に與する者となるな。諸君は舊は闇であつたが、今は主に在りて光となつた、光の子供らしく歩め、光の結ぶ實は諸の善と正義と誠實とである。主の喜び給ふところの如何なるかを辨へ知れ。實を結ばぬ暗き業に與する事なく反つて之を責めよ。彼等が隠れて行ふことは之を言ふだに恥づべき事である。凡て斯る事は責められるとき、光にて顯はされる、顯はされる者はみな光となるのである。この故に言ひ給ふ「眠れる者よ、起きよ、死人の中より立ち上れ。然らばキリスト汝を照し給はん」と」パウロの傳道は魔法ばかりでなく、アジャ地方全般に行はれてゐた白い神殿の中の偶像禮拜に大打撃を與へた。アポロやアクラはパウロの前に広い傳道地を開拓して置いた。のみならずアポロの行く前五百年に、エベソの哲人で學者なるユダヤ人ヘラクルスは、神殿に行はるゝ恐るべき偶像禮拜を抗



擧してゐたのである。市内に住居するユダヤ人等の禮拜の感化も亦大であつた、彼等はローマ總督ドラベラの許可を得て會堂で神を拜してゐたのである。

然しパウロの努力は容易なものではなかつた、自ら天幕業をして生計を支へながら、戸毎訪問を試みて傳道をするのは難中の難であつた。時には説教中暴漢に亂されることもあつて、教は廣つたが、危険と苦勞は絶えなかつたのである。彼の書簡中に、エベソで野獸と闘つたとある、それが闘場に囚人として投ぜられた意味かどうか分らぬが、ともかく非道な目に遭つて、神氣挫かれ、生命の危険に頻したことは確で、アクラが危険を冒してパウロを救出した事も記録にある。

やがて、また旅人の不安が彼の胸に迫つて來た。エベソの働は他の人でも出来るやうになつた、が他の處に行つて爲なければならぬ働は、彼でなくてはならぬ。彼はイエスの宗教を以てローマ帝國を被はんと望んだ、それで友達に、エベソから船でコリントに渡り、それからギリシヤを通過して陸路マケドニヤに到り、テサロニケ、ピリピを訪ね、而して後エルサレムに歸航するつもりであると告げはしたが彼の眼前空高く、ローマ傳道の望の星が輝いてゐた、彼叫んで曰ふ「エルサレムに到りてのち、必ずロマをも見るべし」と。

尤も出發は早速のことにはゆかなかつた。仕事が山積してゐた、エベソの信徒は數多く、傳道區域は廣がつてゐて、諸種の問題を日々解決せなければならなかつたので、旅に立ちたいと望みながらも

計畫をしては幾度か變更しなければならなかつた。

## 一七〇 クロエの奴隸達

エベソ・五十歳から六十歳

其頃アポロがコリントから歸つて來て情報を傳へたが、中によいことも有れば、甚悪いことも有つた。コリント教會の人達はパウロの教に叛いて、イエスの純眞な福音に満足せず、色々な議論や偶像禮拜の舊習を新生涯とごつちやにして、祭禮、飲酒宴樂など神殿の連中と同じやうなことをしてゐた。アポロはコリントに再び行くことを欲しなかつたので、パウロは若い友テモナにエベソの人エラスイを附けて彼處に送つた。

一日コリントからの便船が着くと、其にコリントのクロエ家の奴隸達が乗つて來た、彼等はパウロの處にコリント教會の或信者達が變なことをしてゐる由を傳へた。其上パウロはステバナ、ボルトナト、アカイコなどからも彼等の間に爭論のあることを聞いて居ても立つてもゐられなかつた。テモテはマケドニヤを通つて行く筈にはなつてゐたが其は待遠かつた。コリントの教會には直ちに云ひ送らなければならぬ。パウロはそこで手紙を認めて特使を以てコリント教會に送つた、使者は多分テトスであつたらう。直接にはコリント教會に宛てたものであるが、また近隣の信徒達へも廻させるつもり



で、内容は主として偶像教の舊習を基督教の新生活及禮拜に混入してゐる人々に関するものである。此コリント前書の各所はこれまで引用した、また後にも採録する、こゝにはたゞ要件の大要をつまんで、讀者の便に供する。

コリント前書は長い手紙である。パウロは信徒の集會所であつた織職アクラの家で、幾日もかゝつて此を書いたことであらう。夜は燈火が明るくないので秋の陽をうけながら晝間、認めたであらう。テモテは既に居なかつたとすれば、彼の口授を誰が書取つたか、多分テトスであつたらうか。傍には教會の人達も黙つて聞いてゐたであらう。此手紙は教會を代表する意味も有つた。ソステネも連名であつた、此人はエベソでパウロを助け、コリントの人達も良く知つてゐたのである。

パウロは手紙の初に、クロエの奴隸達からコリント教會の兄弟等がパウロ、アポロ、ペテロ、イエスと各黨派を作つて紛争してゐることを聞いたが、そんな分裂を止めて結合し、イエスに於て一つ心にならなければならぬことを説き、テモテを遣して、前にパウロが彼等の間に在つた時教へた眞理について記憶を新にせしむるつもりであることを告げてゐる。彼等の中には高ぶつて福音を無視し、パウロはもう來ることは無いやうに振舞つてゐる者があるが、パウロはやがて到つて、その論者等と力較べをするであらう。ある者は偶像教徒の結婚風習を棄てないでゐる、特にある一人の男がさうであるが、他の者が其を批難しない様子である、皆かゝる事を直に止め、必要ならば其男を教會から放逐すべきである。

パウロはコリント教會の人々の間に訴訟沙汰のあるのを聞いて、強い語氣で、基督信徒の群に加つた者のうちに非常に悪くなつた者のあるを指摘し、教會は大いに廓清せられなければならぬことを力説してゐる。たゞし我々は當時の信徒達の中には澤山無學の奴隸のあつたことを記憶しなければならぬ。中には最下等の人間も有つたのである。パウロは如何に低い人でも之を憐み救ふことを厭はなかつたのである。パウロは彼等に警告するに、好みの、イエスに關する警句を以てした、曰く「諸君は知らないか諸君は神の宮であつて、神の御靈諸君のうちに住み給ふことを」異教神殿の惡習から彼等を離れさせる爲には、神が信徒の裏に住み給ふのであるから其宮たる自分を瀆してはならないと云ふ輝かしい思想を注入する程よいことがあらうか。

彼等は結婚に關して奇妙な問を寄せて來た、パウロは其に答へて、自分のかゝる疑問に對する答は神の導を得た事も有るし、さうでない事もあると言つてゐる、パウロは結婚しなかつた、隨て自分の考を分つべき妻を持つと云ふことが如何な意味があるか、自分の判断を柔らげる子供の心も知らない妻子を持つてゐたら、もつと考が異なるかも知れなかつた。故にパウロが婦人について定めた規定は今日顧みられないものである、また彼は殆ど子供の事は書いてゐない。

或人々は、男子が信徒になつた場合、未信者の妻を離縁すべきものであるかを訊いて來た。また自



分の娘を結婚させてよいものかどうか訊いてよこした者もあつた。或は偶像の宮から出た肉を買つて食べてよいか尋ねたのもある、パウロは一々其等の疑問に答へてをる。

彼の敵は、パウロを使徒でないと言つたので、自分は使徒であると主張してをる。使徒とは「教を宣ぶる爲に使はされた者」である、パウロも他の使徒と同じく教を宣ぶる爲に使はされた者である、云ひ、コリントの教會員は即ちパウロの宣教の證明者であつた、パウロの建てたる教會はコリント教會であると誇つて云つてをる。彼も靈覺を経験した、他の使徒や教師達は信徒から食を得たが、パウロは自ら働いて自ら支給した、信徒から養はれてもよいのを謝絶して自給傳道をしたのである。

信徒のうちには、以前偶像の宮でした通りに大いに飲んで宴樂にふける者があつた、パウロは極力之を非難し、イエスを知りながら、かゝる行動に出でる者の爲に悲しんだ。其様な事を主の聖餐と混同してはならないと警告した。

婦人が集會の席で感話をしてよいか、婦人の髪飾はどうしたらよいかと云ふ問に對しても答へてをるが、今日の我々から見れば興味はない。問題は、ユダヤ人の婦人達は白い顔被布ベレをきて、衝立シマの陰に座つてゐたのに、ギリシヤの婦人はそんなことはせず、神の示を受けたら男子と同様に感話をしてよいとさへ考へてゐるところから起つたのであつた。

彼等はまた、人は如何なる時に神から使命を受けた者として集會に於て話してよいか、如何なる場

合にはさう話してならないかを問ふて來た。或者は無茶な放言をする、或者は理の分らないことをしやべる、或者は興奮の餘りに悪い事すら言ふ、また雄辨家もあると言つた風であつたからである。甚六ヶ敷い問題であつたが、パウロは確信を以て平靜に答へてをる。尤も其中には、たとへば人に分らない言で話すと言ふやうな、今日其様な例もなく、單に歴史的興味を惹くに過ぎない點もある。然しパウロは、明白な標準線を提示してをる、即ちイエスに反する言は神の靈に導かれたものとは言へない、イエスを主と稱へる者こそ神の靈に導かれた者である。イエスが弟子達に與へた美しい教の一に注意を促して、信徒は相互に愛し合はなければならぬ、是を失へば、靈の賜物も何の役に立たぬと云つてをる。

非常に簡單な言でパウロの傳へた福音を約説してをる。彼はまた復活の問題に答へ、肉體は死ぬ、けれども靈魂は生きるのである、肉と血は天の國を繼ぐものではないと言つてをる。

エルサレムの貧しい信徒達の爲に義捐する爲に、パウロが行つた時俄に集める必要のないやうに安息日毎に少しづつ積立て、置くやう命じた。誰が其を持つて行くかは追つて定める、或は自分で持つて行つてもよいと書いた。彼はマケドニヤを通つて行くつもりである。暫くコリントに滞在し或は冬を共に越すかも知れないけれども、エベソに夏の初までは留らなくては、仕事も澤山あるし逆ふ者も多



テモテがコリントに着いたら、直ぐパウロの處に歸るやう手傳つてやつて貰ひたい。アポロにコリント行をすゝめなければ、今度に行かないと言つてをる。どうか教に従順にしてくれとパウロは彼等に要求してをる。ステバナ、ボルトナト、アカイコがコリント教會の報知を齎したのは悦しかつた。アジャの諸教會からよろしく、コリント教會の爲に盡したおなじみのアクラとプリスカからも、其家に集る教會員、またパウロの友人達からも萬々よろしくと云ひ、終に、市を守りつゝある軍隊に老將軍が喇叭信號をなすかとも思はれる立派な一語を加へてをる、曰く、

「目を覺し、堅く信仰に立ち、雄々しくかつ剛かれ、一切のこと愛をもて行へ」

例の如く再讀訂正した後、パウロは自ら葦のペンを探つて、大きな文字で巻紙の終に書附けた、「我パウロ自筆をもて諸君に安否を問ふ。もし人、主を愛さなければ詛はれる、我等の主は來り給ふ。願くは主イエスの恩恵、諸君と偕にあらんことを。わが愛は、キリスト・イエスに在りて諸君すべての者と共に在るのである。」

## 一七一 銀細工屋の演説

エベソ・五十歳から六十歳

此長い手紙は幾ヤードのバビリ紙に認められ軸に巻かれたら随分の嵩になつたであらう。其を強い

布に包んでエベソから海を渡つて行く友に託してコリントに送り更に使者を立て、諸教會に送られたことであらう。今日我々は平靜に此書簡を読むけれども、當時の教會の人々は神の言として之に傾聴した時に、殊に行惡き信徒達は果して如何の感動を受けたであらう。手紙によつて更に新たな疑問を生じた人々はパウロ自身やがて來ることを待ちあぐんだであらう。

一方パウロはまだエベソに留つてゐた、決して靜な生活を送つてゐたのではない、彼の傳道の結果其教に注意を喚起するとともに敵も多くなつて、心勞は常に絶えなかつたのである。敵はパウロを強迫して追出さうとした。然し彼は少しも恐れなかつた。つとめて彼等を避けはしたが、敢て努力をゆるめず、のみならず弟子達の力をも衰へさせないで、依然としてアジャの諸方に彼等を派遣したのであつた。

パウロは必ずしも白い大神殿や黒い偶像を抗撃したわけではなかつたが、彼の傳道の結果は自然人を活ける神に導いて神殿から遠からしめたのである。神殿は實に此市の富の源であつた。參詣人は大群をなして集り、晝の神官達の花行列、夜の炬火行列、祭禮、酒宴、一ヶ月にも亘る諸種の競技は市民を利すること多大で、市民は各地からの參詣者に部屋を貸し、食物、呉服、果實、葡萄酒、其他様々の祭好きの人々の買ひさうなものを賣つたのである。神殿には是によつて衣食する數千の神官、神女、神苑造者、パン屋、番人、商人、老若男女の奴隸があり、市民は神殿に供物に上つた諸品が市



場に下されるのを安く手に入れることが出来たのである。

参詣者達はまた木石金属製のエベソの護符や魔法本を買った、殊によく賣れたのは、例の白神殿の黒偶像の模型であつた。祐福な者は金銀製を、中流社会は大理石造を、錢の無い人は赤土焼を買った。其は傾斜した屋根と前面に圓柱のある宮の型の中に小さな偶像が入つて居る丈けのものであつたが、大層貴重がられた。賣手の祭官達の云ふところによると、其が魔除けの力を持つて居るのだと云ふ。そこで母親達は其を子供等の頸にかけさせ、愛人は互に之を交換し、海陸の旅行の守護とするもあり家の戸口に祭つてをくもあり、或は太古エジプトの人達が青い陶器の偶像と共に埋められたやうに之を死者と共に墓場に葬る者さへあつた。

商人達は初め基督教徒の信仰に注意を拂はないでゐたが、是が爲に商賣が衰へて収入に影響するのを見るや不満反抗の心が漸次嵩まつて来て、若しパウロの傳道をこのまゝに許して置いては仲間のうちに破産者を出すかも知れないと云ひ出した。パウロは其弟子達と共に反対者等に向つて、木石の偶像をいつまでも拜してをるのが人の務であらうか、活ける神を拜しイエスにありて高尚なる生活を送るのが本統ではないかと論じて来たのである。ある日パウロ等は多分市場で説教をして聴衆の心を刺戟したと見えて、騒動が勃發した。

富祐な銀細工人デメテリオは、銀細工人、陶器師、金属工、寶石商人、木彫工、肉屋、織機屋、ス

リツバー屋、其他大白神殿の御蔭で衣食してゐるあらゆる商賣人達を召集した。小屋掛や、屋臺店や商店から出て来た人々は白い敷石の間にある樹木や立像の下に群衆して其數幾千、デメテリオは小高い像の臺石の上に立上つて日頃市場で皆が不平々々云ひ合つてゐたことを演説にして叫んだ。

「諸君、われ〜が此の業に頼りて利益を得ることは、諸君の知る所である。然るにかのパウロは手で造つた者は神ではないと云つて、唯にエベソばかりではない、殆んど全アジャにわたつて、多くの人々を説き勧めて感した、これ亦諸君の見聞せる所である。」

彼は秋の日盛に大群衆に向つて大聲に呼つた、彼の言ふ所は間違つてゐない。彼は語を進めて、自分達の商賣と財布に及ぼす影響にうつた。

「斯くては嘗に我々の職業が輕しめられる恐があるばかりでない、惹いては大女神アルテミスの宮も蔑せられ、全アジャ、全世界の拜む大女神の稜威も滅びることになるであらう。」

デメテリオは聰明な人であつた丈けに人々の心を極度に刺戟して、皆の仕事が隙になつたのは全くあの旅のユダヤ人の爲である、遂にはダイアナの像を逆倒にし、神殿を寂寥れさせ、市場に参詣人の群の影も無くなるやうなことにするであらうと云ふことを思はせた。そんなことが出来るものかと疑うた者も有つたが、多くの者は、パウロの影響を感じてゐたので、直ぐにも何か爲やうと言ふ腹になつた。どこでも大演説の後で誰か音頭を取ると皆が「萬歳」を叫ぶやうに、群衆のうちに「大なる



哉エベソ人のアルテミス」と云ふ叫が起つた。またも焼かれた鐵が打たれたのである、そして人々は口々に呼つた。聲がいよゝ大なれば、勢でダイアナは偉いものだと思ふ信仰が強くなつた。然し次にはどうするか、市場では何も出来ない。彼等は全市を興奮させて大劇場に集合しなければならぬ。商人達は市場の石門から、雪崩れ出て、市街に呼はりながら、野次馬達を驅り集めて大劇場へと急いだ。パウロは何事が起るか自分の身邊に迫る危急すら知らなかつたのである。

## 一七二　ダイアナ萬歳

エベソ・五十歳から六十歳

市の人達は商人達が何をするのか知らないながら、火事場に集る野次のやうに譯も無く群をなして其後に隨いて行つた。皆は戶外劇場に駆け上つた、石段を上へ上へと、座席を跳越え、垣を飛んで高い天空近くまで登りつめた。こゝは五萬の人を入れ得たが、勿論満員にはならなかつたにしても演説臺に近い席はぎつしりつまつた。

パウロは見付からなかつたが、マケドニヤから來た二人の友ガイオスとアリスタルコは道で捕つてこゝまで引摺られて來た。デメテリオの聲も聞えなかつた、演説者が多くて聞手は無いと思ふ有様である。熱心な者もあるが、中には面白半分に騒ぐ者があつた。徒に喧々轟々するのみで、何が何だか

譯もわからず、靜に聴かうとする者も無くて時ばかり経つて行つた。騒動が底止するところを知らぬので、遂に市の役人達とパウロの處に使が行つた。そこで彼等も劇場に急いだ。パウロはガイオスとアリスタルコの事を聞いて、自ら劇場に入込み、辯明したいと思つたのである。けれども、友人等、その中には市の役人も居て、パウロの行くことを許さなかつた、パウロが顔を出さない方が仕末が爲良いと思ふのであつた。

遂にデメテリオや彼と同類のユダヤ人等が、アレキサンデルと云ふユダヤ人を演壇に押出した。彼は雄辯な大聲の男であつたと見える。然し彼が何を云ふつもりであつたか解らなかつた、と云ふのは彼が手を舉げて群衆を静めやうとすると、其容貌で、ユダヤ人だと知つた群衆は承知しない、忽ち「エベソ人のダイアナ萬歳、エベソ人のダイアナ萬歳」の叫が八方から起つた。喧轟は彌が上に甚しく、アレキサンデルが一聲發すれば、百聲「エベソ人のダイアナ萬歳」を叫んで怒濤の寄する如く、他の聲を封じ去ると云ふ勢である。何の爲に集つたのかそんな事には一切無頓着で、聲の限り叫び續けるのであつた。市場から來た者の外は何の事やら解らないのだから全く馬鹿騒ぎに過ぎなかつた。やゝ衰へたかと思ふと再た叫出す、遂に二時間許もつゞけて漸く倦いて來た彼等は、何か他の事と云つた顔付である。

市の役人達は先刻から出張してゐて、人民の靜るのを待つてゐた。中には市書記も居た。彼は大集



會で報告などするに慣れた人で市民によく知られ、可成畏敬されてゐた。で彼が演壇に現れると、人々は何か有るのだと思つて、靜寂になつた。此男は人々が騒いでゐる間に、ちやんと騒擾の原因を取調べてゐた。事馴れた彼は群衆を開散させる方法を心得てゐた。

彼は大聲に叫んだ、「エベソの諸君、誰かエベソの町が、大女神アルテミスと天から降つた像の宮守であることを知らない者があらうか。」

彼の大膽な、持上げ氣味の言は忽ち市民を喜せて、容易に耳を敬たたせることが出来た。

「これは言ひ消し難いことであるから、諸君は靜にして、妄なる事をしてはならぬのだ。この人々は」彼はパウロの二人の友を指して云つた、「宮の物を盗む者でもなく、我らの女神を謗る者でもない。然るに諸君は彼等を曳いて來たのである。もしデメテリオや細工人等が、人につきて訴ふべき事があるならば、裁判の日もある、司もある。そこに訴へればよい。もし又ほかの事について議する所があるならば、正式の議會で決するがよい。」彼は冷靜に、法律家らしい態度で、此場が訴訟の場所でないことを警告し、又騒擾の底に深いわけが有れば、其を持出すべき所もあることを指摘した。

かく正當合法の手續を教へた彼は、更に一步を進めて、騒擾せる人々に對して彼の權威を示す一言を以て結んだ。彼の言の背後には蜂黨の騒擾罪を敏速嚴酷に罰するローマ地方官の義務が控えてゐたのである。

「われらは、今日の騒擾につきては、何の理由も無いから、咎を受ける恐がある。この會合につきて言ひひらくことが出来ないからである。」

彼はかく警告して敢て背くことの出来ない權威ある聲を以て、群衆の開散を命じた。

忽ち群衆は起上つて瞬く間にさしもの廣い劇場は元の空漠に返つた。そして市中は口々に論辯りつゝ歸つて行く人で賑つた、多の者は聲を囁らし空腹を抱えて家路に急いだ。こんなことでデメテリオ等の企は失敗に了り、基督者の信用は却て高められた。其後法庭に訴へて出る者もなく、市會に問題を持出す者もなかつた。

それから市場などで此時の話は出たが、デメテリオ等が其上爲すところも無かつたので、自然噂もいつと無く消えて行つた。たゞしパウロは此事を忘れなかつた。また友人達も役人達も餘り長く居ない方がよいと云ふ意見なので、パウロは先にコリントの人達に、春まではエベソに留ると書送つたのであつたが、其を變更して、春を待たずエベソを去り、先づマケドニヤに行き、そこからコリントに行くことに決めたのである。冬は近づきつゝあつた、日はまた暖であつたが、そろ／＼木枯さへ吹き初めて、葡萄畑の枯葉を吹飛ばした。船夫等は冬の用意に船を港に繋ぐ下心をしてゐた。

エベソの教會はもう礎も強固で長老達や役員も揃ひ自立する丈けの力は備つてゐた。パウロは別の集會を催して、マケドニヤに向ふことを告げ教へられた通りイエスを信じて、確く立つことを奨めた。



最後の教であるからエベソの信徒達には強き印象を残したことであらう。彼は熱して数時間の雄辯を揮つたこと、思はれるが、記録されてない、彼が後に此教會に送つた手紙によつた其一端を覗つて見やう。曰く、

「諸君が主イエスに對する信仰と凡の聖徒に對する愛とを聞きて、絶えず諸君のために感謝し、わが祈のうちに諸君を憶え、我らの主イエス・キリストの神、榮光の父、諸君に智慧と默示との靈を與へて、神を知らしめ、諸君の心の眼を明にし、神の召にかゝはる望と聖徒にある神の嗣業の榮光の富と神の大能の勢威の活動によりて信ずる我等に對する能力の極めて大なることを知らしめ給はんことを願ふ。神はその大能をキリストのうちに働かせて、之を死人の中より甦へらせ、天の所にて己の右に坐せしめ、もろもろの政治、權威、能力、支配また營に此世ばかりでなく、來らんとする世にも稱ふる凡の名の上に置き、萬の物をその足の下に服はせ、彼を萬の物の上に首として教會に與へ給うたのである。」

「諸君は召されたる召に適ひて歩み事毎に謙遜と柔和と寛容とを用ひ、愛をもて互に忍び、平和の繋のうちに勉めて御靈の賜ふ一致を守れ。體は一つ、御靈は一つである。諸君が召にかゝはる一つの望をもて召されたる通りである。主は一つ、信仰は一つバプテスマは一つ、凡の者の父なる神は一つである。神は凡のものゝ上に在し、凡のものを貫き、凡のものゝ内に在したまふ。我等はキリストの賜

物の量に隨ひて、各自恩恵を賜はつたのである。されば云へることあり、「かれ高き處に昇りしとき、多くの虜をひき、人々に賜物を賜へり」と。……神は或人を使徒とし、或人を預言者とし、或人を傳道者とし、或人を牧師、教師として與へ給うた。これ聖徒を全うして職を行はせ、キリストの體を建て、我等をしてみな信仰と神の子を知る知識とに一致せしめ、全き人、すなはちキリストの満足れるほどに至らせ、また我等はもはや幼童でない、人の欺騙と誘惑の術たる悪巧とより起る様々の教の風に吹きまはされず、たゞ愛をもて眞を保ち、育ちて凡のこと、首なるキリストに達せん爲である。

「願くは父なる神および主イエス・キリストより賜ふ平安と信仰に伴へる愛と、兄弟たちに在らんことを。願くは朽ちぬ愛をもて我等の主イエス・キリストを愛する凡の者に御恵あらんことを。」

## 一七三 島と岬の間を

エベソ・五十歳から六十歳

其頃の信徒の集會は押黙つた靜なものではなかつた、パウロがエベソの教會の人達に袂別の説教をしてふと、女は聲を擧げて泣き、男は涙を呑んで歎息したであらう。愈トロアスに旅立つ日が來ると、クリスチャン等は幾百となく阜頭に見送つて、手を握りしめ脆いて祈り、船が綱に曳かれて港を



離れ、運河をすべり河に出で遠く海上に去るを見ては聲の限り叫んだことであらう。

パウロは約三ヶ年エベソ及其附近に滞在して、コリントと同じやうに大なる成功を納めたが、後に多の敵を残し、追はれて去るのであるから、心残りであつた。船はアジャの岸に沿うて北に走つた、船路は一週間もかゝつたが、始終、島か大陸か見え、夜は波静な陰に淀泊した。

スミルナの廣い風強き灣を横切り、ミテレネと陸地の間に挟まれた狭い水道をぬけて行く邊は、恰もスコットランドの西岸を行くに似て、美しい島々、狭い水道、急流、岬、雲をいたゞく山々、岩多き谷が、代る／＼眼を喜ばせた。終の岬を廻るとトロアスは眼の前に現れた。こゝに來たのは、ルカと一緒に、こゝから出帆して以來五年振であつた。此時パウロの道連は誰であつたか、かのアクラとブリスキラ、命の恩人として前に幾倍した親交の友等はエベソに残して來たのである。パウロを助けたことから面倒が起つたものか、彼等もやがてエベソを去つた。そしてローマに歸つてゐたことは、後に知れる。パウロが此謙遜な織師夫妻を厚く愛したのは、彼等がパウロの爲又基督教の爲に如何に盡したかを思へば、無理からぬことである。

パウロはマケドニヤに行くのが目的であつたが、船は此港限りなので、一旦下船して、市に入つた。前に此市に來た時には、説教を爲なかつたが、此度は信徒が出來てゐたので、ネヤボリス行の船を待つ間、毎日彼等を教へた。既に海の荒れる時候になつてゐたので、船便悪く、或は幾週間も滞在した

かも知れない。兄弟等に語つた言は、次のやうなものであつたらう。

「感謝すべきことである、神は何時でもキリストにより、我等を執へて凱旋し、何處でも我等によりて、キリストを知る知識の馨をあらはし給ふ。救はれる者にも亡ぶる者にも、我等は神に對してキリストの香ばしき馨である。亡ぶる者には死よりいづる馨となつて死に至らしめ、救はれる者には生命より出づる馨となつて生命に至らせる。誰か此任に耐へやうか。我等は多の人のごとく神の言を曲げず、眞實により神による者のごとく、神の前にキリストに在りて語るのである。

「我等はふたゞ己を薦める必要があらうか、また或人のごとく人の推薦の書を諸君に齎し、また諸君から受ける必要があらうか。諸君は即ち我等の書であつて我等の心に録され、又すべての人に知られ、かつ讀まれるのである。諸君は明に我等の職によつて書かれたキリストの書である。而も墨でなく活ける神の御靈にて録され、石碑でなく心の肉碑に録されたのである。我等はキリストにより、神に對して斯る確信がある、……神は我等を新約の役者となるに足らしめ給うた。儀文の役者ではない。靈の役者である。儀文は殺し、靈は活かすのである。若し消ゆべきユダヤの律法の職にも光榮あらば況して永存ふる靈の職に光榮のない筈があらうか。」



## 一七四 「我が眞實の子テモテ」

トロアス・五十歳から六十歳

パウロはトラアスで、コリントの報告を齎して来るテトスに逢ふつもりであつたが、テトスが來てゐなかつたので大に失望した、テトスが果してパウロの長い手紙を持つて行つたのなら、パウロは其手紙をコリントの兄弟等が、どう受けたか、教會が彼の教に従ふつもりになつたか是非聞きたいと思つたであらう。實はテトスは既に歸途についてゐるのだが、遂にテサロニケまで追付けなかつたのである。トロアスの信徒達は非常な熱心でパウロを迎へたので、パウロは恰も新しい門戸が開かれたやうに感じて、暫く足をとゞめたのである。

彼が若い友テモテに最初の手紙を書いたのも此頃のことである。其手紙には前にも述べた通り、傳道、教會に關する幾多の訓戒が記されてあつた。讀者は聖書について其手紙を精讀せられたい。凡そ青年に送らるゝ手紙中最優秀なものであらう。パウロは己の年の老けるのを思ふて、自分の大仕事を委託すべき人を考へ初めたのである。彼はテモテを自分の眞實の子であると呼んで、マケドニヤに旅立つときテモテをエペソに残した時若者に與へた教訓を再説してゐる。ある人々は間違つた福音を傳へてゐる、テモテは其を正さなければならぬ、昔話や系圖の愚説を排斥して、徒らなる紛争を止めさせな

ければならぬと云つてパウロは殊にヒメナオとアレキサンデルの名をあけてゐる。後者は、かの劇場で演説をしやうとしたアレキサンデルかも知れない。

パウロはテモテに逢ひ度いと思つたが、まだ直ぐには出來ないので、手紙で辛抱をしたのである。此中に奴隸は主人を尊まなければならぬ、主人が信者ならば猶更尊めとあるが、今日ならパウロは主人に奴隸を解放するやうすゝめたであらう。是は時代の相違であつたから致方もない、基督の教は徐に其光を現し來るのである。パウロは又養生の爲には少しの葡萄酒を用ふることをすゝめてゐる。そして親が子に書くやうな美しい言で、手紙を結んでゐる、曰く、

「テモテよ、なんぢ委ゆだねられたる事を守り、妄みだなる虚しき物語また偽りて知識と稱ふる反對論を避けよ。或る人々はこの知識を装ひて信仰から外れたのである。願くは御恵、汝と共に在らんことを。」

トロアスを辭去する時は希望に満ちてゐたであらう。この後一年で、通りすがりに三度此市を訪ねた時は相當の教會が出來てゐたのでも解る。

## 一七五 冬の航海

トロアス・五十歳から六十歳

冬は海が荒れたので、航海は寂しく、百哩の遠航をするやうな大船は初春を待たなければ動かなか



つた。パウロの書簡を見ると、度々難破に逢うたらしい、ある時は一晝夜の間破船と共に漂流したとさへある。トロアスからの航海は此時候には殊に危険であつたから或は此邊で難船に出會したのかも知れない。

船がタソス島の陰にあるネアポリス港につくと、もうマケドニヤの一角である。パウロはこゝに足を留めないで、伴の人々と直ぐ馬をすゝめて敷石のロマ街道を十二哩ピリビに向うた、そこにはテトスがコリントから来て待つてをるであらうと樂たのしみにしてゐた。嵐と共に吹きつける雨に、浸ひた濕なれになつて外套などは物の役にも立たず、河に會つては溺れんばかりの深みを渡りして來たパウロ等は、市の低い樓門を通つて、廣い街路に入つたとき、やれ／＼と思つたであらう。やがて友を求めて、懇ねんごうに待遇されたことであらう。或は五年前に世話になつたかの紫布の商人ルヂヤの家に再た客となつたのかも知れない。そして前の如く、ユダヤ人の集會には話さなくとも、キリスト教徒の爲には教を説いたことであらう。信徒の数は殖えてゐた。パウロの話も變つてゐた、必ずテサロニケ、アテネ、コリント、アンテオケ、エベソ、ガラテヤ、エルサレムなどに往つたことを話し、またアテネから眞直ぐに來るつもりを變更した理由も説明したであらう。彼がピリビ教會に宛てた書簡に云ふ、

「われは諸君を憶ふごとに神に感謝し、常に諸君すべての爲に、願ねがひのつど／＼喜びて願をする。諸君が初の日から今に至るまで福音を弘めることに與るが故である。我は諸君のうちに善き業を始め給う

た神が、キリスト・イエスの日まで之を完うし給ふべきことを確信する。わが斯くも諸君すべてを思ふのは當然の事である。我が編目にある時も、福音を辯明して之を堅うする時にも、諸君は皆余と共に恩恵に與るによりて、我が心にあるからである。我はいかにキリスト・イエスの心を以て諸君すべてを戀こゝろひ慕こぼふか、その證あかしをなし給ふ者は神である。我は祈る、諸君の愛、知識と諸もろの、悟さとによりて彌よほが上にも増加はり、善惡を辨へ知りキリストの日に至るまで潔いさぎよくして躓つまずくことなく、イエス・キリストによる義の果を充して、神の榮光と譽とを顯さん事を。」

「諸君たゞキリストの福音に相應あはしく日を過せ、さらば我が往きて諸君を見るも、離れて諸君の事を聞くも、諸君が靈を一つにして堅く立ち、心を一つにして福音の信仰の爲に共に戦ひ、凡の事において逆ふ者に驚かされぬを知り得るであらう。その驚かされぬは、彼等には亡なほの兆しるし、諸君には救の兆であつて、此は神から出るのである。……諸君が遭ふ戦闘たたかひは、先に我の上に見しところ、今また我につきて聞くと同じである。」

パウロは信仰の故に親族や市の役人達の迫害と戦うた信徒達を勵し、その信仰と勇氣を讃めに來たのである。ピリビは遠く紫の山々まで擴がつてゆく小河と樹木澤さわなる美しい平野の中に、強い城立つ日當のよい市で住心持がよかつた。そこにテトスがギリシヤの海岸を北に航して來合せたのでパウロは悦んだ。たゞしコリントの情報は愉快なものではなかつた。



コリントの教會員等はテトスを優遇した。パウロの居た時のことを慕ふて、再た來て貰ふことを熱望してをる。パウロの長い手紙は會衆の前に讀まれた。そして禮拜の仕方については其教を守ることになつた。パウロが指摘した悪い人は教會から放逐された。然し教會内に黨派の分れてゐること、エルサレムから來た偽のクリスチャンの事を訊いて見ると矢張善くない。素性の悪いユダヤ人クリスチャン等はむしろ成功して、教會の教師で彼等の方に屬してしまつた者も少くない。テトスはパウロに、彼等がガラテヤの信徒達に告げたと同様なパウロの悪口を反覆してをるのは残念だと報告した。偽のクリスチャン等は、パウロの外貌や演説振を嘲つてをる。パウロは手紙では強いことを言ふが、會うて見ると、卑怯な男だ、パウロは眞の使徒でないのに生活の爲に傳道してをるのだ。それを人々が養うてやる必要はない、パウロはギリシヤ生れのユダヤ人だから、エルサレムのユダヤ人と違つて、人を教へる権利は無いのであると説き立てゝをる。その上パウロが信者になる迄にイエスの弟子達を激しく迫害したことを洗ひ立て自分達はイエスと共に住み共に談つたエルサレムの使徒達の使であるとして廣言してをる。またパウロがエルサレムの貧しいクリスチャン等の爲に到る處で募金をしてをる大計畫にも反對して、それは神殿に捧げられる筈の金を横取りするやうなものだと言つてをる。

此報告は、パウロの胸に火を點けた。パウロは其を懼れてゐたのである。ガラテヤから追出された彼等偽善なるユダヤ人等は、市から町へとパウロの後をつけて來て、遂にコリントに落付き、出来る

ならばパウロの徳を傷け、パウロの友達のイエスにある眞の信仰を奪つて、誤られたユダヤ人の信仰に引入れやうとしてゐるのである。パウロは黙つてをることが出来なかつた。やがて其處に行くのはあつたが、一日も早く再たコリントの教會に、丁度前にガラテヤの信徒にしたやうに、自分の到ることを警告してやらうと決心をした。けれども直には手紙を書かなかつた、テモテも既にコリントから來るところだつたので、彼の來着を待つことにしたのである。パウロはテサロニケに往く途中であつたので、再び親切なピリピの使徒達に別を告げた。

## 一七六 黒い敷石道

ピリピ・五十歳から六十歳

ピリピのクリスチャン等は再た茶色の外套を着て、世界征服の旅に出るユダヤ人を大きな市の西門から送出した。パウロはまたも銀の帶の如く迂曲して流る、河川、濃緑のピリピ平野、葉繁き樹林、遠い山々をかすめ雪の肩に接して趨る白雲を眺めた。春を喜ぶ鶯の聲も聞えた。眞帆片帆點々海を飾り、旅人の群谷を賑はす頃であつた。

マケドニヤを旅するのは今日でも安全ではない、ましてパウロの時代には非常に危なかつた、パウロ等は道連れを求めるか、或は土地の荒くれ男を強方に頼んで、遠い海岸にあるテサロニケまで多く



の山を越える間護衛させたかもしれない。五年前パウロはテモテとルカを後に残しておいて此敷石道を旅したことがあつたが、其時は、今太陽の光を浴び、懸瀑樹間に閃めく山々は、雪のマントルを着て輝いてゐたのであつた。沼湖を過ぎ広い河を渡ると、河の曲り角、深い谷の口にあるアムビボリの石垣町に着いた。パウロは道々、これまで基督教について聞いた人達に教を説くのを忘れなかつた。またこゝを通ることは無いと思つたからである。

尙もローマ街道をたどつて往くうち、日光に輝き揺るゝ海、藍色、眞珠色の遠い島々が見えて来てやがて日傾けば乳光、紅、紫、黄に變り、薔薇の泡雲大空をこめた。旅人等はアポロニアに足を休めたであらう。こゝはテサロニケに直ぐ近く、パウロの働は忽ち聞えて、信徒達は飛んで來たであらう。他人にイエスの信仰に確く立つことを教へたパウロが大膽にこゝに歸つて來たのを見て、人々は彼を今更のやうに仰いだに違ひない。次に引くパウロの思想にはイエスの言の閃影がある。

「われは與へられた恩恵によりて、諸君のおのの告げる、思ふべき所を超えて自己を高しとするな。神がおののに分ち給うた信仰の量にしたがひ慎みて思はなければならぬ。人は一つ體におほくの肢があつても、凡の肢その運用を同じうせぬ如く、我等も多くあるが、キリストに在りて一つ體であつて各人たがひに肢である。われらが有てる賜物はおのおの與へられた恩恵によりて異なる故に、或は預言あらば信仰の量にしたがひて預言をなし、或は務をなし、或は教をなす者は教をなし、或は勸をな

す者は勸をなし、施す者はをしみなく施し、治むる者は心を盡して治め、憐憫をなす者は喜びて憐憫をなせ、愛に虚偽あるな、悪はにくみ、善はしたしみ、兄弟の愛を以て互に愛しみ、禮儀をもて相譲り、勸めて怠らず、心を熱くして主につかへ、望みて喜び、患難にたへ、祈を恒にし、聖徒の缺乏を賑し、旅人を懇に待たせ。」

アポロニヤは山間の高地に在つたので、谷を降つて敷石道を行くと、再た青海岸に出た、そこはテサロニケの灣で、遠い眞珠色の雲の下には、ギリシヤの巒峯が青く横つて見えた。ギリシヤ人は、かの山々の頂上に棚引く羊毛の如き雲中に、人ならぬ人々が横つて、神酒をすゝり神餐を喫するものと信じてゐた。然し山を降りてゆくパウロの胸には、下の日に照らされた岸に立つ白亜の町のみあつた。やがて東側の石垣にあげられた低い門を通つて、廣い街に入つた、そこには町の最立派な家々が建列んでゐて、向ふには、牡牛の頭と花飾を彫付けた白大理石のオクタビヤの門が見えてゐた。

彼は直ぐに友人達に迎へられた。此市には信徒が澤山ゐて、パウロはコリントから二度も手紙を書送つたのである。信徒達は待ちに待つたパウロの顔を見て喜んだ、そしてまたヤソンがパウロも其伴侶も自分の家に招待したに相違ない。五年前パウロを無事に逃したのち迫害された人々の頭は彼ヤソンであつた。信徒達の中にはキリストは直ぐにも再來し給ふから仕事は爲なくともよいと云つて切に復活を望み來世を夢みた者もあつたので、パウロはアテンスからテモテを遣して、それらの事に就て



はパウロ再び到る日に明にするからと云はせた事があつた。そこで此度パウロは大いに説く必要が有つた。茶や青の上衣をきた人々はヤソンの家の廣間を満たし、黒い眼をみはつた婦人達も多く集つてゐた。彼が此兄弟達に送つた手紙の一節によつて、此時云つた言を想像して見る。

「我らが神に感謝して己まないのは、諸君が神の言を我らから聞いた時、これを人の言とせず、神の言として受けたことである。これは誠に神の言であつて、諸君信する者のうちに働くのである。兄弟よ、諸君はユダヤにおけるキリスト・イエスにある神の教會に効ふ者となつた。彼等がユダヤ人に苦しめられたやうに、諸君も自分の國の人に苦しめられたのである。ユダヤ人は主イエスをも預言者をも殺し、我らを追出し、我らが外國人に語りて救を得させんとするを拒み、神を悦ばせず、かつ萬民に逆ひ、かくして常に己が罪を充すのである。而して神の怒はかれらに臨みて、その極に達したのである。兄弟よ、我ら心は離れねど、顔は暫時諸君と離れて居るから諸君の顔を見たいと愈切に願ひ一度ならず二度までも、諸君に到らんとしたが、サタンに妨げられたのである。我らの主イエスが來り給ふとき、御前における我等の希望、また喜悅、また誇の冠冕は誰ぞ、諸君ではないか、實に諸君は我が光榮、わが喜悅である。

「この故に、もう辛抱が出来ない、我等だけアテンスに留ることに決し、キリストの福音において神の役者たる我らの兄弟テモテを諸君に遣したのである。これは諸君を堅うし、また信仰につきて勸め

この患難によりて動かされる者の無からん爲である。患難に遭ふことは我らに定つたことであるのは諸君自ら知る所である。我らが患難に遭ふべきことは、諸君と共にゐるとき預め告げておいたが、今果してさうなつたのである。この故に最早やわれ忍ぶことが出来ない、試むる者が諸君を試みて、我らの勞の空しくならんことを恐れ、諸君の信仰を知る爲に人を遣した。然るに今テモテが諸君の處から歸つて來て、諸君と信仰と愛とにつきて喜ばしき音信を聞かせ、又諸君が常に我らを懇に念ひ、我らに逢はんことを切に望みをるは、我らが諸君に逢はんことを望むに等しと告げたるによりて、兄弟よ、我らは諸般の苦難と患難との中にも諸君の信仰によりて慰安を得た。諸君が若し主に在りて堅く立たば我らは生くるのである。諸君につきて我等が神の前によるこぶ大なる喜悅のために如何なる感謝を神に獻けやうか。我らは夜晝祈りて、諸君の顔を見ること、諸君の信仰の足らぬ所を補ふことを切に願うてゐる。願くは主、諸君相互の愛、および凡の人に對する愛を増しかつ豊にして、我らが諸君を愛するごとくならしめ、斯くして諸君の心を堅うし、我等の主イエスが、凡の聖徒と偕に來りたまふ時、われらの父なる神の前に潔くして責むべき所なからしめ給はんことを。」

## 一七七 ギリシヤの巒峰

テサロニケ・五十歳から六十歳



今パウロの滞在してゐる市は、深いテルマ灣に沿うた小丘の上に立つてゐて、ギリシヤやマケドニアの山々は青く、市民を田舎へとさしまねいてゐた、シセロは百年前マールを逃亡した時に此處を自分の住家を選んだのである。パウロは市中に安閑とはしてゐなかつた、向ふから斷つた會堂には出かへなかつた、ローマ街道を東に西に、四邊の町村傳道に忙しかつた。彼が此處の兄弟達に送つた手紙の一節に云ふ、

「兄弟よ、我らの主イエス・キリストの名によりて諸君に命ずる。我等から受けた傳に從はないで妄に歩む凡の兄弟に遠ざかれ。どう我等に効ふべきかは、諸君が知つてをる筈である。我等は諸君の中において妄なる事をせず、價なしに人のパンを食せず、反つて諸君のうち一人をも累はさない爲に、勞と苦難とをもて夜晝はたらいたのである。これは權利のない爲ではなく、諸君をして我らに効はせる爲に、自ら模範となつたのである。また諸君と偕に在つたとき、人もし働くことを欲せずば食すべからずと命じた。聞く所によれば、諸君のうち妄に歩みて何の業をもなさず徒事にたづさはる者があるさうだ。我ら斯のごとき人に、靜に業をなして己のパンを食ふことを、我等の主イエス・キリストに由りて命じ、かつ勸める。兄弟諸君よ、善を行ひて倦むな。もし此書にいへる我らの言に從はぬ者があらば、その人を調べて交ることを爲な。彼みづから恥んだためである、たゞし仇の如くせず、兄弟として訓戒せよ、願くは平和の主、自ら何時にても凡の事に平和を諸君に與へ給はんことを、願くは主

諸君凡の者と偕に在さんことを」

パウロはテモテからコリントに關する報告をきくのを待つてゐたが、結果はテトスの悪い報告に裏書を與へるに過ぎなかつた。コリントの教會員達はパウロの長い手紙を貰つても、矢張、疑惑と分裂の状態に在つた、一度擧げられた人々の魂は、再た恐るべき偶像禮拜の舊習に歸りつゝあつた。パウロはも一度手紙を書くことを決心し、テモテに其を手記させた、そして大急で持たせて遣らなければ彼の氣が濟まなかつた。

手紙の概略は次の如きものであつた。パウロはエベソに居た時、ほとんど堪え難き悲痛を味ひ、失望して直にコリントに到らんことを欲したが、愈相見て悲を新にすることは尙好まない、で悲みながらも此手紙で濟せておく、前に或人を罰するやう命じたが、既に處刑した上は、もはや許してやれ。トロアスでテトスに逢はなかつたのは残念であつた。マケドニヤに往つたが、そこでは大に成功して己の身の周圍から神にさゝける芳馨の上るが如く感じた。エルサレムから來た誤れるクリスチャン等は推薦状を持つて來たが、パウロの持つ推薦状は、良きクリスチャンである、自分の傳道によつて生れた信者は世界の人の讀む推薦状である。パウロはイエスの爲に死をも厭はぬ者である。

僞クリスチャン等は、パウロのことを氣狂だと云つた。實にパウロはイエスの使者として、鞭打たれ、投獄せられ、多くの苦難を忍んだのである。



「コリント人よ、我等の口は諸君に向ひて開け、我等の心は廣くなつてをる。諸君の狭くせられるのは、我等に因るのではない、反つて己の心に因るのである。諸君も心を廣くして、我に報をせよ、(我わが子に對する如く言ふ)、不信者と轆くわを同うするな、釣合はぬ」とパウロが叫んだときには、口授をうけてゐるテモテは其語氣熱するに感激したことであらう。パウロはコリント教會の狀態を悲んだが、ビリピでテトスに逢ふに至つてやゝ慰を得た。初の手紙はコリントの人々に不快を與へたと思ふが、然しその爲に教會が反省して、反對者を除名したのだから結構であつた。

パウロはまた、初めテトスをコリントに遣すとき兄弟達のことを讃めて置いたが、今やテトス自身から兄弟等の彼に對してなした親切について讃辭をきくのはうれしいとも書いた。テトスはパウロの側にて聞いてゐたのだから、此言に間違かあれば訂正を乞ふたであらう。

## 一七八 愚 かな 誇

テサロニケ・五十歳から六十歳

此書簡中に金錢のことについて書いてをるが、彼のみすほらしい苦難に打たれ夜晝自ら糊する爲に針と織機はたとに親んでゐる旅行者パウロが、自分の爲に求めないで、遠くのエルサレムの貧しい信徒達の爲に知らない人々にまで寄附を求め、救済の方法を講じたのは、眞に感すべきことである。パウロ

の計畫は如何の程度までであつたか不明であるが、もし神殿税に効うて、中央のエルサレム教會の爲に全世界から集金しやうとしたものならば、あまり長くは續かなかつたやうである。マケドニアの信徒達は自由に據金した、コリントの兄弟等もパウロがマケドニア人を連れて往くまでに金を集めておくやう命じた。テトスが此手紙を持つて往くときにマケドニアで非常に尊敬されてゐる一人の兄弟を連れてゆく、其人が彼と共に寄附金をエルサレムに持ち上る筈である。

書簡は此邊で終るかと思ふと、更に筆を起して、バリサイ宗のユダヤ人に對する反對論を書いてをる。中には皮肉な、高慢な、愚しい言葉が用ゐられてあつて、パウロ自身も、是は神の導でなく、暫く人の弱い感情をもらしたものだと言つてをる。今は大して問題とするに足りないが、當時のコリント教會員には興味ある、面白い、教訓ともなつたであらう。

パウロは云ふ、少し自分の愚な誇をゆるして貰ひたい。バリサイ派のユダヤ人等は、パウロは他人の飯を食はないから使徒ではないと云ふが、本統はパウロは最高の使徒にも劣らぬ者である。パウロはたゞコリントの教會員を煩はさない爲に他教會から金を得たのであつて、アカヤの人々は誰もパウロの獨立生活の誇を云々する者はない。こんな事を云ふのは愚しく聞えやうけれど、一寸その愚な誇を許して貰ひたい。と書いてさて、ダマスコ途上で太陽よりも輝く光に打たれた時から今日迄遇うたパウロの苦難を數へる時にはペンを止めて考へたであらう。今更の如くパウロの眼底には夢幻の如く



雑多の光景が浮んだことであらう。

誇は賢いことではないとは知りつゝもパウロは十四年前バルナバが彼をタルソに發見した頃、見た幻覺に就て、他人のことの如く述べてをる。彼は第三の天に登つたと夢みた（教法師達は雲の上には七等の天があると考へたのである）そして奇妙なことを聞いた。こゝでパウロは一刀秘密を教へてをる。この幻覺に關聯して、またパウロが餘りに誇ることの無いやうパウロの體には一の弱點が與へられてをる、何か彼を謙遜ならしめる爲に遣された惡靈かとさへ思はれる。パウロは三度も其弱點を取去られんことを祈求めたが、神は恩恵は充分であると云つて許されぬ、而してパウロの體の弱きに於て神の靈的の力は最完全に行はれてをる。パウロが「肉體に一つの刺」と云つてをるのは何のことか、色々説をなす者があるが、それは何でもよい。パウロが高尙な幻覺を見る時に妨害となる肉體上の缺點に相違ない。幻覺高ければ高い丈け却て彼の肉は弱かつた、そして苦痛も非道かつた。人は感情の極點に達した時同様の經驗をなめる、肉體は引裂かるゝ如き痛の中に、心は幻覺を見るのである。パウロもかゝる場合に普通では見得なかつた幻覺を見たのであらう。

パウロは更にペンをつゞけて、今や第三の訪問をするつもりであるが、例の反對者等は、先づ以て先驅者を送つて金を集めて置くなどは、狡猾いと云ふであらうと云つてゐる。またパウロの行くまでに偶像禮拜にまひ戻つてをる者は悔悟するやうにせよ、愈行つたら證人によつて調べて、誤れる者は

許容しないと警告してをる。

パウロは此度は最後まで自ら筆を執らず、最後の言もテモテに命じて、

「後に云はん兄弟よ、諸君よ喜べ、全くなれ、慰安をうけよ、心一つにせよ、睦み親しめ然らば愛と平和との神なんぢらと偕に在さん。」と記させたのである。

仲々長い手紙である。是も他の手紙と同様、清書され、巻いて包皮を施し、テトスが大切に其を預つてコリントに運ぶのであつた。

## 一七九 救濟寄附金

テサロニケ・五十歳から六十歳

テトスをコリントに送出した後、パウロとテモテはテサロニケに留つた。勿論市中に寂として居ないでマケドニヤ國中を東西に廻つて、夏と秋とを過した。マケドニヤの北イルリコまでも足を伸してイエスの道を傳へた。そして到る處クリスチャンに逢へば必ずエルサレムの貧しい人々の爲に寄附金を出すやうに勵めた。この頃人々に説いたところは、左の一節によつて大凡想像し得る、

「兄弟よ、時と期につきては諸君に書送るに及ばない。諸君は主の日が盜人の夜來るが如くに來ることをよく知つてをる。人々が平和無事であると言ふうちに滅亡にはかに彼等の上に来るであらう。…



…されど兄弟よ、諸君は暗にをらないのだから、盗人の來るごとく其日が諸君に追及くことはない。諸君はみな光の子ども晝の子供である。諸君は夜に屬く者でない、暗につく者でない、されば他の人のごとく眠つてはならぬ、目を覺して慎まねばならぬ。眠る者は夜眠り、酒に酔ふ者は夜酔ふのである。されど我等は晝に屬く者であるから、信仰と愛との胸當を着け、救の望の兜をかむりて慎むべきである。神は我等を怒に遭せやう爲ではない、主イエス・キリスに頼りて救を得させやうと定め給うたのである。主が我等の爲に死に給ふたのは、我等をして寤めをるとも眠りをるとも己と共に生くることを得させる爲である。此故に互に勸めて各自の徳を建てよ、これ諸君が常に爲すべきことである」

然しテサロニケに最後の別を告げなければならぬ時が近づいた、彼の居ることは此邊の信徒にとつて偉大なる刺戟であつたが、彼はやがて青い灣をベレアへと下らなければならなかつた。送別會が例の如く開かれて、テサロニケの兄弟等はパウロと別れることを悲んだ。彼はコリントに往く。白い市の廣い街を茶色の旅装で歩く彼を再び見ることが出来るであらうか。ヤソンの家で最後の集會の催された時パウロの言は如何に優しかつたか、テサロニケ教會にあてた手紙の一節に曰ふ、

「兄弟よ、我等は諸君につきて常に神に感謝をしてをる。これ當然のことである。それは諸君の信仰大に加はり、各自みな互の愛を厚くしたからである。されば我々は、諸君が忍べる凡の迫害と患難との中にありて保ちたる忍耐と信仰とを神の諸教會の間に誇つてをる。これ神の正しき審判の光であつ

て諸君が神の國に相應しき者とならん爲である。……これに就きて我々が常に諸君のために祈ることは、我等の神が諸君をして召に適ふ者たらしめ、能力をもて諸君の凡て善につける願と信仰の業とを成就せしめ給はんことである。これ我等の神及主イエス・キリストの恵によりて我らの主イエス・キリストの御名が諸君の中に崇められ、又諸君も彼に在りて崇められん爲である。

「兄弟よ、我等の主イエス・キリストの來り給ふこと、又我等が主の許に集ふことにつきては諸君に求む。或は靈により、或は言により、或は我等から出でた如な書により、主の日すでに來れりと云つて容易く心を動かし、かつ驚かないことを。誰が如何にするとも、それに欺かれな。その日の前に背教の事があつて……神と稱ふる者や人の拜む者に逆ひ、此等よりも己を高くし、遂に神の聖所に坐し己を神として見せる者がある。我れ諸君と偕に在つた時これらのことを告げたことは諸君が憶えてゐる筈である。……されど主に愛せらるゝ兄弟よ、我等はいつも諸君のために神に感謝せざるを得ない。神は御靈によれる潔と眞理に對する信仰とを以て始めから諸君を救に選び、また我等の主イエス・キリストの榮光を得させんと我らの福音を以て諸君を招き給ふが故である。されば諸君よ、堅く立ちて我らの言あるひは書に由りて教へられた傳を守れ。我らの主イエス・キリスト及び我らを受し恩恵をもて永遠の慰安と善き望とを與へ給ふ我らの父なる神、願くは諸君の心を慰めて、凡の善き業と言とに堅うし給はんことを。」



パウロはこゝにイエスの再臨について論じてをるがローマ皇帝の像が神殿に祀られることに就て述べてをるから見れば、彼が五年前にテサロニケの信徒に教へて、毎日再臨を待たせた頃とは違つて、直ぐに此事のあるを豫期しないやうになつたらしい。

教會の老幼男女は涙ながらにパウロ等を見送つた。秋の日は暑く、野は焼けて黄色に、森の枯葉、紅葉は波のごとく風にさゞめいてゐた。三日路にしてペレアに下つた。町には細流がすゞしくせゝらいでゐた。こゝにも澤山の信徒が待つてゐて、天來のパウロの聲をきかんことを求めた。此町の家は小さかつたので、内では忽ち人が一ぱいになつた。多分戶外で集會を開いたであらう。此頃書いた手紙に寄附金を募集して救助したエルサレムの貧しいクリスチャン達の爲に述べた一節がある。

「それ少く播く者は少く刈り、多く播く者は多く刈るのである。おの／＼吝むことなく、強ひてすることなく、その心に定めた通りにせよ。神は喜びて與ふる人を愛し給ふのである。神は諸君をして當に凡の物に足らざることなく、凡の善き業に溢れしめんために、凡の恩恵を溢るゝばかり與ふることを得給ふのである。」彼は散らして貧き者に與へたり。その正義は永遠に存らん」と録してある通りだ。播く人にも種をあたへ且これを殖し、また諸君の義の果を増し給ふであらう。諸君は一切に富みて吝みなく施すことを得、かくて我等のことにより人々神に感謝するに至る。此の施濟の務は、ただに聖徒の窮乏を補ふばかりでなく、充ち溢れて神に對する感謝を多からしめる。即ち彼等は此の務を證據

として、諸君がキリストの福音に對する言明に順ふこと、彼等にも凡の人にも吝みなく施すことゝに就きて、神に榮光を歸し、かつ神が諸君に賜うた優れたる恩恵により諸君を慕ひて諸君の爲に祈るであらう。言ひ盡しがたき神の賜物につきて感謝する。」

## 一八〇 コリントへ

デアム・五十歳から六十歳

パウロはエベソを出る時に豫定したマケドニアの各地巡回を終へたので愈コリントに向ふことにした。ペレヤを去る時例の如く熱心に獎勵の言を残したであらう。

「兄弟諸君に求む、諸君の中に勞し、主にありて諸君を治め、諸君を訓戒する者を重んじ、その勤勞によりて厚く之を愛し敬へ、また互に相和けよ。兄弟よ諸君に勸む、妄なる者を訓戒し、落膽した者を勵し、弱き者を扶け、凡の人に對して寛容なれ。誰も人に對し惡をもつて惡に報いぬやう慎め。ただ相互に、また凡の人に對して常に善を追ひ求めよ。常に喜べ、絶えず祈れ、凡てのこと感謝せよ、これイエス・キリストに由りて神の諸君に求め給ふ所である。御靈を熄すな、預言を蔑すな、凡のことに試みて善きものを守り、凡て惡の類に遠ざかれ。願くは平和の神、親ら諸君を全く潔くし、諸君の靈と心と躰とを全く守りて、我等の主イエス・キリストの來り給ふとき責むべき所なからしめ給はん事



を。諸君を召し給ふ者は眞實であるから之を成し給ふであらう。兄弟よ我等の爲に祈れ。……願くは主イエス・キリストの恩恵、諸君と偕に在らんことを。」

ペレアを出たパウロ等は河口のデアムに來た。こゝにも前に尋ねた折よりは多くの信者が出來て心から彼等を迎へたであらう。パウロは彼等に何を説いたか、

「我は神の賜ひたる恩恵に隨ひて熟練なる建築師のごとく基を据ゑたのである、而して他の人がその上に建てるのである。されど如何にして建つべきか、各自心して爲なければならぬ。既に置きたる基のほかは誰も据ゑることは能きぬ、この基は即ちイエス・キリストである、人もし此基の上に金、銀、寶石、木、草、藁をもつて建てるならば、各人の工は顯はれるであらう。かの日これを明かにするであらう。かの日は火を以て顯はれ。その火おのゝ工の如何を驗すのである。」

海を渡つてコリントに着いたパウロは直ちにガヨスの家に客となつた。ガヨスは富祐で大きな家に住んでゐた。パウロ到着の報は忽ち全市に傳つた。残つてゐたエルサレムからのユダヤ人等は尻に帆をかけて遁出したものか、パウロに會つたことが記されてない。黨を作つて分裂を事とした連中はパウロの聲をきいて震えたであらう。パウロの言は前に此教會に書送つたものによつて大抵想像がつく。

## 一八一 悪弊を摘出して

コリント・五十歳から六十歳

ガヨスの家の大きな二階はギリシヤの赤や白の着物を着た男女のクリスチャンで一杯になつた。壁側に立つてゐるものもあれば、戸口にあふれ、窓にのつてゐる者もある。パウロは其中に立つて、手を擧げて靜肅を求めた。見るとパウロの頭は餘程白くなつた。が其眼は相變らず炯々と光を放つてゐる。

「われは諸君がキリスト・イエスに在りて神から賜うた恩恵に就いて常に神に感謝する。諸君はキリストに在りて、諸般のこと即ち凡の言と凡の悟とに富んでゐるからである。」

「兄弟よ、我等の主イエス・キリストの名に頼りと諸君に勸める、おのゝ語るところを同じうし、分争する事なく同じ心、おなじ念で全く一つにあれ。わが兄弟よ、諸君の中に紛争があることを我は聞いた。即ち諸君はおのおの、我はパウロに屬すとか、われはアポロにつく、我はケバにつく、我はキリストにつくとか言つてゐるさうだ。キリストは分たれる者であらうか、パウロは諸君の爲に十字架につけられたか、諸君はパウロの名によりてバプテスマを受けたのか。我は感謝する。クリスボとガヨスとの他には、諸君のうちの一人にも自分でバプテスマを施さなかつたことを、これ我名によりて諸君がバプテスマを受けたと人の言ふ事のない爲である。またステバナの家族にバプテスマを施した事があるが此他にはバプテスマを施したことがあると思はぬ。そはキリストが我を遣し給うたのはバ



グテスマを施させる爲でなくて、福音を宣傳へさせる爲である。而して言の智恵をもつてせず、是キリストの十字架の虚しくならない爲である。

「兄弟よ、われ靈に屬する者に對する如く諸君に語ることが出來ず、反つて肉に屬する者、即ちキリストにある幼兒に對する如く語つたのである。われ諸君に乳ばかり飲ませて堅き食物を與へなかつた、諸君は其時食ふことが出來なかつたからである。今もまだ食ふことが出來ない、今もなほ肉に屬する者だからである。諸君の中に嫉妬と紛争とあるは、これ肉に屬する者であつて世の人の如く歩むのではないか。或者は、われパウロに屬すと云ひ、或者は、われアポロに屬すと云ふ。これ世の人の如くあるのではないか。アポロは何者ぞ、パウロは何者ぞ、彼等はおのおのの主の賜ふところに隨ひて、諸君をして信ぜしめた役者に過ぎないのである。我は種ゑ、アポロは水灌いだまでである、されど育てたるは神である、されば種うる者も、水灌ぐ者も教ふるに足らない。たゞ尊きは育てたまふ神である。種うる者も水灌ぐ者も歸する所は一つであるが、各自おのが勞に隨ひて其價をうるであらう。我らは神と共に働く者である。諸君は神の島である。また神の建築物である。

「コリント人よ、不信者と輓を同するな、釣合はないではないか、義と不義と何の干與があらうか、光と暗と何の交際があらうか、キリストとベリアルと何の調和があらうぞ、信者と不信者と何の關係があらうぞ。神の宮と偶像と何の一致がある、我らは活ける神の宮である。即ち神の言ひ給うた通り

である、曰く、われ彼等の中に住み、また歩まん、我かれらの神となり、彼等はわが民とならん、と。その故に、主いひ給ふ、汝等彼等の中より出で、之を離れ、穢れたる者に觸るなかれ、さらば我なんぢらを受け、われ汝らの父となり、汝等わが息子、娘とならん、と全能の主いひ給ふとある。されば愛する者よわれら斯る約束を得たれば、肉と靈との汚穢から全く己を潔め、神を畏れてその清潔を成就しなければならぬ。

「我らを受け容れよ、われらは誰にも不義をした事なく、誰をも害うた事なく、誰をも掠めた事は無い。わがかく云ふは諸君を咎めん爲ではない、我が既に言つた如く、諸君は我らの心にあつて共に死に共に生くるのである。我は諸君を信すること大である。また諸君を以て誇とすること大である。我は慰安にみち、凡ての患難の中にも喜悅あふれるのである。マケドニヤに到つたとき我らの身はまだ聊かも平安を得ないで様々の患難に遭ひ、外には紛争内には恐懼があつた。けれども哀れなる者を慰むる神は、テトスの來るによりて我らを慰め給うた。唯來たばかりではない、彼が諸君から得た慰安を以て慰め給ふたのである。即ち諸君が我を慕ふこと歎くこと、我に對して熱心なることを我らに告げたことによりて我ます、喜んだのである。われ書を以て諸君を憂ひさせたが悔いはしない、あの書が諸君を暫く憂ひさせたのを見て前には悔いたが今は喜ぶ。諸君が憂ひたからではない。憂ひて悔改に至つたのがうれしいのである。諸君は神に従うて憂ひたのであるから我等から聊かも損を受けな



かつたのである。それ神に従ふ憂は、悔なきの救を得るの悔改を生じ、世の憂は死を生ずる。視よ、諸君が神に従うて憂ひたことは如何ばかりの奮勵、辨明、憤激、恐懼、愛慕、熱心、罪を責むる心などを諸君のうちに生じたかを。諸君はかの事につきては全く潔きことを表はした。されば前に書を諸君に書き贈つたのも、不義をなしたる人の爲ではない、また不義を受けた人の爲でもない、我らに對する諸君の奮勵が神の前で、諸君に顯れん爲であつた。この故に我らは慰安を得た。慰安を得た上にテトスの喜悅によりて更に喜んだ、それは彼の心が諸君一同によりて安んぜられたからである。」

斯様にしてパウロは敵の播いた悪い教の苗を引抽いた。教會の人達も喜んで其指導に従ふて、パウロの教を正しいとした。此頃からパウロは貧困ではなくなつた。父の死の爲に遺産が手に入つたとも云はれてをるし、またピリピやアンテオケの信徒達は、パウロを貧乏で困らすことを欲しなかつた。これからはパウロが天幕業をやつて糊口の道を得たと云ふことが書されてないし、又信徒達から衣食の料を出させることもしなかつたやうである。前にコリントに居た時は織職アクラの處に寄寓したが今度は市の會計役でも喜んでパウロを迎へたであらう。かの柔和なガリオがまだローマ總督であつたならば、パウロに再會することを悦んだであらう。此度は滞在僅に三ヶ月であつたので、春に行はれるイスマニヤン競技の大會に集る群衆を見ることは出来なかつた。

## 一八二 日光の頂に立ちて

コリント・五十歳から六十歳

コリントの四邊は冬景色に閉ぢられて、遠くの山々は白く、兩側の海上には船路絶え、陸路往く車馬の音も聞えず、市場には春夏の賑を見る事が出来なかつた。

パウロとその供の人々、テトス、テモテ等はコリントに冬籠りしてゐたが、さて次にパウロの往く處は何處？ パウロはかねてから一度ローマに往き度いと思つてゐた、アクラ夫妻からローマには既に立派な教會が出来てをると聞いて一層其心を厚うした。將來の計畫を思ふ彼の胸中高くローマが浮出た。全世界に福音を傳へよとのイエスの命令はパウロが夢にも忘れぬところである。クリスチャンとなつても神殿に詣で、祭司の銀の喇叭を聞いて喜ぶ者もあつたが、パウロを呼ぶ喇叭は一層音高く聞えた。死せる偶像を拜んで暗の中に住む人々にイエスの福音を傳へよとの御聲である。彼にとつてローマ帝國は即ち世界であつた。彼は既に海陸を東西に旅して、國々を巡り帝國內の市町村を數へ切れない程澤山に訪ねて、イエスの弟子達は各國民各國語の間に廣まつてをる今若しローマの首都から福音の光が四方に發射せられたなら、眞に世界の極まで救主の名を聞くことになるであらう。彼は元より、イエス前五百年頃孔子や釋迦の教に歸依した支那及印度にある無數の人間のことは知らなかつ



たのである。

パウロはローマから来た他のクリスチャン達にも會ひ、ローマ教會の様子をきき、殊にユダヤ人も其中に在ることをきいた。パウロはユダヤ人で信者になつた者の困ること間違ふこと、長所、弱點をよく知つてゐた。ガヨスの家に取巻かれて何不自由なく暮してゐるパウロは靜に來し方將來を考へることが出来た、そして是迄随分活動した事を想うた。實に彼は今や日光輝く絶頂に立つてゐた、是から先は蔭の方に足を向けるのである。パウロは其を自覺してゐた。平たい家の屋根に、冬の日光を浴びて立てば青い海に島々の點々たるを見る。その霧の中なる島々の向ふはアテニス、其又向ふの山々の彼方が帝威光るローマである。然し其處に往くまでには、まだ多くの仕事がある。

そこで彼はローマの信徒達に一書を送ることを考へた。彼の言ふ一度も聞いたことの無い人々に初めて書くのであつた。是迄の手紙には自分の教へたことについて回想を促したのだが、此度は初から何もかも書下さなければならぬ。何から書かうか。パウロは信者となつて以來二十四年、今日までキリストと其教の他何も考へなかつた、諸方に幾多の困難と闘うて傳道をし、多の經驗を積んだ、最早やイエスの名を演しながらダマスコに迫つて往つた若者の面影を片影だも留めてない。初めて會堂に立つて信仰を告白した時のパウロとも大に違つてゐる。彼の心は日光の前の花の如くイエスに向つて開いた。初め彼を煩した事物は最早や何の苦勞でもなくなつた。彼の心を怒らせた事も今は心を亂さ

なくなつた。榮えある福音に育つてゆくに随つて、福音の價は益廣く、高くなつた、恰も頭上の天の如く、一つの金光、その深さも榮も量り難きものを、中心として、高尚なる思想と感情が渦巻くのであつた。

此ローマ書に於て、パウロは先づユダヤ人の爲に自分の體驗した福音を説いた。然し書いてをるうちに、パウロは活けるイエスと其教を書表はすことの眞に不充分なことを感じない譯に行かなかつたであらう。パウロと其書き物の今日に残されたものが如何に偉大であつても、其は聖なるイエスの顔の影、罪を犯したことの無い、口に惡を言つたことの無い彼の聲の反響に過ぎないのである。

手紙はほつ／＼書かれたであらう。聖書の句を引いてをる數から云つても充分注意し想を練つたものに相違ない。尤もパウロは少年時代に教法師から聖書を暗誦させられてゐたので、新しい問題毎に適當な聖句を引出すことは容易であつた。ローマ書に於て豊富な思想ばかりでなく、時に教法師らしい議論家めいた長い所説のあるのは是が爲である。

パウロの口授をうけて此手紙を書いたテルテオは、自分が書記役をつとめた事を誇として、其事を卷末に記してをる。自分の挨拶も書加へたところを見るとローマの人であつたらしい。手紙はローマにあるクリスチャン全體に宛てたもので、ローマ教會の信仰はローマ帝國到る處に知られてをる。パウロも常にローマに往つて傳道したいと思つてをることを書いた。ローマ書の或部分は本書中既に引



用した、また後にも引くつもりである。でローマ書其物は讀者自ら聖書について播讀せらるゝに任せ  
る。そしてこゝには其骨組丈けを紹介する。

パウロは舊約書の一節を引いてイエスの福音の力を説いた、世の初から神は人の良心の中に己を現  
し給うたが人は之を敬ふことを爲さないで却て鳥獸を拜した。ローマの信徒の中にはユダヤ人が居てま  
だユダヤの宗教法律にかぎりついてゐるが、割禮の記は何にもならない、必要なのは内の變化である。  
ユダヤ法を守つて義を得ると云ふ方法は過去のことになつた、イエスを信するによりて義を得る新方  
法の時代である。信者が善に移つた時に舊い生命は死んだのである。善良なる新生涯はイエスが死に  
て甦りし如く、信徒の心の中の復活に於て發生したのである。

ユダヤ法は死んで信仰のみ生きてをる。パウロの中にも惡が働いたが、イエスの靈によつて惡から  
救出された。パウロはイエスから離れてもユダヤ人さへイエスに導かれ、ば其で満足なほどに同胞を  
愛してをる。

この様な風は大書簡の作文はテルテオのベンの下に日々進められた、テルテオは恐らく訓練された  
書役で、テモテより手が早かつたのであらう。

### 一八三 エルサレム・ローマ・スペイン

コリント・五十歳から六十歳

友達は驚くばかりの眞理が炎の如くほとばしり、六ヶ敷い深遠な理論が續々として出づるに眼をみ  
はつて側に坐つてゐる中で、パウロはローマ人への手紙を書きつゞけた。

教法師流の長い議論の中にパウロはアブラハム、イサク、ヤコブ、サラ、リベカ、エサウ、モーセ  
等に言及し、忽ち福音の中心に移つて、イエスを主と告白し、神がイエスを死人の中から甦らせ給う  
た事を信すれば救はれるのであると説いた。偉大にして而も單簡なる言語を用ひて、彼はイエスの道  
が、ユダヤ法の果しない込入つたものに較べて如何に入り易きかを同胞に示してをる。

ユダヤ人から今度は凡の信徒に向つて立派な思想を披瀝したが、その言のうちにはイエスの教訓の  
輝を認めることが出来る、

「諸君を責むる者を祝し、これを祝して詛ふな。

「喜ぶ者と共によろこび、泣く者と共になげ。

「相互に心を同おなし、

「高ぶりたる思をなさず、反つて卑きに附け。

「諸君、己を聴きこしとするな。

「惡を以て惡に報いず。



「自ら復讐するな、ただ神の怒に任せまつれ。」

「もし汝の仇讐をば之に食はせ、渴かば之に飲ませよ。」

「惡に勝たるゝことなく、善を以て惡に勝て。」

「人を愛するは、律法を全うするのである。」

これ等基督教の頂上から、彼は谷に降つて毎日の行事行爲について説いてをる。信者はローマの支配者等に從順でなければならぬ、そしてよき市民となり、凡の税を拂ふて負債なく、何の恐も無き者とならねばならぬ。人は食物によつて善くも悪くもならない。

「それ神の國は飲食ではない、義と平和と聖靈によれる歡喜よろこびとに在る。」

パレスチナのエルサレムからマケドニアの先のイルリコまでも、パウロはイエスの名を知らない人々の間に福音を傳へた。幾度もローマに往き度いと思つては阻まれた。けれども今はもう他に行くところもないから、スペインに往く途中にローマを訪ねるつもりである。其前に先づエルサレムを訪ねて、マケドニアやギリシャで集めた寄附金を置いて來なければならぬ。其用が濟めばスペインまで行き度いから途中ローマに寄る、其長い旅を援助してくれるやうに頼む。ローマ教會は他の人が建てたものであるからパウロは長く滞在するつもりは無い。エルサレムには敵がある。どうか自分がエルサレムの貧しい信者達を救濟する使命を終つたら、故障無く喜悅んでローマに往くことが出來て、そこ

に休を得ることが出来るやうに祈つて貰ひたい。

手紙の終は人々に對する挨拶や傳言である。此手紙をローマに持つて行く人は危險を冒して重大なる責任を果さなければならぬ。パウロは其人選に注意したであらう。不思議なのは其がケンクレヤの一婦人ファイベであつたことである。ファイベは多の人々をよく助けた人であるから、ローマ教會の人々は彼女の必要に應じて援助を惜んではならぬ。パウロは嘗てコリントの教會に婦人の役員たることを禁じたやうであるが、ファイベはケンクレヤ教會の一役員であつて、多の人の助け手として婦人の總監として今日に傳へられてをる。

手紙を書く前にパウロは種々ローマ教會の人達のことを訊いたものと見えて、廿六名の男女の名を挙げ、名を記さない友達また家々に集會を開いてゐた五個の會衆に挨拶を送つてゐる。其中には古い友達のアクラ夫妻がある。彼等はかつてパウロの爲に命をも危くした。六年の後此謙遜な織職夫妻は此大都に歸つて、前の如く自分の家を集會所に提供してゐたのである。彼等はコリントに基督教を初めて傳へた者とも云ひ得る、其上パウロを宿め、エペソではパウロを救出し、アボロを教へ、到る處で自分達の家にクリスチャンを集めたのである。

婦人に對する挨拶の中に殊に一人のユダヤ婦人マリヤを名指してをるが、彼女は多の働をした者であつた。男子のうちアンデロニコとユニアスはパウロと親戚で、使徒であり、パウロよりも先に信者



になつた者だと云つてをる。此等のローマに在るクリスチャンは、ユダヤ人、ギリシヤ人、ローマ人いろ／＼で、或者は自由民、或者は奴隸であつた。若しパリサイ派クリスチャン等がローマに往くやうな事があつたら警戒せよ。パウロの友テモテ、ルキヨ、ヤソン、ソシバテロ、パウロの家主ガヨス町の庫司エラスト及びコリントの凡の教會員が挨拶を送る。

かうしてパウロの書いた最大の書簡は書下され、訂正され、清書された、其役はテルテオである。そして多分コリントの全會衆の前で一度讀まれたであらう。其上でパウロの署名、印を捺して、巻物にし、上に毛皮を被せて縫合せて濕氣をふせぎ、忠實で勇敢な婦人フィベに委託されたのである。フィベは冬の海を物ともせず、ローマへ、否世界への貴い光を預つて首都へと旅立つたのである。彼女が其使命を果したのは確であるが、其後どうなつたのか再た彼女に就て書さるゝ處がない。テルテオやガヨス及町の庫司エラストと共に、彼女は此大書簡の一節に一瞬の間現れて、再た其姿を表はさない。けれども彼等の名は世界の寶物の一部をなすものである。

## 一八四 心後る、エルサレムへの旅

コリント・五十歳から六十歳

二月の終頃には早く春風が吹初めた。港に繋かれた船舶は航海の用意にかゝつた。パウロの爲にエ

ルサレム、ローマ、スペインに旅すべき時期が到来した。

エルサレム教會のヤコブ其他の使徒達が、貧民の爲に寄附金を募集するやうかねてパウロに依頼して來たので、パウロはシリヤ、アジヤ、ガラテヤ、マケドニヤ、アカヤ諸國の信徒から義捐金を集め或處ではわざ／＼人をつけて寄附金を持たせたので、コリントでは大金が集つてゐた。神殿税を持つて行くユダヤ人が時々盜人に逢うたので、パウロは専ら無事に此金をエルサレムに持つて往き度いものであると思つた。其上に彼の心には、こんなに大金を集めて行つても果してエルサレムの人達が好意を以て迎へるや否大なる疑問を抱いてゐた。何だか一度入つたら遁出ることが出来ない危険に身を投じるやうな氣持がしてならなかつた。

然し最初の危険は直ぐ近くでユダヤ人によつて企てられた。パウロも矢張ユダヤ流に逾越節を守るつもりであつたから、逾越節の頃迄にエルサレムに到着したいと云ふ考があつた。船が約束せられて、送別の會も開かれた、パウロの前には或は牢獄が待つてをる。再び此教會と相見ゆることが出來やうか。パウロは熱血を迸らして最後の奨勵を試みた。

「我がエベソで獸と闘つたことが若し人のごとき思ひしたならば何の益があらうぞ。死人がもし甦ること無いならば『我等いざ飲食せん、明日死ぬべければなり』である。諸君欺かれな、惡しき交際は善き風儀を害ふのである。諸君醒めて正しくせよ。罪を犯すな。諸君のうちに神を知らぬ者がある。



斯く言ふは諸君の反省を促したいからである。死人がどうして甦るか、どんな體を以て來るだらうと云ふ者もあらう。愚なる者よ、播く所のもの先づ死なねば生きない、播く所のものは後に成るべき體を播くのではない、麥でも他の穀でもたゞ種粒である、然るに神は御意に隨ひて之に體を予へ、各種にその體を與へたまふ。凡ての肉、同じ肉ではない、人獸鳥魚あり、天上の體あり、地上の體あり、日、月星あり、此の星は彼の星と光を異にする。死人の復活もまたこの通りである。朽つる物にて播かれ、朽ちぬものに甦へされ、卑しき物にて播かれ光榮ある物に甦へられ、弱きものにて播かれ、強きものに甦らされ、血氣の體にて播かれ靈の體に甦らされるのである。血氣の體がある如く、また靈の體がある。錄して始の人アダムは、活ける者となれりとある通りだ。而して終のアダムたるイエスは生命を與ふる靈となつた。我等土に屬ける者の形を有てる如く天に屬ける者の形をも有つことが出来るであらう。

「兄弟よ、血肉は神の國を嗣ぐことは出來ない。朽つるものは朽ちぬものを嗣ぐことはない。視よわれ諸君に奧義を告げやう、我等は悉く死ぬのではない。終のラツバの鳴る時みな忽ち瞬間に化るのである。ラツバ鳴りて死人は朽ちぬ者に甦り、我等は化するのである。この死ぬる者が死なぬものを着るとき、死は勝に呑まれたりと錄された言が成就するのである。死よ、なんぢの勝は何處にかある、死よ、なんぢの刺は何處にかある、死の刺は罪である、罪の力は律法である。されど感謝すべきことを得た。」

には、神は我らの主イエス・キリストによりて勝を與へ給ふ。

「されば我が愛する兄弟よ、確くして搖ぐことなく、常に勵みて主の事を務めよ、諸君はその勞が、主にありて空しくないことを知つてをる筈である。」

さてパウロがエルサレム巡禮を乗せし行く船に乗ると云ふ事が市のユダヤ人の間に聞えた。パウロが一緒の舟で行くのを好まなかつたか、それとも其大金を盗むつもりであつたか、兎に角乗船を見計つてパウロを殺さうと云ふ陰謀が企てられた。其が最後の一秒で發見されてパウロは難を免れることを得た。

そこで眞直ぐにバレスチナに往く計畫を變更して、マケドニヤから來たソパテロ、アリスタルコ、セクンド。アジャヤから來たテキコとトロピモ。ガラテヤ人ガイオとテモテ等と一緒にピリビに往つてそこで逾越節を守ることにした。愈コリントに最後の別を告げ、ケンクリヤに出で再た送別の會が催された。其處から船出して、約二週間たつてネヤポリスにつき、パウロ等はこゝからピリビ市に向ひ、テキコとトロピモはそのまゝ航海をつゞけてトロアスに往つた。

パウロはピリビで大切な友に出會した、其は他ではない前に彼をピリビに伴うた愛する醫師ルカである。彼等がトロアスで初めて會うて以來約六年の星霜を経た。其間どこかで逢うたかも知れないが一緒に旅したと云ふことは記されてない。然し是からはルカはたえずパウロに伴うて危険を分ち試練



を共にし、これなくてはパウロの生涯と旅行について多く知らるゝことの無かつたであらう使徒行傳を著したのである。

パウロは四月の逾越節に間に合ふやうにピリビに來た。ルヂヤの家に人々を集めて例の如く熱心に教を述べたであらう。

## 一八五 窓の少年

トロアス・五十歳から六十歳

ピリビで逾越節週を過したパウロ一行は新にルカを加へてネアポリスから船に乗り、トロアスに渡つた。

こゝで次の便船を待つ七日の間に起つた、ある日曜の不思議な光景がルカの手で鮮に記録されてをる。週の初の日は今このやうに日曜日だとか安息日だとか云はなかつた、たゞ主の甦の日として、信徒達は主の復活を記念すべく未明に一所に集つたのである。市は云ふまでもなく休日ではなかつた、異教徒は一週一日のユダヤ流の休日を顧みはしなかつたのである。彼等は終日集會して夕になると主が弟子達と共に爲し給うたやうに、歌ひ祈り而して指導者がパンをさき以て夕食を共にしたのである。今日も云はれてをるやうに、當時に於ては之を「愛餐會」と稱した。此集會に於て偶像の祭禮になれ

てゐた信徒達がやゝもすれば飲食を亂して過をしたのである。

トロアスには立派な街があつて、高壯な家もあつた。パウロの集會した家は三階建であつた、下の二つの階は日常生活に用ひ、三階は廣間で、外から石の階梯を上つて集會などに用ひたものであつた。何しろパウロが來たと云ふのであるから、漸く百名を容れる位の三階は忽ち満員であつたであらう。外に聲の洩れないやう戸は閉されてゐて、東洋流のランプが幾つも垂されてゐた。夜は暑かつたので上の方の窓丈けが打開かれてゐた。其時パウロの友等は一足先に出て船に乗りアソスで彼を待つてゐたのである。明日は立つて再た來ることも無からうと思つたので、長く話した。其うちに夕の幕は益濃くなつて、紫藍色の大空には星の銀光きらめき初めた、まだパンはさかれなかつた。眞夜半過ぎた頃、突然悲鳴が、起つて大騒が始つた。一人の少年が窓から落ちたのである。彼は高い席に攀上つて外の空を眺め内のくすぶるランプを見てゐた、がやがて溫氣と夜の更けたのと、パウロの長い説教につかれて、思はず眠り込んで、平衡を失ふと窓から外に轉落ちたのである。パウロは話を止めた。直に戸を開いて、下りて見た人達は少年が死んでをると云ふ。パウロも階梯をつたつて降りた、そして昔の預言者がしたやうに斃れた少年の上に身を被せて接吻をした、そして泣叫んでゐる人々に云つた。「諸君騒ぐな。生命はまだ内にある。」この言は少年の近親者等にとつて大なる喜であつた。パウロは少年を其人々の手に任せて置いて皆と一緒に室に歸つた。そして會衆の前に立つて嚴肅にパンを祝し



之を裂いて彼等に分與へた。是がこの所に於ける最後の愛餐であつた。

## 一八六 悲しき別れ

ミレト・五十歳から六十歳

トロアスを立つて陸路アソスに出でそこから先發の友等の乗つてゐる船に入つて、南下することに  
なつた。最初に舟を寄せたのはレスボス島のミテレネであつた。こゝはギリシヤ最大の女詩人サツボ  
の誕生地であつて、其詩は今日まで残つてゐる。尤もパウロが立寄つた前六百年に世を去つた人であ  
る。

そこから帆を上げて益南へスミルナ灣に入つた。翌日キヨス島の向を過ぎてエベソ灣を横り次の日  
サモスに立寄つた。パウロは五月の終に行はれる五旬節に間に合ふやうエルサレムに往くつもりであ  
つたから、故意とエベソに寄らない船を選んで、エベソから二十五哩はなれたこの港に假泊したので  
ある。

翌日帆が上ると、直ぐネアンダー河口の小灣に入つた。ネアンダー河はラオデキヤ、ヒルヤポリ、  
コロス其他の大町村を通過してミレトに灌ぎ、土砂を灣中に流込むのであつた。ミレトは石垣にかこ  
まれた市で四個の船渠があり、船も澤山着いてゐた。奇態な事に、港の岸から程遠からぬ小島の群は

海賊の住家になつてゐて驅逐することが出来なかつた。パウロの船は積荷を下す爲に數日繋留したの  
で、其間にエベソに使者を立て、パウロがこゝに来て居るから教會の人達が逢ひに来るやうに、こ  
れから西の諸國に傳道するつもりであるから、もう會へないかもしれないよしを言送つた。

エベソ教會の長老達は大急ぎで船を驅つてミレトに來た。銀細工屋の騒動でパウロがエベソを逃れ  
出てからもう一年は経つた。互に話は盡きなかつた。パウロはエルサレムに澤山の義捐金を持つて行  
くこと、其處でどんな風に迎へられるか解らないこと、エベソに寄らなかつた理由などを話し、一年  
間のエベソ教會の様子について詳しく訊いたであらう。

さうしてをる内に、再た船出しなければならぬ時が來たので、皆はとある二階に集會を催した。此  
度はルカが側に居てパウロの言つたことを手記してをる。語るも聞くも感慨無量であつた。

「わがアジャに來た初の日から、如何なる狀で常に諸君と共に居つたかは、諸君の知るところである。  
即ち謙遜の限をつくし、涙を流し、ユダヤ人の計略によりて迫つて來た艱難に耐へて主につかへ、益  
となる事は何くれとなく憚らないで告げ、公然でも家々でも、諸君を教へて、ユダヤ人にもギリシヤ  
人にも神に對して悔改め、われらの主イエスに對して信仰すべきことを證した。視よ今われは、心  
翫められて、エルサレムに往く。彼處で如何なることが我に及ぶかは知らない。ただ聖靈いづれの町  
でも我に證して縲紲と患難と我を待てりと告げ給ふ。然し我は、わが走るべき道程と主イエスから承



けた職、すなはち神の恵の福音を證する事とを果さん爲には固より生命をも重んじない。視よ、今われは知る、前に諸君の中を歴巡りて御國を宣傳へた我顔を諸君は皆再び見ることはないであらう。」

一座の面には悲愁の色がさつとたゞよふた。是れ神より告げられたと云ふではないか。

「この故に、われは今日諸君に證する、われは凡の人の血につきて潔い。我は憚らないで神の御旨をことごとく諸君に告げたのである。諸君自ら心せよ、又すべての群に心せよ、聖靈は諸君を群の中に立て、監督となし、神が己の血を以て買ひ給うた教會を牧せしめ給ふ。われは知る、わが出で去つたのち、暴き豺狼が諸君のうちに入り來つて群を惜まず、又諸君の中からも、弟子達を己の方に引入れやうと曲れることを語る者が起るであらう。されば諸君目を覺し居れ、三年の間わが夜も晝も休まず、涙を以て諸君のおのを訓戒したことを憶えよ。」

「われ今諸君を、主および其の恵の御言に委ねる。御言は諸君の徳を建て、すべての潔められた者と共に嗣業を受けしめ得るのである。」

「われは人の金銀、衣服を食つた事はない。この手は我が必要に供へ、また我と共に居つた者に供へたことを諸君自ら知つてをる。われは凡ての事に於て例を示した。即ち諸君も斯く働きて、弱き者を助け、また主イエスが自ら言ひ給うた『與ふるは受くるよりも幸福なり』との御言を記憶しなければならぬ。」

イエスの言を引いたパウロの口は閉された、その半白の頭は垂れ、室内は肅然とした。パウロは深く感激してをる様子であつた。さすがのパウロも離別の情に堪へなかつたのである。そして祈禱の合圖をした。人々は彼を取巻いた、ある者は眼を閉ぢて頭を下け、或者は面を上げ天を睨めてゐた。パウロはエペソの教會員達が信仰に確く立つ爲に、又自分達がエルサレムの危険のうちにも無事であるやうに祈つた。祈るうちに熱い涙が彼の日に焦けた兩頬を傳うた、人々は歎歎いた。彼が立上ると次々に告別に來た、もう聲を上げて泣いた。そして彼が「ふたゝび我が顔を見ないであらう」と云つたので子供のやうにパウロの頸を抱き、母親がするやうに幾度もくく接吻し、愛人のやうにその眼を凝視して永別を惜んだ。そこで別れるに忍びずとくく船まで見送つて行つた。

## 一八七 何ぞ歎きて我が心を挫くか

ツロ・カイザリヤ・五十歳から六十歳

ミレトを去つたパウロ等の船は、コスについた。コスは小島の小さな町であつたが、優美な織物や良い葡萄酒や、アスカラピアスの神殿で名高かつた、また此處には醫學校が有り、卒業生達の送つた標本の山積した博物館があつて多くの良醫を輩出したものである。

こゝを出るとやがて大陸の一角クリオ岬を廻つて進む、ロドスの大島は四十哩の彼方に霞の如く浮



んで見えた。ロドス島は高い森林の山を載せ、アエギアン海の女王と呼ばれてゐた。ロドス港の入口には昔港口に跨る巨大な真鍮像が立つてゐて船舶は股の下をくゞつて出入したもので、世界名物の一であつた。然し地震はそんなものに遠慮は無く、巨像を海中に轉落させてしまつて、パウロ等が入港した時には足ばかりが残つてゐた。此市は造船の盛なので名高く、また市の周圍は花園で飾られてゐて、銅貨にまで薔薇の模様をつけて市の徽章とし、「こゝには毎日陽が照る」と云ふのがこゝの諺であつた。

それから大陸の小港バタラに往つた、バタラは黄色河の河口にあつて、ルキアの首府クサンテスの港であつた。今迄乗つてゐた船はこゝから先に行かないので、更にピニケ行の船を求めて乗更へ、バルナバの故郷クプロ島を望んで左にやり過ごし、シリヤに向つて進み、フォエニシヤのツロに着いた。ツロ港はバレスチナの北に當つて、陸に間近い島の上にある。アレキサンダー大王は此港を攻陥すことが出来なかつたとき、海に石を投じて一哩の石垣を海中に築き上げ、漸く奪取したと云ふ。その石垣を更に廣くし、平たい岩を載つけて阜頭にした。パウロ等の船はそこについたのである。

パウロは土地の事情をよく知つてゐたので、直ぐに信徒達を訪ねて其客となつた。其間に船は荷を下した。ツロの信徒達はパウロの前途を危んで、神の御靈によりて、パウロに、エルサレムに上つてはならないと忠告した。然しパウロの決心は固かつた、七日にしてこゝを辭することになつた。兄弟

達はエベソの人達と同じやうに袂別を悲んで、妻子と共に町の外まで送つて来て、一緒に濱邊に跪いて祈り、相互に別を告げて、パウロ等は船に乗り、彼等は悄然として家に歸つた。

帆が上げられると船はバレスチナの海岸に沿うて南下した。左方には樅樹繁るレバノン山脈相重つてヘルモンの雪嶺に達してをる。僅半日にしてトレマイ港に來た、此港は今アクルと呼ばれ、カルメル山麓の美しい砂濱にある。船はこゝで乗棄てることになつた。そして一日滞在してこゝの信徒達の安否を訪うた。

翌日彼等は陸路をとつてカイザリヤ港に出た。彼等の宿は傳道者ピリポの家であつた。五旬節にはまだ間が有つたので此家に暫く足を留めたのである。カイザリヤの兄弟等はパウロのエルサレム行を危険として引止めた。都の様子は此港を通過して往來する人々によつて毎日新しいことが解つた。ある日アガボと云ふ預言者がやつて來た。彼は信徒のうちでも頭株で、多分アンテオケでパウロを知つてゐた人であらう。彼はパウロ等の處に來て、パウロの帶をとり、己の足と手とを縛つて「聖靈かく云ひ給ふ、エルサレムにて、ユダヤ人、この帶の主を、斯の如く縛りて、異邦人の手に付さん」と言つた。そこでカイザリヤの人達ばかりではない、テモテ、ルカ等一緒に船で來た人達までが口を揃へてエルサレムに上らないやう諫めた。然しパウロはむしろ其諫止を遺憾とした、彼の決意は牢乎たるものであつた。預言者は預言し、女は祈り、男は諫めても、彼の心中の聲は往けと叫んだ。



「諸君は何ぞ歎きて我が心を挫くか。我はエルサレムに往つて、主イエスの名のために、唯に縛らるるばかりか、死ぬることをも覺悟してをる。」

それでも人々は種々止めて見た、けれども彼等の言は岩に砕くる波に過ぎなかつた。遂に彼等はあきらめて、「主の御意の如くなるやうに」と言合つた。

## 一八八 熱心黨と短刀組

カイザリヤ・五十歳から六十歳

何故にカイザリヤの信徒達は、パウロをエルサレムの石垣の内に入れるのを恐れたか、パウロ自身も兄弟達の祈を求め程に己の安否を氣遣うたか。

パウロはエルサレムに澤山の敵を持つてゐた。神殿の祭司、神殿の廊下の教法師達、高等法院の議員等、舊い教の熱心黨などは、ユダヤ教を棄て、異邦人に神の國を公開せんとするパウロの罪は死に當ると考へてゐた。ユダヤ主義のクリスチャン等は凡のクリスチャンはユダヤの宗教律法と舊慣を守らなければならぬと考へてゐたが、パウロは割禮を無視したので、教會から除名さるべきものだと主張してゐた。此種の舊宗教保護派の熱心黨が多數であつて、パウロの主義を了解してをるペテロ等の仲間は少數であつた。

市も非常に混亂の状態にあつた。ローマから派遣されたユダヤの總督ベリクスは、元奴隸であつた人で、残忍な性質であつた。彼が總督としてヨナタンに歸つて來たのは、彼を袖に包んだ短刀で殺させる爲にドロス一派の徒黨に金を握らす爲であつた。熱心黨の人達は國中を徘徊してローマの兵隊と戦つた、そして彼等の秘密結社短刀組は、到る處で敵を斃した。ある時一人のエジプト人がオリブ山に數千の部下を集めてメシヤだと呼號し、エルサレムを陥れて神殿に住むのだと揚言した、其時ベリクスはケドロン谷に兵隊を揃へ、急にオリブ山を包圍して、彼等を捕虜にし、市に通ずる街道の兩側に十字架を立て列べて、一般の警告の爲に、悉く磔に處した。是等の命知らずの律法保護に熱心な短刀組も、時には其節義を金錢に代へて、或は祭司長の爲、或はベリクスの爲に走狗となつた。パウロは誰か教唆する者が有れば、此短刀組が彼に刃を向けかねないことをよく知つてゐた。時恰も麥收穫の終で、祭の爲に入込んだ人が群衆してゐて粗暴な流血事には持て來いであつた。

カイザリヤからエルサレムまでは三日許かゝつた。道連はカイザリヤに居る信徒達も加つて賑かに、道途信者の歓迎をうけた。エルサレムに入つた時、こゝは凡てユダヤ人の町であるから、他の處のやうに、ユダヤ人町を殊更に探す必要はなかつた。カイザリヤから來た友達の案内によつて、クプロ人マナソンの家に落着いた。マナソンは祐福な人であつたらしい。さればパウロの入つたのは小さな家でなくて、高い石垣に圍まれた大な住宅で、總門を入ると中庭があつた、輝く陽を綠樹で蔭し、取巻



く建物の露臺から垂れてをる葡萄蔓の花は美しく咲き揃ふてゐた。總門を閉すと、街との交通が遮斷されて内は靜閑であつた。友人達に取巻かれて久澗を序するパウロは平和であつた、が外は疑問であつた。

翌日は試の日であつた、心は獅子の如く、また慈母の如き旅の教師、その手は幾多の戸を叩き、多の家庭、町村、國土にイエスの光明を傳へたパウロは、エルサレム教會の長老達の前に立つて、一別以來の旅行談をして、彼等が如何に其を受けるかを見なければならなかつた。エルサレムのある信徒達はパウロの後を追うて來て、彼の事業を破壊して歩いた。そしてパウロは彼等をやくざ犬の如く逐返したのであつた。約束した通り大金は集めて來たが、さて其を喜んで受取つて貰へるかどうか、少からず氣になつた。

## 一八九 集めた寄附金

エルサレム・五十歳から六十歳

パウロ等一行は、ヤコブの許に往つた。そこには長老たちも皆集つてゐて、時候の挨拶が済むと、パウロは異邦傳道の物語をした。四年間アンテオケを旅立つて以來、シリヤの國境をぬけてタルソヘタウラス山を上つてガラテヤに入り、デルベ、ルストラ、イコニウム、ピシデヤのアンテオケを訪ね

た。そこからアジヤの蠻地を過ぎてエベソへ、進んでトロアスへ、トロアスからマケドニヤのネヤポリスに航し、ビリビ、アムヒボリス、アポロニヤ、テサロニケから遠くイルリコまでも歴訪した。次にギリシヤのベレヤ、デアムに到り、舟でコリントに往き、そこからビリビへ、またエベソ、トロアス、ミレト、ロドス、其他の町村、島嶼を巡つて來た。

彼は神の番頭となつて、ユダヤ全國が其一つの谷に入つてしまふ程の廣いローマの五大國に福音の種子を播き、數へ切れないほどの市邑を歩いて來た。そして到る處の外國人が活ける神に歸りイエスを信することに躊躇しないのを見た。殊に各所の信徒達はエルサレムの兄弟等に對して好意を寄せた。其證據は今携へ歸つた澤山の義捐金である。パウロがかく云ふとアジヤ、マケドニヤ、ガラテヤなどから送られた使の人々は各皮の財布を開いて教會から託された金を差出し、パウロと共にエルサレムの貧しい兄弟達に對する各自の教會の好意を傳へたのである。

各地傳道の模様就てパウロの言に傾聽してゐた長老達は、ユダヤ以外には出たこともない人々なので、其成功の大なるに驚いて、神を崇めた。たゞし其報告のうちには多少パウロの傳道方法について不同意の點を發見した。エルサレム教會の主義と合はないものがあつた。彼等は前にパウロに就ての色々な報告も聞いてゐたので其と合せ考へた。そこで多少の議論が有つたらしく、記録されてをる言は其一部であるかと思はれる。多分長老達を代表して議長たるヤコブが言つたのであらう。



「兄弟よ、貴君の見る通りユダヤ人のうちに信者となつた者が數萬人ある。皆律法に對して熱心なる者である。」パウロは此言を聞いて驚いたであらう。エルサレムにある殆んど凡ての信徒が、熱心黨になつて、パウロが益廣い考に變つて行つたに反して、彼等はいよ／＼狭くなつたのである。次に聞くのは彼をつけ廻つた探偵のことであつた。コリントから敵を乗せて來た巡禮船は先廻をして着いた丈の仕事をしてゐた。

「彼等は、貴君が異邦人のうちに居る凡のユダヤ人に對つて、その兒等に割禮を施すな、習慣に従ふなと云つて、モーセに遠ざかることを教へると聞いた。

「如何したらよからうか。彼等は必つと貴君の來たことを傳聞くであらう。どうか貴君、我々の云ふ通りにして呉れ。我等の中に誓願のある者が四人ある。貴君は其人達と組んで、一緒に潔をして、彼等のために費用を出して髪を剃らせてくれ。さうすれば人々は貴君に付て聞いたことが虚偽であつて、貴君も律法を守つて正しく歩み居ることを知るであらう。

「異邦人で信者となつた者については、我等既に書き贈つて、偶像に獻けた物と血と絞殺した物と淫行とに遠かるべきことを定めた。」

誓願に與れと言つたのはパウロの身の安全を計つたのではあるが、一面試験とも見られた。パウロは果して此古い習慣を守つて、自分が律法に忠なることをクリスチャン熱心黨の前に公示することを

肯ずるであらうか。是に與るには、パウロは神殿の一室に四人のボロを着た人達と一週間共に籠り、犠牲の四頭の牡羊、八頭の羔、聖餅、油の代を拂ひ、祭司達に金の贈物をし、四人の長い頭髮が刈つて焼却されるとき其側に立つてゐてやらなければならなかつた。貧しい人々が誓願を果す爲に援助してやることは特に宗教的で善い事であると考へられてゐたのである。

パウロは考へたであらう。けれども敢て長老達の忠告を拒絶して無用の紛争を生じ、危険を犯すべき場合ではなかつた。でパウロは從順に其意見に従うたのである、が長老達の智が、却て反對の結果を生むに至つたのは、むしろ皮肉である。

## 一九〇 「イスラエルの人々助けよ」

エルサレム・五十歳から六十歳

オレブ山の橄欖樹は既に馥郁たる花も散り初めて、地上に雪を降らした。ケドロン川岸の夾竹桃は眞紅に燃え、陽にまばゆく輝いて、やがて其影を陰した。然し、も一度ソロモンの廊に立つて昔ながらの西洋杉の丘を見渡したパウロの眼に、王の花園の白や黄金色の百合花ばかりは、シロアムの冷い水に灌がれて元氣よく日光に映えて見えた。

ヤコブの提言に従ふことはパウロにとつて愉快なことではなかつたが、何事にも忠實い彼は、長老



會議のあつたすぐ翌日約束を果すことにした。ナザレ人の誓願と云ふのはサムソンの大昔から行はれてゐた習慣であつた、其意は神に身を獻けて人から離れると云ふのであつて、「ナザレ人になり度い」と希望すれば何時でもなれたのである。然し其誓願を解くには必ず祭司の力を藉らなければならなかつた。かの四人の貧乏人はパウロが費用を持つてくれて、願から解かれることになつたのを喜んだ。但しパウロは先づ行はなければならぬ事があつた。パウロは長い間異邦人と交り共に食ふた爲にユダヤの律法に照して不淨な身であつた、故に四人の者と神殿に入る前に先づ自分を潔める儀式を経なければならなかつた。それが済むと彼は四人と共に婦人の庭の片隅にゐる祭司の處に行つて、自分が四人と共になつて費用を負擔する由を告げた、すると祭司はパウロの善行を賞めるのであつた。

パウロは七日の間神殿に詣で、其間四人の者は牡羊、羔、聖餅、油井に賽錢を上けるのであつた。第七日即ち最後の日まで婦人の庭の隅にあるナザレ人の部屋に入ることを許されなかつた。其處で長い頭髪を切つて之を燃し、初めて自由にされのである。ところがパウロはその一週を無事に了ることが出来なかつた、毎日四人の人達と神殿に詣でてをるうちに、彼が外國傳道の途上立寄つた外國にある會堂のユダヤ人等がパウロの姿を認めずには居なかつたのである。

四五日は長老達の計畫は成功したかの如く、パウロの宮詣では無事に行はれて、熱心黨の人々の満足を得ると思はれた、けれども遂にヤコブ等の考通りには行かなかつた。熱心黨の探偵共は、パウロ

は實は神殿で何の用の有るのでもないと猜疑の眼を瞞つて、彼が四人の者と宮詣でする後をつけ、町の中までも尾行して、異邦から伴うて來た人々と交るのを見届け、特にエベソから來たツロピモとパウロが市中に親しく話してゐたのを見た。こゝに於て彼の一舉一動は少からず彼等の注意を惹くに至つた。パウロが誓願に與つてゐるのは本心からではないと睨んで外庭を四人の者と共に歩くのを注視してゐた。危険が身邊に迫つてをるとも知らず、跣足で陽に照らされた暑い敷石を踏むパウロの足がユダヤ人の外は入れれば死刑になると云ふ上庭を區切る白大理石の欄子の一方に開けた入口を入らうとすると、忽ち敵の手が伸びた。

パウロの敵は突如として其暴威を現した。エベソから來たユダヤ人等に指導された一味の者共は、忽ちパウロを取圍み、神殿の廣庭中に響き亘る大音聲を上げて叫んだ、

「イスラエルの人達、手を藉せ、助け!!!」

人々は白い石段を駆け下つた、廊下からも圓柱の處からも、四方八方からかけ集つた、叫聲はつゞいた、

「この男は、いたる處で、ユダヤ民と律法と神殿とに悖れることを人々に教ふる者だ。」

こゝう聞いた丈けでユダヤ民を憤怒させるに十分であつた、彼等はパウロを瀆神者として八ツ裂にすることをも辭さなかつた。



「そればかりか」彼等はなほも呼つた、「ギリシヤ人を宮に率き入れて此の聖なる所を汚したぞ」  
彼等はパウロがツロピモを宮に率き入れたものと誤解したのである。「宮が汚された、宮が汚された」と云ふ叫は、何よりも人々を騒がした。神殿の庭から庭、否門を出でてエルサレムの町々に此恐しい叫が傳つた、人々は潮の如く神殿さしてなだれ込んだ。パウロが辯解しても聽かばこそ、群衆は十重廿重に圍んで幾人かの手が彼を捕へた。彼等はユダヤ人の庭でパウロの血を流せば更に神殿を汚すことになるので、遮二無二パウロを引ずり出した。婦人の庭から色圓柱の間を、眞鍮の門をくゞつて大理石の段を降り外庭に曳出した。レビ人等は大門をピツタリ閉した。神殿で騒の起るときは閉門するのが法律であつた。

打ち、突き、押し倒して、パウロを西北隅の外門の方に引いて行つた、「殺してしまへ」と云ふのが彼等の叫びであつた、けれどもどうして殺すか、ユダヤ人は罪人を刀で殺すを好まなかつた。絞るか石で撃つか棍棒でなぐり殺すかするのであつた。パウロはもう暴動者の手中にあつた、彼等は最殘忍であつた。理由なぞ知つても知らなくても關はなかつた。たゞ、何處で何時、如何して殺すか、其ばかり考へた。がある者は審判もしないで殺せばローマの隊長ルシヤから非道い罰が來ると云ふことを考へた。

果然、彼等を監視して居る者が有つた、神殿の外庭を取巻く回廊の平たい屋根の上に、直立不動の

人々が居てその眞鍮張の甲冑は陽に輝いてゐた、他でもないローマの兵隊達で、下の庭で祭に集つた人々の間に騒動が起るのを監視して警告を與へるのが彼等の役目であつた。騒動の叫に壓せられて警告の聲が届かなかつた。けれどもアントニオ城には時を移さず人が殺されかけてゐると云ふ報告が行つた。ローマ警備隊はいつでも出動の準備をしてゐた、命令一下忽ち槍や劍を携へて暗い道をかけ階段をすべるが如く下つて外庭に馳付けた。そらローマ兵が來たと云ふと亂暴者達は懼をいだいて、パウロを打ちまくる手を止めた。

槍の石突で人々を突き、劍の峯で、そこらの頭や肩を投つて道をあけながら兵士共は、パウロの處に來て彼の敵を追拂つた。さうすると浮上飾のついた胸當をつけ、いかめしい兜を被た千卒長が、つか／＼と進んでパウロの肩に手をかけた、其は他の人に手をつけさせないと云ふローマ式の合圖であつた、直ぐにパウロの手頭にはローマの手錠がはめられ、其を更に二人の兵卒の手頭に眞鍮の錠でつないだ二人の兵卒はパウロを逃したり、他の人にパウロを傷けさせたりしたら死を以て責任を負はなければならなかつた、何故ならば彼はローマの囚人であるからである。押寄せて來る騒がしい人々に向つて千卒長ルシヤは吃問した。

「これは何人であるか」興奮した人々の喉からしほり出す叫は不明瞭であつた。

「何事をしたのか」更に訊いた。また人々は叫んだが、徒に騒ぐばかりで意味が徹底しない。千卒長



はユダヤ人の無暗な騒亂や宗教上の混亂が大嫌だつた。

「城に曳け！」彼は大喝して兵卒共に命じた。

パウロの周圍を護衛して階段の方に進んで行つた。兵隊が向ふむいたと思ふと群衆は氣が強くなつて盛に罵言を浴せかけた。階段の處で遂にパウロを擔上げなければならぬほど人々は後に押迫つた。ルシヤは彼等の叫聲が餘りにひどいので、是は先に自らメシヤだと云つて、部下が殺されたときに一人逃げて行つたかのエジプト人が捕つたのではないかと思つた。

## 一九一　ルシヤの手中に

エルサレム・五十歳から六十歳

パウロはイエスがユダヤ民の「イエスを除け、イエスを除け」と叫ぶ中に、灰色のアントニオ城の階段を人手に助けられて上つた光景を想起したであらうか。ルシヤは囚人がギリシヤ語で

「われ、貴下に語りてよきか」と話かけたのを聞いて吃驚した。丁度門に入らうとしてゐた。

「お前はギリシヤ語が話せるのか」彼は不思議がつて問返した。「汝はかのエジプト人で、先に亂を起して四千人の刺客を荒野に卒る出でた者ではないか」と云つて兵卒共を止めた。

「我はキリキヤの都タルソのユダヤ人、鄙からぬ市の市民である。どうか民に語ることを許可された

い」とパウロは答へた。

パウロは此ローマ千卒長の公平に信頼し、彼が人民を静め得ることを信じてゐた。ルシヤは、囚人が先の暴動者でない同じユダヤ人で相當地位のある者であり、神殿に正當の用事があつて來た者であることを知つたならば自然靜に開散するであらうと思つたので、階段で話すことを許可した、段の下で陽を浴てゐたユダヤ人等はパウロが早速城の中に引入られないのを見て怪けんな顔をして上を仰いだ。

跣足で、上衣は肩から破れ、頭巾はもぎ取られて亂髮前額に茫々としてかゝり、下衣は血にさへ染つたパウロは、ローマ兵の槍と手牌とを背景にして、下の民をさし招いた。燃ゆる彼の眼にうつるは長袖の教法師、純白衣のバリサイ人、肥満したサドカイ人、各種の色に染めた人々の頭巾と衣、神殿群衆を形成するあらゆる階級の人々の姿であつた。彼の顔は日に焦けて黒すみ、頭からは血さへ流れてゐたけれども多くの人々に知られてゐた、彼も亦見上げてをる不興顔の誰彼を認識することが出来た。彼が鍵を解かれた手を揺してをるうちに漸次人々は靜まつた。好奇心にかられたからである。人靜るや、老練なる演説家は用意充分であつた。

「兄弟たち、親たちよ、今諸君に對する辯明を聽け。」

人々は電氣に打たれた。ギリシヤ語だと思つてゐたのがヘブル語であつた。彼等は益耳を敬て、肅



然とした。

「我はユダヤ人で、キリキヤのタルソに生れたが、此の都で育てられ、ガマリエルの足下で先祖たちの律法の厳き方に遵うて教へられ、今日の諸君のごとく神に對して熱心なる者であつた。」彼等が熱心だと云ふなら、パウロも熱心であつたのだ。パウロは雄辯家であつた、彼等を傾聽させるには先づ其好む處から初めなければならぬ呼吸を心得てゐた。

「我はイエスの道を迫害し、男女を縛りて獄に入れ、死にまで至らせたことは、大祭司も凡ての長老も我に就て證するのである。我は彼等から兄弟たちへの書を受けて、ダマスコに寓り居る者どもを縛り、エルサレムに曳き來つて罰を受けさせやうと思つて彼處に往つたのである。」

「往きてダマスコに近づいたところが、正午ごろ忽ち大なる光、天から出て我を環り照した。その時我は地に倒れ、かつ我に語りて『サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか』と云ふ聲を聞き、『主よ、貴下は何誰であるか』と訊いたところ、『我は汝が迫害するナザレのイエスである』と言ひ給うた。偕に居た者共も光は見たが、我に語る者の聲は聞かなかつた。われ後に訊いた『主よ我は何を爲すべきで御座いませうか』と。主いひ給ふには『起ちてダマスコに往け、汝の爲すべき定りたる事は、彼處で悉く告げられるであらう』」

かくてパウロはダマスコに入り、「律法に據れる敬虔の人であつて其町に住む凡のユダヤ人に令聞あ

るアナニヤ」の處に行つて、彼の忠告により信仰を告白するに至つたことを物語つた。そしてエルサレムに歸り宮で祈つてをるとき主を見たことに就て言つた。

「我に斯く言ひ給うた『なんぢ急げ、早くエルサレムを去れ、人々はわれに係る汝の證を受けぬではないか』と。我はお答した、『主よ我はさきに貴下を信する者を獄に入れ、諸會堂で之を打ち、又あなたの證人ステバノが血を流されたとき、我も其傍に立ちて之を可とし、殺す者共の衣を守つたことを彼等は知つてをるからでございます』と。すると主はわれに宣うた、『往け、我なんぢを遠く異邦人に遣すのである』と」

こゝまで説いて來ると、俄然下に立つてゐた頭株の人達から怒號が起つた、  
「あんな奴は地から除け、生かしておいてはならぬ。」

彼等はいら／＼しながらパウロがイエスの道に變つた話をきいてゐたのだが、もう辛捧が出来なくなつたのである。中には二十五年前イエスがエルサレム郊外で二人の盗人と共にローマの十字架につけられたのを見てゐた者、ピラトの前でイエスを除けと叫んだ者もあつたに相違ない。今タルソの男がこゝに立つて、エルサレムの群衆に向つて、あのガリラヤ人イエスが夢幻の中にかの不淨で偶像信者でユダヤ人嫌の異邦人に傳道せよと命じたなど公言することは、聽くに堪えなかつた。パウロが尙も手を上げて語りつゞけやうとする毎に、また彼等は



「あんな奴は地に置けない、生かしておくものか、殺せ、殺せ」と叫んだ。

パウロが彼等の手の届かない處に安全に立つてゐるのが猶更立腹の種であつた。彼等は益猛り、外衣を脱いで地にたゞきつけ、今にもかけ上つてパウロを引ずり下す勢であつた。ある者は砂を掴んで投上げた。石さへ交るやうになつた。千卒長は止を得ず兵卒に命じてパウロを城中に曳入れさせた。後には群衆の鯨波が暫くつゞいてゐた。

偉大なる心よ、彼はローマの牢獄の門を入つたのである。再び自由の身となることは無いのである。鎖につながれた獅子の如く、これより彼は、此處から彼處へ、或は見せ物にされ、或は判官の前に立たされ、或は友に見られ、或時は濕つほい土牢の中に、或時は金光燦たる宮殿に、或時は動搖ぐ船中に、或時は茅屋の内に導かれるであらう。然し一度彼の上に打被はれた網の目から免れることは出来ないのである。自由に高翔しまた沈淪したる彼の靈魂の爲には、ローマの千卒長が彼の肩に手をかけた時の深大なる意味を知らなかつたのは、むしろ幸であつた。

## 一九二 羅馬の自由民

エルサレム・五十歳から六十歳

ルシヤはパウロがヘブル語で話したので、充分其話も、どうして民を怒したかも解らなかつた。で

自分の部屋に歸るや、一人の百卒長をよんで、パウロに革鞭をあて、真相を白状させるやう命じた。

パウロは手荒く引出された。そして直ぐ何の爲であるか感付いた、ビリビで鞭打たれた經驗が有つたからである。手足を柱に革紐で縛付けられ、露出の背を結目のついた革鞭で血の出るまで打たれるのである。パウロが何を言つても無頓着な兵士達は一切關はず柱にかたく括りつけた。そこに百卒長が笞刑監督にやつて來た。彼が側によるとパウロは憤つた口調で問ふた。

「ローマ人たる者を、罪も定めないうで鞭つはよいか。」

百卒長は、半白頭のユダヤ人をつくづく打眺つてゐたが、叮寧に訊問して其答に満足した。彼は普通のユダヤ人ではなかつた、ローマ法によつて保護されべきローマ市民である。直ちにルシヤの處に行つて、心配さうに報告した、千卒長殿用心です、あの男はローマ市民です。」そしてパウロを訊問して知つたことを話した、二人は審判なしにローマ人を鞭つは大なる罪を構成して、酷しい罰の來ることをよく知つてゐた。そこで二人は急いでパウロの處にかへつて行つた。ルシヤは革紐を解くやうに命じた。そしてパウロに問うた。

「汝はローマ人だと云ふが眞實か」

「さうです」簡単に威嚴な聲でパウロは答へた。千卒長はローマ市民権の威力を知つてゐたので殊更精細にパウロを調べた。そして叫んだ。



「我は多の金を以てローマの民籍を得た。」父母がローマ市民でない者は高い價を拂うて市民権を買つたのである。それでも二流の権しか得られなかつた。

「我は生れながらである」パウロの父は既にローマ市民であつた。パウロは誇らしく答へたのである。ルシヤは却て懼れた。エルサレムのユダヤ人全部を答刑にしても、此一人は鞭つことを欲しなかつた。そして斷然パウロを打つことを禁じたのである。

兵卒共は其命令に隨うてパウロの衣類をさがしてパウロに返し、水を與へてその日の汚を清めさせ食物を探らした。ローマ法によつて彼は町重に取扱はるべき者であつたからである。審判もしないで縛つた爲にあべこべにパウロから訴へられることを恐れた彼等はこそくと答刑の道具を片附けた。パウロは豫期に反せず果してローマの囚人となつたのである。手に軽い鍵をつけられ、天井の低い小さな石室に、空からさし込む光はほんの申譯ばかりの處で、彼は友を想ひ、敵を思ひ、神に祈りを捧げた。ローマの總督は釋放してくれるであらうと信じた、けれども敵は罰を加へさせる爲にあらゆる手段を講ずるに相違ない。前途には實に彼揮身の勇氣を要する闘が横つてゐた。

ルカやテモテ其他の友人達は神殿での抗撃、救助投獄などの事を聽いて大に心配し、早速アントニオ域に驅付けてパウロの釋放を色々と請願して見たが駄目であつた。何にせよ此の男を中心として祭の群の中に大騒動が持上つたのである。ルシヤは理由が充分解らなかつたが、とにかく今放しては騒

動が再た起るに定つてをる。放すわけにも行かないが、さりとてローマ市民を審判もなしにいつまで投獄しておくわけに行かない、そこでルシヤは、原因を宗教的と見て先づユダヤ人の長老達に理由を明にさせ度いと考へた。

其夜パウロはあまり清潔でもない藁の床にねたが、パウロはどんな床にも寝て來た、洞穴、天幕、船の上どこでもねられないことはなかつた。朝になるとルシヤはユダヤ高等會議の議長に使者をたて、昨日の神殿内の騒擾について會議を開いて貰ひ度いと申送つた。そしてパウロの手から鍵をはづし、自由で城中を歩くことを許し、今日ユダヤ人の會議に出席しなければならぬことを話した。

會議は神殿の門の側にある廣間で行はれ、定の時刻に兵士達がパウロを連れて來た。そこはパウロには昔なじみであつた。彼も議員の一人として席についた時があつたのである。彼は今小さな窓をもち、おほろけな光によつて知つてをる誰彼の顔を認めることが出來た。議員達は跣足で赤い坐布圍の上に安坐をかいてゐた、彼等の長い白の着物は革や、刺繡した絹布、又は質素なリンネルの帯で結ばれてゐた。富祐な人達は其上に紫、青、赤、黄などの被服をき、祭司や教法師はや、質素であつた。審問の準備は凡て整ふた。



## 一九三 我はバリサイ人

エルサレム・五十歳から六十歳

パウロが會議室のおほろな光線の中に集つた人々を眺めて立つたとき、種々な感慨が湧いた。今は弱つて老いてゐる人々の中には、イエスが、亂れた髪をして衣は血にそみ、ランプと蠟燭の光の下に手を括られたまゝ、青ざめた、然し平靜な容貌を以て此會議の審問に答へ、遂に一奴隷の手で口邊を打たれた時、其凄壯なる光景を見てゐた人々もある。またベテロとヨハネが助けなくそこに立つて、漸くガマリエルの意見によつて自由にされた時のことを知つてゐる者もある。ステバノを打殺すべく市外に送つたとき會議に列した人々もある、パウロも其一人であつたのだ。ある者は古い友、同窓の學友であつた。パウロが熱心黨として會議毎に必ず出席してクリスチャンに反對の投票をしたときのおなじみの席はどこか。誰が其席に今坐つてゐるか。見ればパウロの恩師ガマリエルの二人の息子シモンとヨシユアもある。イエスの怨敵大サドカイ人アナニヤの息子達もある。否「大食の」アナニヤ自身が真中に坐つてゐる。

パウロが最後に此赤い座布團に坐つたときには、その心は戦と憎惡に燃えてゐた。けれども今は愛と平和に満ち天の光に浴してゐる。彼は今こそステバノの面に輝いた光が、どこから來たか知ること

を得た。イエスやステバノが此處に立つたのはユダヤ人として彼等の命を求むる祭司等の手中にあつたのである。然しパウロはローマの自由市民としてローマ千卒長の保護の下に立ち、千卒長は暴動の原因を究め、上官に報告しやうとするのであつた。

會議はパウロの強固な意志、學殖、才智についてよく知つてゐた。千辛萬苦に頭は白くなり、體は少し前こゝみであつたが、野獸の如く爛々たる眼は大膽に議員の一人々々を射るのであつた。ルシヤは自分の要求を述べて無關心な態度で兵卒共の槍や短刀の間に席についてゐた。パウロは何か告白しろと云はれるのを豫期してゐた、手は自由であつた、しかめ面の議員達をすつと見渡して徐に口を開いた。

「兄弟たちよ、我は今日に至るまで、事毎に良心に従うて神に事へたのである。」

「その口を撃つてやれ」と叫んだ者がある。然し側に立つてゐた衛兵はルシヤを顧みて何もしなかつた。兵士はユダヤの奴隸でなくローマの兵士であつたからである。パウロは憤激した。ローマの自由市民を辯明もさせないで其口を打つとは何事であるか、彼心中の獅子は猛然として起上つた。

「白く塗りたる壁よ、神なんぢを撃ち給ふであらう」とパウロが云ふと、四方から叫聲が起つた、けれども彼の聲は更に鋭かつた、「なんぢは律法によりて我を審くために坐しながら、律法に悖りて我を撃つことを命ずるか」



こゝまで言ふと直ぐ近くに居た者が彼に注意を與へた。

「汝は神の大祭司を罵るか。」

パウロは忽ち態度を變へた。憤怒の餘り間違つたことに気がついた。先に打てと叫んだのは、大祭司アナニヤの聲であつたのをパウロは知らなかつたのである。ユダヤ人としてパウロは謝罪しなければならぬ。

「兄弟たちよ、我は其が大祭司であることを知らなかつた。汝の民の司をそしる可らずと規定してある。」

彼が大祭司の聲と知らなかつたのは無理が無かつたと見えて、此丈の辯明で誰も追求はしなかつたやうである。奇妙なことには、これから數年の後アナニヤは短刀組に襲はれて、市の排水渠にかくれたがそこで刺殺されてしまつたのである。

使徒行傳にはパウロの此時の辯明が記されていないが、多分アントニオ城の階段で述べたものと大差無かつたであらう。さうすると議員のうちのバリサイ人とサドカイ人との間に争論を生じた。殊にパウロを遮つて何か云つた者が有つたか、パウロは一段聲を勵して、バリサイの人達の方に向つて呼ばつた。

「兄弟たちよ、我はバリサイ人であつて、バリサイ人の子である。我は死人の甦へることの希望につ

いて審かれるのである。」

パウロは此言が全會議を二派に分つことを知つてゐた。サドカイ人は死人の甦を信ぜず天使の存在、人の内に不死の靈があると云ふことを信じなかつた。バリサイ人は是等のことを皆信じた。此兩派は始終一致せず殊に富貴な、有力な階級の人々からなるサドカイ人は貧しい人々からなるバリサイ人を輕蔑してゐたので一層調和は不可能であつた。パウロの口を撃てと命じたアナニヤはサドカイ人の極端なものであつた。パウロは其事實をよく知つてゐたのである。

群衆の心理を巧妙に左右することは彼の得意であつた。全議會はもう神殿に起つた昨日の暴動の問題は忘れてしまつて、バリサイ人は同信仰のパウロを助けやうとする、サドカイ人は正面から反對となへる。双方しまひには起上つて、兩方で拳固を突出して口角泡を飛ばすと云ふ激論になつた。

「われらは此人に悪い事があるとは思はない」バリサイ人の學者達が呼つた、「もし靈または御使がこれに語つたとすればどうしやう」是はダマスコ途上の出來事について言つたのであらう。

ルシヤは黙つて紛争を冷眼視してゐたが、パウロの身邊危しと見るや兵卒に命じて、城に連戻らせ、引止めでもする者があれば、打殺す丈けのことであつた。



## 一九四 甥の盡力

エルサレム・五十歳から六十歳

ルシヤは會議の結果更に五里霧中に漂ふことになつた。彼には全く譯がわからない。けれどもパウロと話して見て愉快な男だと思つた、早速自由にしてやることは出来ぬが、テモテ、ルカなどから差入れ物をさせたり、面會さへ許可した。

パウロはパウロで色々な想に耽つた、失望の方が多かつた。どつちにしてもエルサレムから出でローマに往くなんと云ふことは到底出来ぬと思つた。其の夜石の床の上に敷かれた藁床に横つて寝てると彼の胸に、從來幾度も經驗したやうな慰安、獎勵を與へられた。イエスが彼の枕頭に立ち給うた。「雄々しかれ、汝はエルサレムにて我につきて證をなしたる如く、ローマにても證をなすであらう」夜が明けてモアブの山々朝陽に映ゆる頃、パウロは眼をさました。全く元氣は恢復してゐた、そして喜んで夢幻の中に與へられた言葉を友人達に話した。

一方市の暗い一角では彼の敵、例の短刀組が額をあつめて凝議してゐた。連中は四十人であつた。協議の結果は

「我々はパウロを殺すまでは何も食ふまい」と盟約を立てた。夜明を待ち兼ねて彼等は祭司長や長老

等の處に行つて此盟約を結んだことを告げた、聞いた者等は二つ返辭で承認を與へた。

「されば貴殿等は、なほ詳細に訊問する風を装うて、パウロを貴殿等の許に連れ下らせることを議會と共に、千卒長に訴へてください。我々はパウロがそこに來ない先に、途中で殺す準備をしてをりませう」と云ふのが次に來た彼等の建議であつた。白い衣をきた祭司達は直ちに此議を入れた。短刀組が喜んで神殿から引退つたのち、彼等は平氣な顔で例の如く音吐朗に祈禱文を誦した。外形は如何にも前額にかゝけて居る「御神に聖く」の文字通り、心も聖いかの如く見えた。

こゝに前にも記した如く、パウロの姉妹でエルサレムに縁付いてゐる者があつた。其息子が、短刀組の待伏の事を聞付けた。短刀組の行動は大びらに行はれたものと見える。早速彼はアントニオ城に驅付けた。そして叔父に其事を告げた。パウロは自分の身は千卒長の保護の下にあるのだから、事情を訴へるに如かずと考へた。そして百卒長を呼んで貰うた。

「この若者を千卒長の處に連れて往つて頂きたい。千卒長に申上げることが有ります」と願つた。百卒長は急いで青年を千卒長の處に伴うた。

「囚人パウロが、私を呼びまして、此若者が貴殿に申上げることが有るから、貴殿のところへ連れていつてくれと云ふことで御座います。」と云つて青年を紹介した。ルシヤは若者が他人列坐の前で話すのを躊躇してをる様子を看破して、その手を執つて密室につれて行つて問ふた。



「われに告げる事と云ふのは何か。」そして青年の告げることを聞いてをるうちに眉を寄せた。青年は小聲で話した。

「ユダヤ人等は、貴下が、パウロの事を、なほ詳細に訊べる爲にと云つて、明日パウロを議會に連れ下ることを貴下に請はうと申合せました。けれどもどうか其請願を聴許してくださいませ。彼等のうち四十人餘の者がパウロを待伏せて、彼を殺すまでは飲食をしまいと盟約を立て、今その準備をして貴下の許諾を待つて居ります。ルシヤは再たユダヤ人の悪計だなど憎んだ。短刀組の人殺は、犯人を擧げることは不可能である。不可能ならば罪はルシヤ自身に落ちて来る。ルシヤは尙もパウロの甥に詳しく訊いて、

「これらの事を我に訴へたと誰にも語るな」と厳しく注意して歸らせた。青年は叔父の爲にも、自分の安全の爲にも、言はれなくとも其位のことには心得てゐた。たゞ叔父に丈けルシヤの言つたことを耳打ちしておいて陰に家に歸つた。

## 一九五 一夜の騎旅

エルサレム・五十歳から六十歳

ルシヤはユダヤ人等がローマ軍隊の手中にある囚人を殺さうとする無法を驚き且憤つた。そんな事

を許すことは出来なかつた。神殿の騷擾問題は解決しなかつたが、此上はカイザリヤの涼しい海岸にある宮殿に駐在するユダヤ總督ベリクスに囚人を送るよりほか無いと考へた。

早速百卒長二三人を呼んで「今夜九時ごろ、カイザリヤに向けて往くために兵卒二百、騎兵七十、槍をとる者二百を整へよ」と命じ、またパウロ等の爲に別に乗馬を準備させ、總督ベリクスの許に護送することを命令した。夏期は軍隊が夜行軍をすることは珍しくなかつたのである。

ルシヤがベリクスに送つた手紙は次の如くである。

「クラウデオ・ルシヤ謹みて總督ベリクス閣下の平安を祈る。この人はユダヤ人に捕へられて殺されんとせしを我そのローマ人なるを聞き、兵卒どもを率ゐる往きて救へり。ユダヤ人の彼を訴ふる理由を知らんと欲して、その議會に引き往きたるに、彼等の律法の問題につき訴へられたるにて、死もしくは縛に當る罪の訴訟にあらざるを知りたり。又この人を害せんとする謀計ありと我に聞えたれば、われ俄に之を閣下の許に送り、これを訴ふる者に閣下の前にて彼を訴へんことを命じたり。」

千卒長はパウロに同情を持つてゐた、手紙に、自分が長官に好く思はれるやうパウロをローマ人と知つたから救出したと少し事實を狂けてゐるのも面白い。彼は手紙をパウロに讀んで聞かせたであらう。そして封をし、指輪印を押して一士官に手交した。ルシヤは出し抜かれた四十名の短刀組が、どんなに残念がるであらうかと思つて、會心の笑を洩した。



ユダヤの禿山の向ふに陽が落ちるとやがて白い月、きらめく星が姿をあらはして、城壁を照した。パウロは旅の用意を命ぜられた。九時が来ると長靴の足音がバタ／＼して、城の厩の方に馬蹄のひびき人の聲が聞え、岩丈な兵隊は武装を整へた。全の準備が行届くと直に出発命令が下つて、パウロを中心にした一行は夜の町を靜に進んだ。パウロの兩側には特に強い兵士が、パウロの手首と各自の足を鍵で繋いで付けてゐた。市門を出たパウロは再びこゝをくゞらないのである。永遠に、彼少年時代の憧憬の都であつたエルサレムを後にしたのである。

月の光は兜、槍尖、胸甲、楯、劍を閃めかし、馬首は冷い夜氣の中に搖ぎつ、四百の歩兵前後を固めて、ユダヤ諸王の墓所を過ぎ、敷石道に沿うて丘陵地へ、更に海へ、……パウロがつい先日深い疑問を抱いて上つた道をカイザリヤさして下つてゆくのであつた。途上軍隊の音に眠を破られた者はあつたが、夜行軍は珍しくないもので、不審を打つ者もなかつた。夜中に、軍隊の宿場アンテパトリスまで往つた。此處はシャロンの平野にあつて清流に沿ふてゐた。一同はこゝで暫く休憩した。

翌る日が明けると、歩兵達は護衛の任務を終へてエルサレムに引返すことになり、これより先は騎兵丈けがパウロを護つて、二十哩の道程を馳足でカイザリヤに急いだのである。

## 一九六 辯護士テルトロ

カイザリヤ・五十歳から六十歳

ペリクスはローマから派遣されたユダヤ總督として、ローマ法官として正義を行ふ筈の地位に在つたが、その人物は千卒長ルシャとは違つてゐた。彼がまだローマの奴隸であつた時その兄弟バラスが皇帝の寵愛を受けてゐた爲に、サマリヤの總督に抜擢された男である。ユダヤ人等は彼を憎惡してゐたので、愈ユダヤ總督を兼ねるに及んで、彼は熱心黨の擡頭を非道く残忍なやり方で壓迫して、之に報復したが、それかと思ふと自分が非行を果すときには短刀組を雇ふたりした。彼は特に大祭司アナニヤが大嫌で、アナニヤから來たことは何一つ取上げなかつた。そして祭司から短刀組までユダヤ人と云へば毛虫のやうに嫌であつた。彼が懼れた唯一の者はローマ皇帝であつた、其爲少しは愼みもあつた、うかくすると忽ちローマに召還されて罰せられるからである。その住居はカイザリヤにあるヘロデ王の建てた大宮殿に定め、王侯の如く驕奢な生活をしてゐた。彼を取巻く者は競技と宴樂に日をつぶす役人達貴女達であつた。その妻ドルシラは先夫を棄て、彼の處に走つた女で美しいユダヤの王女即ヘロデ・アグリッパの妹であつた。

カイザリヤについた二三日後、騎兵士官はパウロを連れて宮殿に入り、ペリクスの前に立膝をしてルシャからの書を渡した。之を一讀したペリクスは、暗い眉の下からパウロを凝視したが、何思つたか、



「いづこの國の者か」と訊いた。

「キリキヤのタルソの者であります」パウロは答へた。

「汝を訴へる者が來たとき、尙詳細に訊かう」と横柄に口を嚙んだ。しかし彼はパウロに多少の好意を示した。そして未だ判決のない者であるから普通の牢獄には投じないで、ヘロデの官邸の一隅にある陣營に預るやう兵卒に命じた。テモテ、ルカ等はパウロに逢ふことも物を持つて來ることも自由に出來たのである。

暫くするとアナニヤやエルサレム議會の或者共が、パウロを訴へに來ると云ふ情報があつたので、パウロは辯明の腹案を作つておいた。愈彼等が來たので、パウロは宮城外の審判庭に呼出された。そこにはペリクスが、一段高い敷石の上坐上に置かれた象牙の椅子によつて、凡の訴訟をきいてゐた。その上坐の周圍は圓柱が列立つてゐたが屋根は無く、たゞ黄色の日除布が影を作つてゐた。ペリクスは白や、紫の縁を取つた法服を纏うてゐた、圓柱の間からは大空や海を見渡すことが出來た。敷石をめぐつて青銅の頭のついた槍を持つ衛兵が立ち、ペリクスの背後には執行吏が控へてゐた。これがローマ法庭で、誰でもこゝに訴をすることを許されてゐた。ユルサレムから來たユダヤ人等は辯護士テルトロを先に立て、其處に列んでゐた。ユダヤ人等は此辯護士にギリシヤ語で訴をするやうに依頼したものである。外國人と袖振り合ふさへ嫌であつた彼等のことだから、自分達だけ一團を作つて、はな

れてゐた。ルカ、テモテ、其他の友人達も勿論來てゐた。群る人々のうちにユダヤ人、シリヤ人、ギリシヤ人、商人、無職者、乞食までゐて、皆好奇の耳目を敏くしてゐた。

諸種の訴訟が片附いて行つて、いよいよパウロの事件が探上げられた。ペリクスが原告を呼出すと、辯護士テルトロはアナニヤ等の名をも申告して、さて先づペリクスを讃め、パウロを訴へた。

「ペリクス閣下よ、我々は閣下によりて大平を樂み閣下の先見によりて此國人のために時に隨ひ處に隨ひて、惡き事の改められたのを感じて罷みません。それはこゝに喃喃しく陳べて閣下を妨げますまい。願くは寛容を以て我が少しの言を聽許されたい。我等はこのパウロを見るに恰も疫病のごときもので全世界のユダヤ人のあひだに騷擾をおこし、且つナザレ人の異端の首であつて、宮をさへ潰さうとしたので之を捕へました。我等の律法に隨うて審かうとしたのを、千卒長ルシヤ來り、我らの手から奪ひ去り、訴ふる者どもに命じて、閣下のところまで到らせたのであります。閣下、パウロについて訊かれるならば、我らが訴ふる所をことごとく了解されるであらう。」

他の者共もアナニヤ始め一同「誠にその通りである」と主張した。

ペリクスはローマ人特有の無口の人であつた。此辯護士がルシヤのことを云々したのは何の爲にもならなかつた。總督の手元にはルシヤからの手紙があつて、其はパウロの爲に有利であつた。これから數年の間ルシヤの書が如何程助けになつたか知れないのである。ペリクスは最憎惡するアナニヤ等



を睨めた眼を轉じてパウロの熱心なる面をうちまもり、點頭いて彼を摩いた。パウロをして辯明させる爲である。

## 一九七 ルシヤの來るまで

カイザリヤ・五十歳から六十歳

パウロはアテネの雄辯家の演説をきいたことがあるのでテルトロの辯を左程に感じなかつた。熱心に總督の顔を見つめてゐた彼は徐に口を開いた。言葉の熱が加はると共に眼の光も増して來た。

「閣下が年久しくこの國人の審判人であることを知るが故に、喜んで我が辯明を致しませう。閣下よ先づ私が禮拜のためにエルサレムに上つてから僅か十二日過ぎないことを御承知願ひたい。彼等は私が、エルサレムの宮でも、また會堂でも、市中でも人と争ひ群衆を騒したのを見たのでは無く、いま訴へた私の事についても證明することは出來ないのでございます。私はたゞ此一事を閣下に言明いたしたい、即ち私は彼等が異端と稱ふる道に循うて我が先祖たちの神につかへ、律法と預言者の書とに録したる事をことごとく信じ、彼等自らも待てる通り、義者と不義者との復活がまると神を仰いで望を懐くのであります。この故に私は常に神と人とに對して良心の責のないやう勉めてをります。私は多の年を経るのち歸り來り、同胞のために施濟をなし、また獻物をさへけてゐましたところ、その時

彼等は私が潔をして宮にをるのを見たばかりであります。私の爲に群衆がよつたり騒擾が起つたりしてゐたのではありませぬ。然るにアジャヤから來た數人のユダヤ人があつて、騒擾を起したのであります。もし私に咎むべきことがあるならば、彼等自ら閣下の前に出でて訴ふる筈であります。また此處に今居るユダヤ人の諸君は、私が先に議會に立つたとき、私に何の不義を認められたか言ふべきであります。唯私が彼らの中に立つて、死人の甦へる事について我今日諸君の前で審かれるのだ、と呼はつた一言の他は何もありませんまい。」

パウロは飽迄も自信が有つた、アナニヤ一派の虚構の訴を根柢から覆した。其證據に、パウロの言が終つても敢て抗辯しやうとしなかつたのである。

ペリクスは即日パウロを釋放してもよいのであつたが、辯論のうちにイエスの道について不思議を抱いて尙聽きたく思つたのと、一度自分の手中に入つたパウロを材料にして何か利益を擱まうとする考へでも有つたのか、それともユダヤ人等の機嫌を損ふのを恐れたか、審判の延期を命じた。

「千卒長ルシヤの下るを待ちて、汝等の事を判決しやう」と言つて公平ぶりを示し、次の訴訟に移つた。

けれども彼はパウロに罪の無いことを知つてゐて、其取扱を丁寧にした、即ち百卒長に命じて監禁を寛大にし、友人等の出入を自由にした。



## 一九八 美しいユダヤ王女

カイザリヤ・五十歳から六十歳

アナニヤ等は目的を達しないで空しくエルサレムに引揚げたが、然しペリクスに賄賂を使つて、いつまでも監禁させておいて時機を覗うてゐた。

ペリクスは一度カイザリヤから出掛けたが、再た直ぐ歸つて來た。其時には愛妻ドルシヤを携へて來た。彼女はユダヤの王宮に育つて、容姿殊の外美しく芳齒未だ二十歳に満たなかつた。彼女は總督からパウロの話を書いて、ユダヤ人ではあり、キリストは彼女の生れるより前に十字架にかゝつたけれども其信徒に就ては多少聞いてゐないこともないので、夫と一緒にパウロの話を書いて見たいと思つた。そしてパウロを呼寄せた。

宮殿の色敷石の上に立つたパウロは跣足である、金を塗つた天井は大理石の圓柱に支へられてをる。ペリクスとドルシヤは絹布張の臥榻に寄り、奴隸達は其後に立つてゐる。パウロは、その逞しい腕節や顔貌からペリクスは如何にも奴隸出身だと思つた。その紅い兩頬と黒い髪と眼、ドルシヤはどうしてもユダヤの女だと思つた。ドルシヤは青白の装に、頸や手首に寶玉を飾り、侍女達に羽毛の團扇であふがせながら、にこやかに身を横たへてゐた。

ペリクスが側近く呼ぶや、パウロは少くともドルシヤはイエスの事を解するであらうと思つたので進んで例の如く熱辯を揮つて、神を説きイエスを説き、イエスを信ずるによる正義と節制と來らんとする審判と復活について論じた。

ペリクスはパウロの辯に感動した。宗教など解する男ではなかつたが、迷信の心から體をいだいたそして、

「今日は去れ、よき機を得てまた招かう」と言つてパウロを引取らせた。室を出ると、パウロの後は眞紅の幕が下りた。ドルシヤの笑聲がかすかに聞えた、夫の臆病を笑うたらしい。總督は葡萄酒を命じて元氣をつけたかもしれない。

其後ペリクスは屢パウロを呼出した。先に彼が大金を持つてエルサレムに上つたと云つたのを、パウロ自身大金持でもあるかのやうに考選をして、パウロから賄賂を申出るので待つてゐたのである。

## 一九九 奴隸オネシモ

カイザリヤ・五十歳から六十歳

パウロは賄賂を使はなかつた。テモテ以下の友人もそんな心は無かつた。そこでカイザリヤに囚人として居ること月重なることになつた。然し人と交ることも手紙を出すことも出來たのである。エベ



ソで劇場に引ずり込まれたアリストタルコも一緒に囚人となつてゐた。或はパウロの従者としてゝあつたかもしれない。

カイザリヤの港は出入の船で賑であつた。市中には大戶外劇場があつて遊好の市人は事ある毎に群衆した。ヘロデ大王がアウグスト帝の像を祀つた立派な神殿は多く顧みられなかつた。平和な時ばかりでなく、或時はユダヤ人とギリシヤ人との間に争鬭が起つた。ペリクスは騷擾鎮壓を名として兵を繰出してユダヤ人の商店などを襲はせた。パウロはそんな喧嘩を幾度か城壁外に聞きつゝ、静な交友に慰を得てゐた。主なる友人はルカ、テモテであつたが、傳道者ピリポと其娘等、アリストタルコ、テキコ、ユスト、デマス、エパfras、それから今は友情舊のごとくなつたエルサレムのマルコ等も出入した。

ある日のことオネシモと云ふ奴隸がコロサイのクリスチャン、ビレモンの處から遁けて來た。パウロはビレモンの家でクリスチャンの集會があつたので其人を知つてゐた。オネシモはパウロを慕ひ、カイザリヤに囚人となつてをることを聞いて、自ら進んで共に兵營内に住むべく旅して來たのであつた。パウロは深く其志に感じて之を導いた結果オネシモは信者になりパウロに事へた。

時が経つうちに、オネシモは此上ない慰平ではあるが、いつまで自分の手元に置くべきものではないとパウロは考へた。主人ビレモンの處に返す方がよい、彼がオネシモに自由を與へれば萬事好都合

である。オネシモもパウロの意見に従つて主人の許に歸る氣になつたのでパウロは一書を認めて之に託した。

其手紙には第一オネシモを容して自由を與へることを乞うた。テモテと連名にした。そしてビレモンの家で集會してをるビレモン初めアピヤ、アルキボ其他の信徒一同に對する挨拶を書いた。

「兄弟よ、我は貴君の愛によりて大なる歡喜と慰安とを得た。聖徒の心は貴君によりて安んぜられたからである。この故に、われはキリストに在りて、貴君に爲すべき事を、聊かも憚らずに命ずることが出来るが、むしろ愛の故によりて貴君に願ふ。既に年老いて今はキリスト・イエスの囚人となれる我パウロ、縲紲の中で生んだ我が子オネシモの事を貴君に願ふ。かれは前に貴君に益のない者であつたが、今は貴君にも我にも益ある者となつた。我かれを貴君に歸す、かれは我が心である。我は彼をわが許に留めおきて、我が福音のために繩目にあるあひだ、貴君に代りて我に事へさせやうと思つたが、貴君の承諾なしにすることを好まない。是れ貴君の善が仕方なしでなく心から出ることを欲するからである。彼が暫時貴君を離れたのは、或は貴君が彼を永遠に保ち、而も奴隸としてゝなく、奴隸にまして愛する兄弟の如くせん爲であつたかも知れない。我は殊に彼を愛する、況して貴君は肉によりても主によりても、之を愛しないわけに行きまい。貴君もし我を友と思はゞ、請ふ我を納るゝごとく彼を納れよ。彼もし貴君に不義をなし、または貴君に負債あらば、之を我に負はせよ。」



手紙は終に近づいたが、パウロの胸は愛するオネシモの爲に燃えてゐた。彼は遂に書取つてゐるテモテの手から葦<sup>わし</sup>ペンを取つて親ら書いた。

「我<sup>われ</sup>パウロ手づから之を記す。われ償ふであらう。貴君はわれに身を以て償ふべき負債があるが、我は其を言ふまい。兄弟よ、請ふ、主に在りて我に益を得させよ、キリストに在りて我が心を安んぜよ。貴君の従順を確信して之を書き贈るのである。わが言ふところに勝りて、貴君が行ふことを知つてゐるからである。なほ我がために宿を備へよ、我は貴君等の祈により、遂に我が身が貴君等に與へられんことを望むからである。キリスト・イエスにありて我と共に囚人となれるエバフラス、またわが同勞者マルコ、アリスタルコ、デマス、ルカ皆貴君に安否を問ふ。願くは主イエス・キリストの恩恵<sup>めぐみ</sup>、貴君の靈と偕にあらんことを」

此手紙の中に二つの同情に堪えない點がある。即ちパウロ自ら「年老いて」と云つてゐること、速に自由の身となるかも知れないと考へてゐることである。未だ六十歳ならずして老いたと云ふのは、如何に彼の惡戰苦闘が尋常一樣のものでなかつたかを思はせる。又折角釋放の日の早く來ることを豫期してゐたのが、だん／＼延びるのを知つたとき、さすがの彼も失望したことであらう。

かくてオネシモも、囚人パウロを訪ねて再た去るのである。海から來て、また入る陽足<sup>ひるし</sup>を趁<sup>お</sup>うて西の海に消ゆるのである。水面に引いた金線のやうに、この小書簡は、暗黒の時代、暗黒の世界から、

今日の我等の前に残されてゐる。

たゞしオネシモはテキコが、コロサイ教會宛の手紙を持つて行くのと一緒に往つたのである。パウロは傳道旅行の出來ない代りに、多の手紙を書いて諸方のタリスチャンを勵した。コロサイ教會への手紙もこの頃に書かれたものと思はれる。コロサイはアジアの國にあつた。ビシデヤのアンテオケからエベソに行く丁度半分位の處の、カドマス山間を流れるリカス河の廣い谷に横る市であつた。二年前パウロのエベソ滞在中に傳道したところで、エバフラスが主に其任に當りビレモンの家で集會をしてゐたのである。コロサイ書中には其近在のラオデキャ及ヒエラポリスにある諸教會のことにも言及してゐる。

同時代に書いた手紙に今一つエベソ書がある。内容は殆んど同時に書かれた丈けにコロサイ書と似た所が多い。此手紙も矢張エベソの人テキコに委託されたのである。

## 二〇〇 新總督フエスト

カイザリヤ・五十歳から六十歳

二度パウロはヘロデ宮殿の庭に白き雪を見た。二度花咲きまた散るのを見た。二年の歲月は空しく過ぎた。ペリクスはユダヤ人の要求も、パウロの友人等の請願も肯かないで、殺しもせず、釋放もし



なかつた。無頓着な無情な人のするやうに、中途半端の煮切らない態度をとつてゐた。

時を<sup>か</sup>経るに従つてベリクスはユダヤの指導者等との間に益深い溝渠を築いた。エルサレムは熱心黨と短刀組の占領に委し、流血の惨事絶ゆる時が無かつた。ドルシヤの兄弟アグリツバは、ローマ皇帝の命によつて神殿を監督し大祭司を任命する權を與へられたので、アナニヤを免職して其代に、矢張高慢なサドカイ人イシマエルを任命した。

ベリクスは八年間ユダヤの總督であつたが、ユダヤ人との間は幾度か決裂して、遂に人民の代表者はローマに上つて皇帝にベリクスの罷免を請願するに至つた。其が効を奏して總督が更迭すると云ふ報が來た時には、ユダヤ人は大悦であつた。そして、ローマに行つて罰を與へられるやう訴へてやると云つてベリクスを強迫した。ベリクスは怒りもしたが、多少氣味も悪かつたと見えて行掛けの置土産に少しユダヤ人の機嫌買をしてカイザリヤを去つたが、パウロの訴訟を其まゝにして、彼を城中に監禁したまゝ往つた如き其一例である。是はユダヤ人を満足させた。そして彼は美しい妻を伴れてカイザリヤを去り、更代の新總督ボルシオ・フェストが入港して來た、此人はベリクスよりは少し好人物であつた。

フェストもヘロデ宮殿に住んだ。パウロは新總督<sup>キタ</sup>來の報に城中は云ふまでもなく、遠く市中の方から聞えて來る市民の祝賀騒を耳にして、自分の爲にも自由な日が彼によつて來ることを望んだ。

新任の要件を済した時、フェストは多數の軍隊を率ひてエルサレムに乗込んだ。喇叭の轟<sup>ウツ</sup>玲<sup>ウツ</sup>と、エルサレムの空に鳴ると市民は平屋根と云はず窓と云はず街路の兩側は勿論のこと歡迎見物の人で滿された。新總督は其間を堂々喇叭の響に導かれてシオン山上のヘロデ宮殿に向ひ、其處で祭司達や市民の有力者に會見し彼等の進物を受けた。其席は今早や三十年の昔ポンテオ・ピラトがイエスを審いた同じ審判の座である。大祭司イシマエルや重立つたユダヤ人等は新總督に種々な請願をしたうち、パウロの一件を忘れなかつた。そして、パウロを訴へて、フェストの好意で、パウロをエルサレムに召出されるやう願ふた。

「パウロを除け、パウロを除け」の叫聲が後の方から盛に起つた。短刀組は、若しフェストがパウロの入京を許したら、道に待伏して之を殺害しやうと企てゝゐたのである。もしも千卒長ルシヤが此時も未だこゝに居合せたならば、必ず新總督に注意を與へたかもしれない。フェストはユダヤ人等の請願を許可しなかつた。そして嚴に

「パウロは確にカイザリヤに囚人として預つてをる。本職はやがてカイザリヤに歸るから、もしパウロに不善があるならば、諸君のうち然るべき者等が、本職と一緒にカイザリヤに下つて訴ふるがよい。」と申渡した。

フェストはエルサレムを視察して十日許を過したのちカイザリヤに歸つた。すぐ其翌日審判の座に



つきパウロを引出させた。エルサレムからフェストと共に下つて来たユダヤ人等は忽ち種々の重い罪を造つて言ひ立て訴へたが、實證を示すことができない。

次にパウロは總督の許可を得て辯明した。

「我はユダヤ人の律法に對しても、宮に對しても、カイザルに對しても罪を犯したことは無い」そして尙進んでイエスと其信徒のこと、イエスが死から甦つたことを説いた、すると、

「イエスは死んだよ」ユダヤ人は叫んだ。

「イエスは生きてゐる給ふ」パウロは決然となつて答へた。兩者の争論は熱した。がフェストには何の事か一向わからなかつた。ローマの法律を犯したことは何も無いやうである。たゞユダヤ人同志の宗教上の議論に過ぎない。

「此人には罪は無い」と云つて見たが、ユダヤ人等は承知しない。それだからエルサレムに連れて行つて審判して貰はなければ駄目だと主張した。そこでフェストも彼等の意を迎へやうとして、

「なんぢは、エルサレムに上つて、彼處で我が前に審かれることを諾ふか」とパウロに尋ねた。

パウロは考へざるを得なかつた。二年の歳月をこゝに待つたのは、そも／＼何の爲であるか。ローマの法律によつて正しき審判を受けん爲であつた。ローマの法律によれば宗教は自由であつて、基督教をローマ帝國中どこで説いてもかまはぬ筈である。パウロはそのローマ法の審判の下に、ローマの

世界到る處に人はクリスチャンたるを得ると云ふ権利を確定されんことを熱望したのである。然るにフェストの不意の間は何事であるか、エルサレムに再上つて、フェストの前でユダヤ議會の審判を受けよと云ふのである。サンヘドリン(ユダヤ議會)によつて審かれて、否應なしに死刑の宣告を下さうと云ふのか。恰もイエスやステパノが審かれたやうに。フェストが基督教のことを審判するのが嫌だと云へば、彼以上の者が代つてさばくに相違ない。パウロは今更正義しい審判を受けない位なら、とうの昔に決心するところが有つた筈である。

パウロはやゝ興奮した調子でフェストに答へた。

「私は、私の審かれるべきカイザルの審判の座の前に立つてをるのであります。閣下の知らるゝ通り、私はユダヤ人を害うたことはありません。若しも罪を犯して死に當るべき事をしたのであるならば、死ぬるのを厭ひはしません。然し此人達の訴ふことが實でないならば、誰も私を彼等に付すことはできない筈であります。私はカイザルに上訴します。」

これは容易な言葉ではない。白い衣をきた大祭司や其友等の頭上高く飛ぶ翼ある矢と云はふか、フェストに對してさへ頂門の一針とも云ふべき貴重な斷言であつた。フェストを驚かし、祭司達を後に瞠若たらしめたであらう。此壓迫され侮辱されたパウロが、ローマ法に於ける最重い言を發したのである、最も貧しいローマ市民を至上の人と同平面まで引上げる言であつた。ローマ皇帝はローマ市民



の上告を親裁するのが法の定であつた。

「私はカイザルに上訴します。」フェストはあまりこの大膽な訴に出會したことが無かつた。この教育あるユダヤ人はローマ市民たる者の権利を知つてゐたのである。満座肅然たる中に、フェストは陪席の者と相談をした。再びパウロの方に向き直つたフェストの口は固く結ばれてゐた。「誰も私を彼等に付することはできない筈であります」と云つたパウロの挑戦的の言が彼の耳に鋭く響いてゐたからである。而してパウロに、上訴するのは大間違であると警告するが如く又宣告を下すがごとき態度で言ひ放つた。

「汝はカイザルに上訴すると云ふ。然らばカイザルの許に往け。」

訴は聽許された。骰子は投げられた。基督教の問題は世界最上の審判庭に持出される事になつた。これがパウロの爲に勝利か失敗かは不明であつた。敵は馬鹿なことをする、無益であると思つた。友人達も結極はどちらになるか解らなかつた。然しパウロは皇帝がローマ法の條章に照して、基督教徒の自由を保證するであらうと信じてゐた。彼はローマに往かんことを欲し、自由を欲したのである。

## 1101 ユダヤ最後の小王

カイザリヤ・五十歳から六十歳

パウロは囚人として優遇されてはゐるが、地の果から無數に伸ばされてをる手が、彼の來り教ゆるを待つと思へば晏如たることが能きなかつた。ローマに上訴することによつて、審判が無駄に延びることを防ぎ得ると思つたが、其には費用が澤山かゝつた。フェストに對しても保證金や料金を支拂ひ自分のカイザリヤからローマまでの旅費ばかりか、護衛して行つて貰ふ兵隊の入費も持たなければならなかつた。貧乏人でも上訴は出來たが、さて實行となると此爲に中止しなければならなかつた。たゞし今のパウロは貧しくは無かつた。友人數名も彼と共に往くことに決した。

フェストがエルサレムから歸つてから幾週と云ふものは新總督就任祝で市中は賑うた。其祝に集つて來た人々のうちに、アグリツバがゐた。彼はかの美しいドルシヤの兄で、ゲネサレ近邊の、北部に於ける一小王であつた。彼と一緒に其妹ベルニケも來た。此人は伶俐な美しい人で、アグリツバを動かすほどの力を持つてゐるが、年若くて人を魅するドルシヤを悪んでゐた。彼等はガリラヤ海の一隅にあるカイザリヤ・ピリビに住んでゐた。其處はローマの役人やユダヤの貴族達が入湯に往つて遊んで來る、流行の地であつた。彼はユダヤに残つた只一人の王で、極めて小王國を領してゐた。然し彼はヘロデ大王の曾孫に當り、ローマ皇帝の保護の下に終生こゝに王たることを許され、彼の死後はユダヤに王と云ふものを許さないことになつてゐたのである。

兄妹はフェストの客となつて、歡待をうけた。そして種々話し合つてゐるうちに、フェストは不圖、



彼等の義理ある兄弟ベリクスの残して行つた囚人パウロの事を話した。今日までの行程も話して、カイザルに送ることになつてをると言つた。アグリツバは其話に興をそゝられて

「我も其人に聴きたいものである」と言つた。フェストは勿論望むところであつた。

「では明日謁見を給はるやう」と承諾した。

翌日アグリツバと妹ベルニケは大に威儀を整へてフェストをヘロデ王宮に訪ねた。半ばアグリツバを樂しませたい爲の審判であるから、フェストは千卒長等や市の長老達をも招いて、王を迎へた。席が定つてフェストが審判の座に上ると、パウロは早速引出された。パウロは既にアグリツバの前に立つことを豫告されてゐたので、用意は充分であつた。何の懼るゝ氣色もなく、例の服装で平靜に立つてゐた。フェストが先づ口を開いた。

「アグリツバ王、並びに諸君よ、諸公の見るこの人は、ユダヤの民衆がごぞりて生かしおくべきにあらずと呼はつて、エルサレムでも此處でも我に訴へたものである。然し死に當るべき悪いことを一つも犯してをるとは認められない。それで彼が自ら皇帝に上訴すると云ふに任せて、皇帝の許に送ることに決めたのである。ところが皇帝に上書すべき實情がない。それ故に諸公の前、特にアグリツバ王よ、殿下の前に引きだし訊問をしてのち、上書すべき條件を得たいと思ふのであります。囚人を送るに訴訟の次第を陳べないのは道理にかなはぬと思ふ。」

フェストの言には不親切な處は無かつた。パウロはルシヤを友としたごとく、此總督をも友とすることが出来た。愆一方のベリクスさへ多少の同情を持つたほどである。

次にアグリツバがパウロに向つて言つた、

「パウロよ、汝に自己のために陳べることを許可する。」

かくてアグリツバは椅子にドツカリ倚れ、フェストは、顔を手でさへてパウロを凝視めた。

## II O I I 「パウロよ、汝狂氣せり」

カイザリヤ・五十歳から六十歳

パウロはアグリツバ王の前に話すのは愉快であつた。王は祭司でも教法師でもない。恐らくサドカイ人でもバリサイ人でも無く世間的の賢い公達であつたから、かうした宗教上の紛争も、比較的公平に見分けるであらうと思はれたからである。彼はいつもの如く手を伸ばして満場を静め、アグリツバ王に鋭い眼光を投げつゝ口を切つた。

「アグリツバ王よ、私はユダヤ人から訴へられた凡ての事について今日殿下の前に辯明することを幸福と考へます、殿下がユダヤ人の凡ての習慣と問題とを知らるゝによりて殊にさう考へます。されば何卒忍びて私の言をお聴きください。」



「私の始めから國人のうちに又エルサレムに育つた幼い時からの生活の状は、ユダヤ人が皆知つてをります。彼等がもし證明したいと思へば、私が我々の宗教の最厳しき派に従うてパリサイ人の生活をした事を證明すればよいのであります。今私が審かれてをるのは、神が我々の先祖たちに約束し給うたことの希望に原因してをります。之を得んことを望みて我が十二の族は夜も晝も熱心に神に事へるのであります。王よ、この希望につきて私はユダヤ人に訴へられたので御座います。神が死人を甦へらせ給ふても、信じ難いと何故貴公等は云はれるか。」

「私も先にはナザレ人イエスの名に逆ふて様々のことをするのを宜きこと、思うてゐました。私はエルサレムで信徒を迫害し、祭司長等から權威をうけて多の聖徒を獄にいれ、彼らの殺されたとき之に同意し、諸會堂でしばしば彼等を罰し、強ひて瀆言を言はせやうとし、甚しく狂ひ、迫害して外國の町にまで往つたのであります。」かくてパウロはダマスコ途上の光榮ある出來事を物語つたのち更に言を續けて言つた。

「この故にアグリッパ王よ、私は天よりも顯示に背かないで、先づダマスコに居るもの、次にエルサレム及びユダヤ全國、また異邦人にまで悔改めて神に立ちかへり、其の悔改にかなふ業をなすべきことを宣傳へました。之がためにユダヤ人はわれを宮で捕へ、かつ殺さうとしたので御座います。然るに神の祐によりて今日に至るまで尙存へて、小なる人にも大なる人にも證をなし、説くところは預言

者とモーセが、必ず來ると語つたことの外はとかない。即ちキリストが苦難を受くべきこと、最先に死人の中から甦る事によりて民と異邦人とに光を傳ふべきこととを説いてをるのであります。」

「パウロよ、なんぢ狂氣したな。」大音聲に怒鳴つたのはフェストである。「博學なんぢを狂氣させたのである。」フェストはこの様な無茶な話はまだ聞いたことが無かつた、パウロはイエスを幻の中に見たと云ふ、其イエスはローマの兵隊の手で十字架につけられた、それが生きてをると云ふ。そんなことをパウロは到る處の市邑で宣傳して歩いたと云ふ。一介の武辯に過ぎないフェストには無理であつた。パウロはあまり學問し過して、狂氣になつたとか考へられなかつた。パウロは冷靜な凝視を王から離してフェストに注ぎ聲を落して答へた、

「フェスト閣下よ、私は狂氣はしてゐません。私の宣ふる處は眞であつて憚な言であります。王は此等のことを知り給ふゆゑに、私はその前に憚らないで語ります。これらの事は片隅に行はれたのではないから、一つとして王の眼に隠れてをることは無いと信ずるからであります。」急に輝く眼をアグリッパ王に返して、熱心溢れた聲を帯びつゝ王に迫つた、

「アグリッパ王よ、殿下は預言者の書を信じなさいますか、私は殿下が信じ給ふことを疑ひません。」パウロは王の返答如何と待つた。其眼光は王の胸板を射貫ねば止まぬ勢であつた。

王は蒲坐の中に詰め寄られて、たじろいだ。が漸く



「パウロよ、なんぢ説くところ儘にして、我をクリスチャンたらしめやうとするか」と反問した。パウロの返事は短刀の閃くが如くに來た。

「説くことが僅であつても多くても、私が神に願ふのは、嘗に殿下ばかりでなく、凡て今日私の話を聞いた者が、このやうに縲紲なわづめなくして私の如き自由の人間となることであります。」パウロは自分の手につなげてをる眞鍮の鍵を上げて言つたのである。

アグリッパ王は最早やパウロの前に在る力が無かつた。そして總督に眼くばせし、ベルニケを連れて座を立つた。是を見た列座の人々も立つて退場し、審判は中止となつた。

總督は一同を別室に招じて、熟した果實を盛り、上等のパンを供し、冷い葡萄酒を注いで雑談したが、其時フェストは

「この人は死罪または縲紲なわづめに當るべき事をしてゐない」と言ひ、アグリッパはフェストに

「この人がカイザルに上訴しなかつたら釋放していゝ」と評した。

### 二〇三 海路ローマへ

カイザリヤ・五十歳から六十歳

既にして總督フェストはパウロの問題を眞面目に考へ出した、そしてイタリアに渡らせることに定

めてあつたのでパウロや他の數人の囚人を近衛隊の百卒長ユリアスに委託した。船を求めたが漸くアジヤの諸港によりながらトロアスに近いアドラミテオ行の船を得て之に乗ることになつた。パウロの伴としては醫者ルカとテサロニケのアリスタルコが往くことになつて、カイザリヤの婦人信徒達の好意により、旅装萬端を整へて遂にカイザリヤに永の別を告げた。

長い囚人の生活の地から去るパウロの姿は見るも痛ましかつた。友人達は泣いた。テモテ、テキコオネシモ、マルコ等は各用向を帯びて他に行つてゐた。エベソやツロの信徒達は聲を立て、泣いた。

カイザリヤを離れた船は、お馴染みのシリヤ海岸線に沿ふて走つて、翌日シドンに着いた。百卒長ユリアスは多の同行の囚人中特にパウロ丈けを優遇し、上陸を許し自由に友人を訪問させたので、パウロ等は信徒の家庭でゆつくり款待をうけ、少からず旅情を慰められたのである。

シドンを辭してから直ぐ沖をさして出たが、風が逆ふのでクプロ島の風下かぜしたの方をはせ、更にタルソの西方に向つてキリキヤ海岸に沿ひ西に向つてパンフリヤの沖を過ぎルキヤのミラ港に着いた。こゝで皆船を下りバーマ行の便船を待つた。

漸くイタリア行のアレキサンデリヤの船に逢うた。是はエジプトからローマに穀物を運ぶ運送船であつた。一同是に乗つていよ／＼ローマに向つたが、頃は既に秋で海が荒れる時候であつた、で大船しか航海しなかつた。ミラを出てから眞直ぐに走ることが出來ない。ロデス島に行つてそれからアエ



ギアン海上を漂ふた。處々島々に難をさけもした。ずつと北のコス島の對岸にあるクニドの方まで上つたかと思ふと、またクレテの方に來た。やつとのことでサルモネ岬沖を過ぎ、クレテの一港である「良き港」と云ふ處に寄つた。こゝは數個の小島に陰されてゐて、ラサヤの町から近かつた。

十月でもあつたらうか。既に數週間海上にあつたがローマまではまだ三分の一路に過ぎない。一年中で最恐しい海の荒れる時が來てゐたのである。一ヶ月もすれば危険は一層甚しくなつて船は皆安全な港にかくれ、三月が來るまでは海上に船の影を止めぬことになる。この船の如き古い木造船は、船首と船尾に高い船室があつて中央に一本の帆柱に大きな帆がかゝつてゐる丈けであるから、大波を喰つたら大抵は海の藻くづとなつた。それで賢い船頭ならば、冬期に危険を冒すことを爲ないで何ヶ月でも待つたのである。

## 二〇四 怒る海、破る、船

海上・五十歳から六十歳

十月の中頃、贖罪の祭に斷食をする日が來たので、パウロは友人達と船中で斷食を守つたが、其と同時に海上危険の時機の時機迫つてゐるのを思つた。そこで前途について百卒長や船長等と相談のあつたときパウロは、

「諸君、私はこの航海は害ありて損多く、たゞ積荷と船とばかりではない、我々の命までも取られてしまふと思ふ」と忠告した。けれども船頭と船主は、この港は、冬を過すのに不便な港だからビニクスに到く方がよいと主張し多數の者も其に賛成したので、百卒長は其議を採用した。

ビクニスに矢張クレテの港であつて、「良き港」を去る六十哩の處にある。やがて南風が吹いて來たので、これ幸と錨をあげクレテの岸邊に沿うて西に進んだ。少し進んだと思ふ間もなく、ユーラクロンと稱ばれてゐた疾風がクレテ島から吹きおろした。見る／＼船は吹流され、風の自由に任すよりほかなかつた。到底目的のビニクスに向ふことは出来なかつたのである。

辛うじてクレテ島の東南にあるクラウダといふ小島の風下の方に幾分風を避けて、小艇を引上げて船體に巻き縛つた。また帆に風をはらませてゐては島のスルテスの洲に乗上げさうなので、帆を下して流れた。その日一日暴風に悩まされて生きた心持もなく次の日になつて、危険は却てはけしく遂に積荷を海中に投棄して、三日目には船具をさへ棄て、専ら人命の安全をはかつた。

數日の間は天地晦迷日星を見ず、暴風いやが上に吹荒んで一同は望全く絶え果てた。もう食ふものも喉を通らなかつた。

然しパウロは望を失はなかつた、絶望の淵に沈んでゐる人々を勵して云ふ、

「諸君よ、諸君は先に我が勸をき、クレテから船出しないでこの害と損とを受けないでゐる筈であ



つたのだ。然しいま我は諸君にすゝめる、心安くあれ、諸君のうち一人も生命を失ふ者はない、たゞ船を失ふであらう。わが屬する所わが事ふる所の神の使者が、昨夜わが傍に立ちて「パウロよ、懼るな、なんぢ必ずカイザルの前に立たん、視よ、神は汝と同船する者をことごとく汝に賜へり」と云ふたのである。この故に諸君よ、心安くあれ、我は我に語り給うたごとく必ず成ると、神を信じてをる我らは必つと或島に推上げられるであらう。」

船は漂流二週日、既にアドリヤ海上に在つた。ある夜半ごろ、

「陸だ、陸だ」と云ふ叫が人々を蘇生させた。水夫らが水を測つて見ると、二十尋ある、また測つて見ると十五尋だ。愈陸に近づいたのを知つたので、岩に乗上けることを恐れて船から錨を四つも投じて夜明を待ちわびた。

そのうちに風がだん／＼弱くなつて、泳いでも陸に達せられさうになつた。ところが不都合な水夫らは止つても何の得にもならぬ船から逃走を企てた。船から錨を引くやうなふりをして、小艇を下し、まさに其に乗移らうとする處で見付つた。

「この者共が船をすてゝは、皆が助からない」とパウロは百卒長等に警告したので、一切争闘があつたが、兵卒らは窮餘の一策を案出して小艇の綱を断切つて流してしまつた、そこで水夫等はいやく／＼船に止ることになつた。

夜の明け方にパウロは「諸君は待ち待ちて食事をせぬこと今日で十四日にもなる。今日は大に食つておかなければならぬさうしないと海を泳いで救はれることが出来ない。諸君の頭髮一筋でも首から落ちはしないから安心して食ひなさい」と注意を與へて、自ら先づパンを取りて神に感謝し、さきて食したので皆も安心して食事をした。其時船に居た者は凡て二百七十六人であつた。

飽くほど喰うたうへは穀物を海に投棄して、更に船を軽くした。いよく夜が明けて見ると、何と云ふ處かわからぬが、砂濱の入江である。是非そこに船を寄せたいものだと思つて、錨を断ちて海にすて、舵纜をゆるめ、船の帆を揚げて風にまかせながら砂濱さして進んだ。

ところが潮の流れあふ處に来て船を淺瀬に乗り上げてしまつた。船が膠着して動かない。ぐず／＼してゐるうちに船は激浪のために打碎かれた。人々はあはて、海に飛込み陸を目がけて泳いだ。兵卒等はそのどさくさ紛れに囚人等の泳いで逃けるのを恐れて、殺してしまはふとしたが、百卒長はパウロだけは救うてカイザルの許までつれて行く責任がある。で兵卒達の議を却けて、泳げる者は泳がせ他の者は板くづに乗せ船の碎片にのせて一同を上陸させ、皆助かることを得たのである。

## 二〇五 マルタ島及シシリイ島

マルタ・五十歳から六十歳



土地の人達は、難船のあるのを見て助けに出た。雨が降りしきつて、風は寒かつたが、土人等は親切に一同を待遇して火を焚いて皆を温めてくれた。此土地の人々はギリシヤ人でもローマ人でもなかつたので、野蠻人だとジュリアスが云つたことがある。けれどもさう言つたジュリアスも、彼等が洞穴で焚いてゐた火に温ることは嫌ではなかつたのである。

パウロが火を焚くための柴を束ねてをると、ふと一疋の蝮が出て来てパウロの手に巻付いた。それを見た土人等は

「この人は必つと人殺だらう。折角海から救はれたと思ふと蝮に噛まれて死ぬのだ。天道はこの人の生きるのを容さないのだ。」と言合つた。ところがパウロは平氣で蝮を火の中に振落して何の害をも受けなかつた。人々は腫れてくるか、今に倒れ死ぬるか様子を観つたが、少しも害を受けてゐないのを見て、こんどは反對に、

「此は神様だ」と叫んだ。

彼等の上陸したのはマルタ島であつた。今は英國の領土であるが、其當時はローマに屬するシロイ國の一部で島司はボブリオと云つた。土人達は難船者一同を彼の許につれて行つたので、彼は種々其由來をきき、三日の間懇切に皆の者を待遇した。時は冬なので、どうせ海に進むことは出来ないから、暫く島に滞在した。パウロはボブリオの父が熱と痲病とに罹つて臥し居るを聞いて、其病床を訪

ね、祈りかつ手を按いて其病氣を醫した。其が評判になつて、島の病人達はパウロの許に集つて醫された。大に喜んだ彼等は禮を厚くしてパウロ等を敬うた。

ローマへは、もう四分の一路である。二月になつて陽の光暖に花さへ咲き初めると、ユリアスは航海を續けることを考へた。滞在三ヶ月にして、いよくローマへ志すべく求めた船は矢張アレキサレデリヤの船で、「双兒」とよばれるものであつた。船首にはカストルとボラクス頭の彫刻が飾られ、船側には白い眼玉が書いてあつた。船出の時には、島の者等はパウロの恩を感じて色々な必要な品々を贈つた。

追風に帆を上げて一日で、シシリイ島の要港、古い市であるシラクサについた。そしてこゝに三日間滞在したが、若しパウロが買物に上陸したならば、そこに使用されてゐる銅錢の一方には娘の顔、他方には四頭立ての軍車を驅る丈夫の頭上には天使が花環をさけてをる圖のついでをるのを見たであらう。此島の人達は軍車競走に優勝したのがお自慢であつたのである。市壁の外にはダイアナの白い神宮があつた。三百年も以前に建てられたものであつた。その大祭壇で毎年四百頭の牡牛が犠牲として献けられたのである。パウロはこゝでユダヤ人にもクリスチャンにも逢つたやうには書いてない。シラクサを出て、シシリイの美しい岸に沿つて北上すると、エトナの噴火山からはたえず煙を吹いてをる。夜になると赤い火が見える。やがてメシナの海峡に入り、レギオンの港に寄港した。こゝは



早やイタリヤの尖端である。一日を過ぎて南風が吹起つたので、また帆を上げて狭い海峡を通過した。そこはシラとチャリブデスの瀬戸と云つて世界でも有名な狭い水路である。水夫達は恐れ、詩人は歌に唱うたほどである。一方には巖嶽たる岩石頭を列ねて寄らば碎かんと待ち構へ、他方には大きな大渦巻が、近かば呑まんと口を開いてゐるのである。詩人は猛犬の群が咆哮して居るに譬へた。

この瀬戸を抜けると船首は眞直ぐにローマに向けられ、三日にして達するのである。けれども全體を海によるのではない。大きな方形の帆を風一ぱいに張つて小さな島々の間を過ぎると青海が廣々と展開した。遠く右方にはイタリヤの山々が列立つて夕には紫に、曉には火の如く望まれた。晝はその山々をたよりに、夜は星に導かれて北へ北へと海岸に沿うて趨つた。カプリ島とカムバネラ岬の邊を過ぎると、春初めての穀物船であるから満帆で専ら路を急いだ。岬から岬へ、世界一美しいネーブルス灣を横つて行つた。平坦な土地から拔出たヴェスヴィア火山は、輝く青空に白煙を吹上げてゐた。其麓には驚くべき大都ボムベいの白い家々が見えた。恐しい噴火の灰と熔岩の下に此市が埋没したのはこれから間もないことであつた。其時かのユダヤの美しい王女ドルシヤと彼女の息子も遭難したのである。

群島が見え出すと、それが此灣の盡きる處であつた、そこにボテリオの港があつた。ネーブルスから七哩、間に山が境てゐた。ボテオリは其溫和な氣候と明澄な海水と、佳麗な風光との爲に、ローマ

の貴族社會の靜養地になつてゐた。皇帝は其灣の一方にあるパウロスに離宮を持つてゐた、貴族達は勿論其に倣うて建築の精巧と庭園の美を競うて各の別荘をこゝに營んだのである。

ボテオリは大きな港であつた、こゝで大穀物船は皆荷物を下して、ローマまではタイバー河を溯ることの出来る小艇に託して送つたのである。遠い國々から來た旅人達も皆大船をすて、或は陸路、敷石道を歩くか、または小さな近海航路船に乗更へて、ローマに往つたのである。此港には二重の船渠があり、又ヴェスヴィア山から切出した石灰石を用ひて築いた大埠頭があつた。是は海水が容易に碎くことが出来ないもので、海上に二十四個の拱門によつて突出てゐるが、今も一部が残つてゐる。

此黒い煉瓦の埠頭に「双見」船は入つたのであつて、パウロが初めてイタリヤの土を踏んだのもこの拱門の上であつた。船が着いた時には、春最初の穀物船として港の人々の歓迎を受けたことであらう。

いよく陸に上るとパウロの面前にはセラピスの奇態な宮があつた、其は大理石の壇上に建ち、非常に高い四十八本の飾付の圓柱に取圍まれてゐた。更に低い扉があつて更に多の花崗岩や諸地方から來た珍しい大理石の圓柱が列んでゐた。是こそパウロが征服すべく來たところの偶像の表徴であつた。それと殆ど同様に立派なのが市の戸外劇場であつて、皇帝も時々叫喚する群衆に交つて、武装した闘士とアフリカの獅子との決死の闘技を見物したのである。

然しパウロは是等の物から身を轉じてローマに往く敷石の街道に注目した。此道は歴代の皇帝が馬



車を驅り、女王が籠に乗りまはしたところである、凱旋將軍が軍車を轟かせて、世界の中心ローマへ馳驅した大道である。カリグラ帝は、このボテオリの埠頭から、自分の威勢を示したいばかりに、輝いてをる灣の上を、向ふの離宮まで馬で行き度いと云ひ出した。そして小舟を縛ぎ合せて其上に三哩の道を作らせ、黒い愛馬に跨つて其上を通り、甘つたれた坊ちやんのやうに、海の上を馬で渡つたなると言つて喜んだものである。

## 二〇六 アピオ街道に沿うて

ボテオリ・五十歳から六十歳

パウロ等が市中に入つたとき、本通に一つの方形の記念塔が立つてゐた。其は今日まで碎れたまゝ残つてゐるが、大地震があつてアジャ國の諸市邑に大損害を與へた時に寄せられた親切を感謝すべくチペリオ帝の記念に建てた石塔である。四角な臺石には各市を表徴する十二の美しい婦人像が彫刻されてゐて、眞中がエベソのであつた。パウロは其を見て、自分が光榮あるイエスの福音を宣傳した市が幾個入つてゐるか數へて見たことであらう。

ユリアスは兵卒と共にこゝに一週間滞在したので、パウロ等も許されてユダヤ人等の町をさがし當て、信者の人に歓迎されたものと思はれる。

七日過ぎて遂にローマへと旅立つた時は三月で、暴風雨の候は過去り、イタリヤの空には雲も無くなつた。ユリアスは輝く甲冑に長劍、短刀を帯びて、百卒長の章である葡萄蔓の短い杖を持つてゐた。そして兵卒共に各囚人を護衛させて、いよくローマさして進軍の命令を下した。ユリアスは馬に跨つてゐるが、パウロと其伴侶等も多分乗馬であつたらうと思はれる。ボテオリには驛馬多く、金さへあれば自由に備へたのである。

街道は廣くはあつたが、それでも春は、無數の牛馬羊群、奴隸、囚人、兵隊、駄馬、荷車が間斷なく通行するので、狭い位であつた。その上に貴族や大官が海岸の別荘に往來する、必ず乗馬で、衛兵や従者も馬なら、婦人子供は薔薇色や薄黄色の絹布で日覆をした座椅子によつて擔がれて通る。若し彼等が驅足で來やうものなら駄馬や荷車や、奴隸、商人の類は、散々に左右の野に飛退いて道を開けなければならなかつた。此街道は軍人でなければ幅が効かなかつたのである。またローマから各港灣の邑市に行く郵便屋は馬を走らせて廿哩毎に一ヶ所の驛に立寄つて葡萄酒をあふり、馬を代へたのである。

この雜踏の中をパウロ等は海の方から高い地へ、キヤムバニ街道へと進んだのである。兩側には濃緑の松林や高低起伏する青い丘陵があつた、直ぐ道傍には色々な色の四角の大理石塔が樹木に取巻かれて立つてゐるが、其は死んだ人の記念であつた。また一哩毎にローマを起點とした高い黒い里程標



が立つてゐた。其晩は、遠い青い山から冷い水を送つて来るヴァルターナス河に沿うたカプア市に泊つたであらう。カムバニア地方は今でもイタリアの最愛すべき部分である。一ヶ月もすると大夢は四呎位高くなり、葡萄の房下る陰には百姓の手が忙しい。ここでパウロ等はアピオ街道に出るのである。アピオ街道は世界中最高い道路で、ローマから真直ぐに通じて、他の端ブランドシウムまでイタリアを横断するものである。廣さ四ヤード、全部堅い黒い扁石を敷詰めたもので表面は磨かれ、石と石とは固く密着されてゐた。パウロが来た時から三百年前に溯つた頃の造營になり、延長二百哩、各哩に里程標柱が立ち、二十哩毎に驛が設けられ、路傍には休息所、乗馬臺として低い石のベンチが据ゑてあつた。アピオ街道と云ふ名は此道路と一つの市場を莫大な費用と努力とを惜まず建造したアピオ・クラウデオにちなんだのである。街道は山腹を切開き、谿谷には高い陸橋を渡し、山を切崩し、谷を埋めて、造られたものでローマ人が世界に於ける最上の道造人であつたからこそ出来たのである。其一部は今も見られる。

カプアを發つた彼等一行はヴァルターナス河の橋を渡つて終日其河に沿うて海の方に下り、夕方にはサヴォ川にかゝつてをるカムバニヤ橋を渡り適當な處に宿を求めたであらう。朝日と共に馬を進めると露に閃めく野からは霧が上つて丘陵をこめてをる。やがて海岸から森林地のアベンニネまで廣がつてをる葡萄で一杯のマイシカスの傾斜地を過ぎる。小高い處からは暫くの間、ポテオリの藍海や畑

を吹く三角形のヴェスヴィアス山を遠望することが出来る。まだ海に近い、リリス河の橋を渡ると岸には柳が枝を垂れて、なよやかな葉が水に浸つてゐる。毎日々々馬をすゝめては又休んだ、一方は海他方は丘陵である、フォルミアの美しい灣も過ぎたが、そこはシセロの別荘が有つたところで、シセロは百年前に其別荘で殺されたのであつた。テルラシナに來ると、此處には旅人の喜ぶ良い水の出る泉が有つた。是から海に背を向けて、ローマに面を向けるのである、里程標を見ると、まだ七十哩ある。

次の途は是までとは全く違つた趣があつた。海は長い森で遮られて見えなくなつた。其森は幾哩も續いてヴォルシア山麓に達し、其邊はボントインの沼澤地であつた、河が丘にせき止められて雨に會つては廣がつたのが其沼澤である。アピオ街道は此沼澤の間は盛上けられてゐたが、側には二十哩に亘る運河も有つて、うすのろの驛馬が小舟を曳いてゐた。パウロが此處を通つた三十七年許前に、ホレスと云ふ機智に富んだローマの詩人が、この曳舟に乗つて、重厚な質のヴァージル詩聖に會ひに往つたことがある。ホレスは其時一詩を賦したうちに、奴隸達が舟に乗らうとして先を争ひ、主人に打たれたこと、船頭が驛馬に曳綱をつけたり、舟賃を集めたりする有様、水が腐敗してゐて夕飯を食べることが出来なかつたこと、蛙が八ヶ間敷鳴いて寝られなかつたことなどを生々と畫いてをる。



## 二〇七 ローマ人の出迎

アピオの市場・五十歳から六十歳

春は沼澤に水が溢れてゐた、各沼を貫いて流れる河に水が多いからである。パウロは敷石道を行くときに渦巻く湖に小舟の遊ぶのや白い花をつけた葉の廣い蓮が沼一面にはびこつてゐるのを見た。盛重つた叢、揺ぐ葦、籐叢に水面の見えないところもある。鴨、白鳥、鵝鳥其他あらゆる水鳥が年ぢう巢くうて其あたりに飛交うてをる。

茶色の外套に雨をよけ、縞の頭巾に陽光をよけてパウロは兵隊と囚人の間を馬に乗つて進んだ、手にはまだ長い鍵がかゝつてゐた。一緒に引かれてゆくユダヤ人の囚人等が遠く生國から離れ、望を失うて、前に待つ恐しい運命の方へと、とほく歩行てゐる様は誰が見ても涙である、況んやパウロの胸は一ぱいであつた。

然しこゝに違つたユダヤ人等があつて、ローマからパウロの迎に出掛けてゐた。二年餘前にパウロはローマの教會に手紙を書いてケンクレヤのフイベに託した、その中にいづれスペインに行く途中ローマに立寄るつもりであることを認めたのである。ポテオリからローマの教會にパウロの到着を報じた者があつて、教會の人達は喜もしたが、パウロが囚人であることを聞いて悲んだ。パウロの手紙は

[ 700 ]

幾度も教會で讀まれてゐたので、パウロが來たと云ふ報知は、一同の哀愁をそゝつた。來るには來ても囚人である。而して彼が上訴した相手のネロ帝は若い悪鬼である。アクラとその妻、パウロの同族でパウロより先に信者であつたアンデロニコとユニアス等はローマにゐた。其他數名の者はパウロを運河の果にあるアピオの市場まで出迎へたのである。

運河の端に隙さうに立ん坊をしてゐる人々の中に、一人でも友人が待つてゐやうとはしらず、深い思に耽りつゝ兵隊の間ゆくパウロを見付けたアクラは、聲を上げて泣いたであらう。

パウロは疲れ果てゝゐた。ローマは目前に迫つた。けれども、いよく入都して見れば豫期に反すること如何に大であらうか。近づくに従つて、世界の巨人ローマ人の無慈悲な偉大さが眼につく。ローマの馬は奴隸よりも町寧に取扱はれてゐる、外國人は凡て野蠻人扱をされてをる。競技場で、ほんの娛樂の爲に虎の前に外國人を投與へて一日百人でも喰はせて平氣でをるローマ皇帝には、ユダヤ人の宗教やイエスの死の問題が何の興味であらうぞ。パウロは強い心を持つては居たが、また彼相當の恐怖も疑惑も失望もあつた。終日水の面に反射する陽の光に眼はつかれ、水の廣つた沼から上る惡氣に蒸されたパウロは、市場の屯營につれられる頃は、元氣沮喪してゐた。ローマから出迎へた人々は急いで、パウロの處に驅け寄つた。パウロは夢から覺めたやうに、こんな遠くまで友人等の來てくれたことを喜んだ。彼等の慰めの言をうけて、「神に感謝し、その心勇んだ」のである。

[ 701 ]



里程標は四十三哩を示してをる。運河の終點から馬を進めると、もう沼地は盡きて美しい景色が開けて來た、十哩の彼方には海も見える。他方は見渡す限り美しい丘や森、畑地である。十哩許ゆくとそこは「三宿」とよばれた宿場であつた。ローマの大雄辯家シセロはアンテアムにある自分の別荘からローマに上る途中こゝに立寄つて、馬を代へる間、休息して葡萄酒を呑んだと云つてをる。パウロはこゝでは更に多のローマ教會員の出迎をうけた。

## 二〇八 道の女王

ローマへの途上・五十歳から六十歳

ローマの都に近づくに隨つて往來の人馬は益數を増して眞に織るが如くであつた。兵隊達の間にしかし多のローマ教會員も加つて元氣恢復したパウロは勇んで道をいそいだ。アルパン丘陵を過ぎ、ローマ人の誇る小湖を後にすると、もうローマ郊外である。日常のよい丘の腹は富貴な市民の別荘や花園で一ぱいであつた。丘の肩まで道が上ると、忽ち彼の血を跳らせる光景が眼前に展けた。廣大なる平野、葡萄園、ゆるやかな丘と谷十哩の間に廣がる向ふに、世界の首府ローマが横つてをるではないか。「我はローマに行かねば」と云ふ希望は年と共にパウロの胸に熱くなつたが、今、つい眼前に彼の夢みた大都が日光の下に眠つてをる。征服し得るか、或は斃れるか。

兵隊が、綠野盡きて街路相錯繞し、輝く神殿の列ぶ邊を指示したであらう。そこがローマの中心である。ローマの市内から其につゞく郊外の町々は幾哩に亘り、路は四通八達し家々盡きず、上水道は白い石材を用ひて平野を横ぎり丘を越えて引かれてをる。

アピオ街道はこの平野を一直線に、矢の如くローマの中心に貫通してゐた。兩側には石垣をした園と家があつて其又うしろは牧場で羊飼が山羊の毛衣をきて笛を以て群を導いてゐた。白いデージーや黄色い金盞花がまだ朝露にうなだれてゐる頃雲雀は幾百となく天空に舞ひ、夕陽に空が眞紅の海と化する頃には夜鷹が絲杉から絲杉へ飛交ひながら暮行く野に、美音のしぐれを注ぐのであつた。

路傍の記念塔は旅人を驚した。數百年このかた大人物の死んだ毎に、ローマの貴族富豪が、記念塔を加へていつたので幾哩の間は甲乙相隣つて路の兩側に立列んでゐた。中には戸口も窓もあつて家の如きものがあり、小さな美しい普通の石塔の如きも有つた。無地の四角で堅固なもの、圓い、彫像のついたもの、色も種々で、白、桃色、綠、黒などの大理石、赤や灰色の花崗岩、黒い火山石、鼠色の石盤石、白の石灰石、茶や赤の煉瓦などで、皆ラテン語で誰人の爲であるか彫付けてあつた。此路は今もその石塔の遺物が列んでをるが、煉瓦の載積丈けのもあれば、碎れてはるてもまだ美麗なものもある。

その邊でパウロはガリエナスの別荘と彼の二階建の煉瓦の塔に、壁の凹處に彫像の立つてをると



を見たであらう。英國で死んだヴェラニアスの墓の字も讀んだであらう。少しはなれて林の中にハーケユールスの小宮も見えたであらう。大きなユリオス家の記念塔の處に來たときには、百卒長ユリオスは自分の祖先がそこに灰になつて埋められてをることを話したに違ひない。六人の勇士が決闘した處に立つてをる紀念の塔もあつた。途はまだローマの中心まで六哩ある。墓は益多くなつて、詩人、辯論家、歴史家、政治家、軍人などのものが肩を列べてゐた。セネカの別荘を教へられて、パウロは自分の友柔らかなガリオの兄弟である當時隨一の大政治家の住居を興味を以て眺めたであらう。ドルサスの拱門を通過すると、もう金の里程基標から一哩である。此門は今も處々こはれたまゝ残つてをる。ローマ市には石垣は無かつた、市民は軍隊が石垣で人民一人々々が煉瓦であると誇稱してゐた。昔は垣があつたのだが、それからち市の大部分は其垣の外に發展したのである。次の門は低い暗い隧道式のカペナ門で、此は舊市壁に通じてをつた。そして其上は上水道になつてゐたが、水洩を防塞ぐことが出来なくて、ボタ／＼洩通し、金持、貧乏人、奴隸、帝王の見境ひなく、下を通過する人の頭上に水を垂してゐた。肩の水滴をはらひながら、パウロは遂に古都の中心に乗込んだのである。

## 二〇九 金の標柱

ローマ・五十歳から六十歳

こゝでアピオ街道とラテン大道が會つて、交通は更に頻繁になつた。パウロの進む街には木造や煉瓦造の貧民の家が兩側に黒い壁の如く立つてゐた、其には窓がない、日光は殆んど地を照さない程高い建物であつた。その直ぐ隣には金持の家があつて高い煉瓦塀が街路線を作り、その内側には大きな庭園と王公の宮殿の如き住宅が建つてゐた。此大都市には富者と貧者の二階級しか無くて兩者の橋渡をする中産階級と云ふものが無かつたのである。中には美装して輿に乗つてをる貴婦人達も通るが街上に群る者は多く労働者貧民達である。ローマは七つの丘の上に建つてゐたが高い處には貴族富豪の住宅御殿があり、谷の底い處には外側に段階梯のある貧民長屋が有つた。長屋は夜ねるときか病氣の時でなければ用ひず大抵は戸外に生活してゐたのである。

狭い水の垂れてゐるカペナ門を過ぎると街路が廣く開けて前に、アヴェンティン丘とパラティン丘との間の谷全體に世界一の競技場があつて、十五萬人を容れることが出来た。ある時その喝采が怒濤の如く起るのでパラティン丘上の御殿で安臥を妨げられたカリグラ帝が、兵隊を送つて、皆を撃き出したことがある。

このマキシマス競技場で道の女王は凱旋道路に曲つた。パラティン丘上にはアゾロの神殿があつた。其をめぐつて宮殿や御苑がある。數百年來この凱旋道路を外國を征服して分捕物、捕虜を携へた皇帝や將軍が軍車の音勇ましく通過したのである。十年前ブリテンの王カラクタカスと王妃及王女が、こ



を群衆に迎へられて通つたが、今やパウロは誰にも氣付かれずにごゝを通るのである。而も何人よりも長く此世に名を残したのである。バラタイン丘を廻ると「聖い道」に出る。バラタイン丘とエスタライン丘との間に通ずる道で、前に見えるのがカピトライン丘で、ローマで最高く、最大のヨヴの神殿が建つてゐた。然しローマの中心はその低地にあつて、その公議所に帝國の支配者達や世界の偉人達が集會したのである。其に行く路の兩側には古い美しい宮が列んでゐて、カストル、ボラクス、ミネルヴァ、アウグストなどの宮があり、特に名高いのがヴェスタの宮で、最高貴な家族から選ばれた若い婦人等が女神官として之に事へ、幾百年消えずの神燈を點けてゐた、之を消すのは死に當る罪であつた。

此公議所の廣大な床は色敷石を敷詰め、其四方には種々の宮や公の建物が建つてゐた、其處に金を被せた大理石の標柱が立つてゐたが、是が世界の里程基標であつた。また其よりも巨大な演壇が据ゑてあつて、そこから世界の法律が發せられたのである。カピトル丘上の壯麗な諸建築がこのローマの國會場を瞰下してゐた。商人は賣買の爲に、雄辯家は演説に、哲學者は教へる爲に詩人は詩を唱ふ爲に、貴族達は公の問題を議する爲に此處に集つた、そしてごゝを宇宙の中心として誇り、その金の標柱から、恰も心臓から血管が派出するやうに、凡の道路が世界の果まで派出して居ると考へたのである。「總の道路はローマに集る」と云ふのが市民お自慢の諺であつた。

數百年このかた世界の各國は七丘の間の此凹處を富ます爲に奪略されたのである。アテネの最立派な像、エベソの最高價な寶玉、各國民各王の寶物が、この公議所を取巻き、或はゆるゝ樹木の間からごゝを瞰下してゐる神殿、圖書館、博物館、裁判所、大厦高樓の中に納められてあつた。

パウロは四周皆偶像宗教の立派な表現を見て心沈まざるを得なかつた。是はアテネの如くその力を失ふた市ではない、現に勢威頂點に達し、到る處力が正義を壓倒してゐること、世界を占有するローマ軍隊の威力を示さぬ物とてはないローマである。西北の門側には一萬の常備軍があつて、いつでも帝の爲に劍を抜いたのである。更に宮殿近くにも一部隊が宮殿護衛の任に當つてゐた。若いネロ帝は人民の愛情よりも兵隊の劍に信賴してゐたのである。

若しユリオスがパウロをローマ近衛軍指揮官に渡したとすれば、該指揮官は隻手の老將軍バルラスであつたらう。彼はセネカに次で皇帝の相談役であつた。勿論直接パウロに會はなかつたであらうが、話しだけは耳に入つたであらう。パウロは既に二年間も兵隊を友として厚遇されてゐたが、ごゝの立派な軍人の中に入つて、は殊に教育のある者、家柄の人々もあつたので、豫期しない優遇を受けたのである。



## 二一〇 古 橋

ローマ・五十歳から六十歳

フェストの報告やユリオスの途中に於けるパウロの行動に關する申告が、新しいパウロの監視者に好感を與へたことは想像に難くない。暫く兵營に置かれたのちパウロは自分の家を借りて住むことを許可された。ローマの友人達が保證書を書いたかも知れない。一人の兵卒を付けられはしたが、パウロは大喜で其家に移つた。

ローマ市には幾千のユダヤ人等が住んでゐて、ユダヤ町を造つてゐたが、處はタイバー河岸の至つて底い處であつた。彼等は他の市とちがつてかつて富祐な商人になることが出来なで、いつまでも貧しい行商や呼賣、縁日商人をやつてゐた。でもユダヤ教の傳道を試みてローマの婦人中には其教を聞いたものもあつた。

ローマではユダヤ人は常に壓迫されてゐた、つい先頃までもユダヤ人町をゲットトと稱して石垣をめぐらし、警官が其門を朝夕閉じたものである。パウロの來るずつと前皇帝クラウデオはユダヤ人を市外に放逐した爲に、アクラの如く市を逃出して、新帝になつてから再た歸つて來た者も多かつた。町がカピタル丘とタイバー河とはさまれた極底い處にあつたので屢洪水に浸つて街路は不潔であつ

た。タイバー河の眞中に四分一哩許の島があつて、ユダヤ人町のある邊から橋がかゝつてゐたが、其向ふに又も一つ橋が對岸に架つてゐて、其近傍の低地にもユダヤ人が群がつてゐたのである。

パウロは囚人でも遊んでゐる氣はない。なるべくユダヤ人に近い處に住んで傳道したいと思ひ、必つと此近所に家を借りたであらう。其家は集會が出来たと云ふから小さな家ではなく、ルカとアリスタルコも一緒だつたと思はれる。けれどもそんな低地で幾度も水に見舞はれた家のことであるから美しくは無かつたであらう。

其橋は百餘年前にフェブリシアスの造つたものでローマに於ける最古の橋として今日も残つてゐるが、建造者の名がちゃんと彫付けてある。パウロの足の踏んだと思はれる所は今日では先づ此橋位のものである。爾來二千年タイバーの流は盡きないで、此橋の影を映してゐる。その島には一つの宮が有つたのだが、今は病院が建つてゐる。

パウロはローマ書にも、往つたらイエスの教を傳へると書いたので、自由を得ると、萬事の用意をする三日が過ぎた後、ユダヤ人の重立つた人達を招き集めた。そして自分がローマに來た次第を述べた。

「兄弟諸君よ、我は、わが民わが先祖たちの慣例に悖ることを一つも爲なかつたのに、エルサレムから囚人となつて、ローマ人の手に付されたのである、かれらは我を審いたが死に當ることのないのを



見て、我を釋さうと思つたが、ユダヤ人がさからふたので餘儀なくカイザルに上訴することを許可したのである。然し勿論自分の國人を訴へやうとするのではない。故に我は諸君に會つて共に語らんことを願うた。我はイスラエル人の懐く希望の爲にこの鎖に繋がれたのである。」

ユダヤ人等はパウロがガリラヤ人イエスの信者であることを知つてゐた、暫く懇談したのち、エルサレムの議會からパウロに關して、何の指圖も受けてゐないから、兎も角パウロの説くところを聞いて見たいと云出した。

「われらは貴下についてユダヤから書を受けてをらぬ。また兄弟達が派遣されて貴下の事について善くない事を告げた者も物語つた者もない。たゞ我々は貴下の思ふところを聞きたいと欲ふのである。どうもイエスの宗旨は到る處で非難されてをるさうである。」

其日はパウロは餘り辯論することを好まなかつたので其まゝ開散した。けれども審判は仲々願番が來さうでない。いつ自由になるのか、殺されるのか分らぬ。自由に歩けないからと云つて一日も忽にすべきではない。そこで日を定めて第二の會見を試みることになつて多くのユダヤ人等が、パウロの家に來た。パウロは朝から夕まで、神の國のことを説明して信仰の證をし、また舊約聖書を引いてイエスのことを勧めた。

ユダヤ人等は例の如く議論を初めた、パウロの言ふことを信する者もあれば、頭から信じない者も

あつた。甲論乙駁して遂に何の得るところも無く退散しやうとする人々を見て、パウロは悲憤の一言を發せずには居られなかつた。

「宜なるかな、聖靈は預言者イザヤによりて、諸君の祖先たちに語り給うた、云く、

汝等この民に往きて言へ、なんぢら聞きて、聞けども、  
悟らず、見て、見れども認めず。

この民の心は鈍く、耳は聞くに懶く、目は閉ぢたればなり。

これ目にて見、耳にて聽き、心にて悟り、

翻へりて我に醫さるゝこと無からん爲なり。

然れば諸君よ知れ、神のこの救は異邦人に遣はされたのである、彼等は此教を聽くであらう。」  
退散して家々に歸るさ、パウロは正しいと云ひ全然間違つてをると云ひ議論は盡きなかつた。

## 二二二 魚の暗號

ローマ・五十歳から六十歳

裁判を待つてをる者はパウロ丈ではなかつた。ペリクスがユダヤ總督を止めたとときユダヤの祭司數人を裁判を受けさせる爲にローマに送つたが、其公判日が三年も來ず、漸くユダヤの大史家ヨセフ



アスの願によつて釋放された位である。其人達に比べればパウロは幸であつた、自分の家にゆるやかに住めたのは何よりであつた。

ローマではユダヤ人は其宗教の故に嘲けられてゐたが、基督教徒は一層嘲笑の的となつてゐた。ローマの兵隊の手で十字架上に殺されたユダヤ人を拜み其が今生きてゐるなどと云ふことは金持は一笑に附し、貧乏人は愚弄の種にする位のものであつた。パウロが其書簡の中に言つてゐるやうに、單に愚だと見たのである。兵士や職人や奴隸達は仲間の者がクリスチャンになつたと云ふと粗野な罵言を浴せた。即ち驢馬を拜んでゐるのだと罵つて、頭は驢馬の人體が十字架についてゐる處を畫いた。之に對して信徒達は共同の暗號を持つてゐた。其はギリシャの名で、イエス、キリスト、子、神、救主の五字を表徴する魚の形であつた。人前で話の出来ない時に砂の上に魚の畫をかいて、直ぐ足で消したのである。ローマに誰が基督教を傳道したのか不明であるが、とにかくパウロの來るよりも可成かた前から傳つてゐるに相違ない。初は他の市と同じに小さい集會で、個人の家を巡廻してゐたらしく、アキラの家は其一つであつた。信者が殖えて來て家ではつとまらなくなると、郊外の寂しい凹地や物陰で夜陰かに、人顔も見えぬところで、靜に集會を開き、誰が獎勵をして、それから詩篇を唱ひ祈禱をしたのである。

基督教の傳はるすつと以前からローマの人々は大部ユダヤ教に心を惹かれて、その律法には従はな

かつたが、神を信じ之を拜する者も出來てゐた。殊に婦人が心を傾けて、ある貴婦人で神を拜してゐる者もあつた。基督教を聞くに及んで、ある者は公然とある者は秘密にクリスチャンになつた。それでパウロが來たときには奴隸や平民や金持の人や、宮殿中にさへ秘密の信者が多く有つた。此時はまだ秘密を保つと云つても、罰を受けるからと云ふのではなく、罪人として十字架につけられたことを現に生きてゐる人でも知つて居ると云ふイエスを信することを嘲弄罵詈されるのを嫌うたからである。然し間もなく信徒達はイエスに對する信仰の故に野の獸の如くローマ市中を狩立てられる時が來るのであつた。

然るにパウロは秘密にはしてゐなかつた。誰でも自分の家に來てくれ、ば教を説くと云つて友人達に廣告させた。パウロがローマ書中にもローマの支配者を敬ひ納税の義務を力説したのは、監視者の好意を得た。又實際今説くところを聞いても、人を善良にして國家に忠なる人間を作るものであると思はれた。勞働者等はたえずパウロの許に來て教を乞うた。貴婦人の來ることもあつた。

或時は又信者丈けの集をした、中には二十五年の久しき信徒である者もあつた。さうした時にはパウロは例の調子で熱烈な獎勵を試みたであらう。かくてパウロの傳道の結果は宮廷にまで及び、最上品な婦人で帝の寵愛をうけてゐたポピアさへ秘密に賛成したと云はれてゐるが、其は疑はしい。時は容赦なく過ぎた、友人達はパウロの假寓を訪ねて慰めてゐるが、待ちに待つ公判の日は一向來



ない。そのうちに忠實な友テモテが後を追うて来て今はローマに居た。ピリピの教會員達はパウロが上訴してローマに渡航したと聞いて、エバフロデトを使者として金を届けて来た。殊にローマでは地獄の沙汰も金次第であると知つてゐた彼等は、多額の金を贈つたに相違ない。パウロは其親切を心から感謝した。

パウロがテモテと谷を上つて平野や輝く河を瞰下す美しいピリピの市に初めて行つてからもう四年になる。ピリピで初めてマケドニヤ傳道を試みたのである。市場で公然と嘲罵されたのである。最後の旅にはこゝに留つて友人と共に逾越節の食事をしたのである。ピリピの教會員等はパウロは自分達が支へる責任があると思つてゐたと見えて、テサロニケに居たときは二度も金銭を贈り、今は又遠いローマまでも使者を送つて来たのである。或はかの富祐な紫布の商人ルデヤが、妻子も無く何の益も考へず、専ら人々の爲に金を捧げてをる旅の傳道者を援けるやう教會員を激勵したのかも知れない。

パウロは此處で、ピリピの教會に感謝並に奨励の手紙を書贈つた。其中に自分が福音擁護の爲に囚人となつてをること、然も失望してはるらないこと、加斯は却て福音の助けとなつたこと、ピリピ教會が愛に於て一心同體たるやう祈ること、テモテを早く送つて自分の日常生活の有様を知らせたく思ふこと、エバフロデトが幸に病氣回復したので先づ彼を返すこと、福音の爲に共に勞した二人の婦人ユウオデヤとセントケに特別に奨励を與へ、一同が此二人を助けるやう願ふこと、最後に彼等の親切を

感謝することなどを記してをる。またローマの信徒達殊にカイザルの家の者が安否を問ふと書いてをる。彼の言葉は側にある番兵をも感動させたであらう、曰く、

「終に言はん兄弟よ、凡そ眞なること、凡そ尊ぶべきこと、凡そ正しきこと、凡そ潔よきこと、凡そ愛すべきこと、凡そ令聞あること、如何なる徳、いかなる譽にても、諸君これを念へ、諸君は我に學びしところ、受けしところ、見し所を皆おこなへ。然らば平和の神は諸君と偕に在すであらう。」

## 二二二 怪物ネロ

ローマ・六十歳から六十四歳

パウロの眼にうつゝたネロ帝は、まだ二十五歳で、ほんの子供であつた。彼はクラウデオ帝の實子ではなかつたが、彼の寡婦になつた母親が無理に彼を押上げて、正當な王位繼承者で腹違ひの兄弟であつたブリタニカスを差措いて、十七歳の時に即位したのであつた。彼が帝位に即いて一年も経たないうちにブリタニカスを毒殺させてしまつた。年がたつに隨つて彼は實母が憎くなつて、彼女を殺すやう命じた。彼の下の悪黨共は初め彼女を溺死させやうとして果さず、遂に短刀で突殺した。

ネロは先帝の從順しい娘、ブリタニカスの妹であるオクタヴィアと結婚したが、ちつとも愛さなかつた。そしてパウロがローマに來た頃には、其を離縁して、其上どうかして彼女を殺害して、ローマを



騒がせないでボビアと結婚する方法は無いものと考へてゐた。これは讀者諸君に、如何なる人物が當時ローマを支配してゐたか、パウロはカイザルの名をあてに上訴したのだが實際のカイザルは誰であつたかを知らせる爲に引くネロ帝の罪惡の一部に過ぎないのである。少年で世界を支配し、自分の好きな事は何でも出来、殺したければ誰を殺してもよいと思つたネロは、あらゆる惡事に耽り、惡い友達の教唆に乗つて放縱止るところを知らず、其惡行惡心の嵩んだ結果が遂に本統の氣狂になることが有つた。此精神に異狀を來した若者は、帝王は國民の神様である、どんな惡い事をしても罪にはならないと教へられたのだから大抵の人間ならば狂亂して仕舞ふ。神殿で神様として自分を拜ませお賽錢を卷上げるばかりでなく、ローマの帝王は他に大なる収入の途が有つた、即ち征服した各國から貢を取立て、其巨額の収入を以てローマ市中にある二萬の近衛兵の費用にまで當てることが出来た。エジプト其他の國々から來る穀物船の齎す荷物は河岸の大倉庫に貯藏してあつて、無料で人民に頒ちネロの時代には全市民の中半分までは皇帝の穀物を食つてゐたと云ふ。

ネロが帝位についた時は、自分の師傅セネカを國政萬般の事に當らせ、正直者のバルラスを軍隊の長官にする位の志は持つてゐた。そして此二人の言に従うてをる間はローマの政治は良く行つたのであつた。然し間も無く二人も、反對すれば殺されるのだから帝の非行を手傳はなければならなくなつた。放縱に氣狂ひ、權力に酔ふた若い皇帝は、不満足と云ふ惡鬼につかれた。神様として拜まれる丈

けでは満足しない、人間として世界の詩人、唱歌手、役者、音樂家、舞踏家、軍車選手として稱讃せられなければ満足が出来ないと云ひ出した。樞密院の連中も是には弱つたが、帝は何と言つても諾かない。遂にセネカ、バルラス、柔和なガリオ、詩人ルカン、その他同じやうな教養ある人達が、餘儀なく、馬鹿者の爲に劇場支配人となつた。宮中の廣い庭に劇場を造つて人々を一ぱい入らせ、弱々しい若者ネロが、雪白の衣をつけて、囁聲で歌を唱つたり、震へる手で金色の琴を弾じたり、細いふら／＼する足元あやしく踊つたり、自分の作つた詩を暗誦したりする毎に、皆に拍手喝采するやう頼んで置いて、拍手しない者があるか番兵を所々に立たせると云ふ滑稽もあつた。そして馬鹿息子のやうに必ず一等賞を貰うて喜んでゐた。然しこんなのは彼の宴會、酒宴、娛樂、非行や、其爲に費した莫大な費用に較ぶれば何でもなかつた。貴族達は其家族を擧げて公然之に参加しないと御機嫌を損ねて死刑になつたり財産を沒收されたりしたのである。

パウロは是等のことを見ることを許されなかつたであらうが、話しは聞いて、こんなカイザルに上訴したことを失望したであらう。或は街上でネロを見たことは有つたかも知れない。若いネロは白い顔をして長い黄色の髪を垂らし、小さな慘忍性の眼を持ち、角張つた顔で、紫水晶色の外套に頑固な體と組長い脚をつゝみ、頸に柔な絹の衿卷をして、其を風に當つて、囁聲が一層非道くならぬやうにと、毛深い白い手で喉に押付けてゐたであらう。



パウロは外出の時は兵卒の手と自分の手を例の鍵で縛いで町を歩いた。丘の上の軍人や貴族の御殿も見たが、彼の同情したのは、谷の長屋に夜を過す無数の貧民であつた。生拔はまきのローマ人は勞働を賤しんで、奴隸の役だと考へてゐた。自由民には恥であると云つて闘つても働くことは爲なかつた。で凡ての勞役は主として奴隸がするのであつた。街上や市場には色々の商人が居た、酒、花、油、水其他種々のものを呼賣してをる。流行唱を歌ふて金を貰ふもの、憐を乞ふ乞食まで群がつてゐた。曉から正午までが大小の商店の賣買時で、女や子供は午前中に諸の宮詣をして献物をし、祈願をこめた。正午が來るとガラリ光景が變つた。公議所の傍にある元老院前の敷石に引いた一つの線の上を太陽の影が通過するや否や、一人の男が大聲で下の群衆に知らせると、人々は忽ち仕事から手を離して晝食の爲に家路につき、商店は閉ざされ各神殿は閉塞された。午後はネロ橋の上の河の曲角にある廣いマース野で娛樂が初まつた。陽の暑い間少し晝寝をして心身爽快になつた老幼男女は幾千の群をなして兵隊の擬戦や、徒競走、競馬、投槍、鐵環投、高跳、球技などを見物に出掛けた。河が近いので競技した若者達は水に飛込んで汗を洗ひ、次のゲームの用意をしたのである。水泳の競争には兩岸が人で埋まるほどで、ローマ人は遊び事が好きであつた。

### 二二三 祭禮、傳導者、馬鹿競走

ローマ・六十歳から六十四歳

ローマ人はユダヤ人と同じに年ぢうお祭をしてゐたが、ユダヤのよりは一層宗教的分子が薄くて遊びの方が主であつた。新年の祝は野花咲き初める三月にあつた。五月祭は花を飾つて歌ひ踊つた、殊にフロラの美しい像に花をさゝけて、美しい物は皆フロラのお恵だと稱へた。葡萄の結實むすの頃には初穂を白い衣をきたジュピターの神主かみが探つて、其を合圖に收穫とれをし、八月祭が全國に行はれた。秋は收穫の楽しい祭があり、十二月にはサターナスの祭が有つて、其時の酒宴、淫樂の狀は殊に甚しく、今日泥酔の宴樂を言ひ表はすのにサターナリヤと云ふ英語になつてをる程であつた。

お祭には多の獻物があつたので祭司等の収入はそこから多く來た、町を神輿ひきまわが通ると脆ひびいて拜むもの酒をあふる者などが有つた。神體は無形の何かの神様を表はすもので其數天の星の數ほどもあり、直接間接に人間の生活に交渉あるものと信じてゐた。

ローマの立派な人達、セネカの如きも世には只一人の眞の神があると云ひはしたが、大多數の者はそんなことは考へなかつた。正直、武勇、從順、男らしきこと、快活、食物、飲物、家、衣、娛樂さへあればローマ人は満足してゐた。各家庭には臺處の火の神様ヴェスタの神棚が祀つてあつた。

パウロは此の様な市民の中に住んで、傳道の心熾であつたが半ば自由の無い身で心ばかりあせつたそれでも帝王の宮殿ばかりで無く、河岸のパウロの茅屋を訪れて其高き教を聞き之を信する者も與へ



られたのである。「その許にきたる凡ての者を迎へて、更に隠せず、また妨げられずして神の國をのべ主イエス・キリストの事を教へる」ことが出來たのである。

其間にネロ帝の愚な放縱生活は益其度を加へるばかりであつた。悪戯を好み墮落し切つた若い皇帝は元氣で大ざつばな男と思ひの外、却て心弱い陰險な臆病者であつた。彼は貴族達の前で宴樂に耽つたが、そんな事では足らず、もつと多の人に大に讃めて貰ひたかつた、そしてマキシマス競技場で、最下等の人間からまで喝采を受けたいと思つた。彼の老いたる友バルラスは其を諫止したが、いつの間にか病氣になつて死んだ、市中には忽ち毒殺されたのだと云ふ噂がバツと散つた。彼の代りにネロの若い寵臣チゲリナスを置いた、チゲリナスはどの様な不名譽なことでも帝を喜ばす爲なら歓迎した、そして誰にも帝の爲すところを兎や角言はせてはならぬと進言した。こゝに到つて、セネカは宮城は自分の居る處でないと見限つて、病と稱して賜暇を乞ひ、ローマを退いて靜に哲學の研究に餘生を送ることになつた。

チゲリナスを顧問としたネロは益深みに陥るばかりであつた。彼が其威勢をねたみ、懼れ、其富をうらやんだ貴族達は皆殺害した。遂に柔らかなオクタヴァを殺して、美しい牝虎ボビアを入れるに至つた。パウロも其噂をきいたであらう、市ぢうの者は之を悲んだが、小聲にもネロを抗撃する者は無かつた。

チゲリナスは、普通の軍車競技に加はるやうネロにすゝめた。此帝冠をいたゞいた馬鹿者は其に同意して、マキシマス競技場で帝王親ら軍車を驅り給ふと云ふ布令を出させた。夜の明ける前に競技場の坐席はあらゆる種類の人々で立錐の地もなく塞がれた。日覆の下には元老院議員、軍人、政治家、大官連がつめかけた。婦人連も別席に今日を晴れと着飾つて集つてゐた。彼等は心中ではローマに替へない耻しい事だと思ひながらも出ないわけに行かなかつたのである。

一人の役人が皇帝席から、出發の合圖に白いハンケチを落し、も一人が決勝を審判することになつてゐた。此時ほど紅、青藍、白、金、緑、眞紅の輝かしい軍車、油につやくしい立派な駿馬の出揃うたことは無かつた。其中にネロ帝の象牙と貴金屬製の軍車、羽飾をゆるがしながら勇立つて現れた四頭の純黒の逸物が際立つて見えた。ネロは金色燦たる輕羅を紫水晶で肩に止め、上機嫌で出發點に進んだ。各騎手は各自の色、赤、青、緑、黄、桃色などを記號にしてゐたが、ネロは紫のリボンをつけてゐた。

白いハンケチが揺れると、騎手達は一齊に掛聲勇ましく、長い鞭を頭上に打振つてピストルの爆音のやうな音を立てた、馬は矢の如く跳躍した。長いコースは黄塵車影を没するばかりになつた。騎手達は雄叫き鞭打つた。皇帝も怒號し鞭打つた。如何にも眞劍勝負のやうに見えた。ネロは自分の軍車が一等先か幾度も振返つて見た。氣狂のやうに興奮してゐた。勿論彼が一等である。彼に追付くと皆



手綱を引いて速力を弛めたのである。競走には違ひなかつたが、問題はたゞ誰が第二着かと云ふことであつた。騎手達の苦心は皇帝より先にならないやう、はやる馬を御することであつた。

コースを走り切らないうちに、見物人等は早くも其様子を認めて滑稽に思つた。ネロは自分の後で何が行はれてをるか知らない、一生懸命鞭を打振つてゐた、喝采拍手の音丈けは耳に入るが、嘲笑の聲は聞えなかつた。コースを二回まはらうが三回廻らうがそんな事は問題でなかつた。夜半まで驅廻つたところで結果はちやんと定つてゐた。ネロが頭上に鞭を振舞し氣狂聲を立て、決勝標目掛けて疾駆したとき、審判官の合圖は不要だつた。軍人、元老院議員等の喝采や、兵隊の音頭について二十萬の喉から絞り出す萬歳の叫喚にネロは自分が古今未曾有の軍車競走に優勝したことを知つて得意満面であつた。彼は實に皇帝の頭に置かれた永遠史上に残る最暗愚の冠を勝得たのである。

彼が片膝を折つてひざまづき綠葉の月桂冠を、もつれたちぢれ毛の頭に受けた時、彼自身は氣付かなかつたが、見物人は最下等の者に至るまで、ローマは何と云ふ愚物を帝王に戴いてをることか、と心に思ひ、やがて家に歸つて更に幾十萬の人に語り傳へたことであらう。

## 二二四 臃な影繪

ローマ・六十歳から六十四歳

ルカはパウロが滿二年の間ローマの借家で傳道したことを記して筆を措いてをる。少くとも其二年間は裁判が無かつたのである。その間に今一つ愛するテモテに手紙を書送つた。テモテは此時ビリビに居た。此手紙によるとパウロは覺悟はしてゐたもの、殺されるには間が有ると思つてゐたらしく、テモテの處に手紙が着いてそれからテモテがローマに来る時日が有ることを信じてをる。やゝ不明な點もあるが、左の一節はローマに於けるパウロの生活を想像させるものである。

「テモテよ勉めて速かに我に來れ。デマスは此世を愛して我を棄て、テサロニケに往き、クレステンはガラテヤに、テトスはダルマテヤに往きて、唯ルカのみ我とともに居る。マルコを連れて來てくれ、彼は職のために我に益ある者である。我テキコをエペソに遣つた。汝が來る時、我がトロアスでカルボの許に遺しておいた外套を携つてきてくれ。また書物、殊に羊皮紙のものを携へて來い。金細工人アレキサンデルは大に我を惱した。主はその行爲に隨ひて彼に報いたまふであらう。……わが始の辯明のとき誰も我を助けず、みな我を棄てた。願くはこの罪の彼らに歸せざらんことを。然し主はわれと共に在して我を強めたまうた。これ我によりて宣教が全うせられ、凡ての異邦人がこれを聞く爲である。而して我は獅子の口から救ひ出された。また主は我を凡ての惡しき業から救ひ出し、その天の國に救ひ入れ給ふであらう。」

ルカが二年の間パウロが傳道をしてゐたと書いて筆を切つてをる其後のことは雲霧の間を搜るやう



なもので、時々時間を見る位のものである。ローマの大混亂の渦中にあつてパウロ等がどうなつたかは呪はれたローマ市の歴史によつて想像する他はない。此頃には天は暗くなり増つて、ユダヤ人もクリスチャンも人類の歴史初つて以來の大迫害の下に立たんとするたのである。パウロは其黒雲のどの邊に立つて、どれ丈の間暴風雨と戦ふたか、パウロの審判と死は朦朧として知るを得ない。電光の間には彼の突立つてる姿が見えるが、暴風雨の後には影も形もない。

或は愈ユダヤから訴人が来て、ローマ法廷にパウロが例の調子で勇敢に裁判に面した光景を想像することが出来る。

或はテモテに書いた手紙から想像して、「一度ローマを去つてミレト、クレテ、エベソ、トロアスの邊までも傳道航海をやつたやうにも思はれる。然し何時どうして往つたか、考へて居るうちに雲が深くなつて来る。

ある時は審判廷で最後の判決を下され、獅子の前に投ぜられたが、救出されて、「審判とは何ぞや」と叫んだかと思はれるが、矢張黒雲が厚くて真相を捕へることが能きない。

さうかと思ふと忽ちテモテに最後の手紙を認めた時の光景が我々の眼に映る。彼は紙を伸べて、黒インキで筆太に記して云ふ。

「我は今、供物として血を注がんとしてをる。わが去るべき時は近づいた。われは善き戦闘をたゝか

ひ走るべき道程を果し、信仰を守つた。今よりのちは義の冠冕がわが爲に備へられてをる。かの日に至りて正しき審判主なる主が、これを我に賜ふであらう、當に我ばかりではない、凡てその顯現を慕ふ者にも賜ふであらう。」

かくも愛されたパウロの周圍に密雲が群り來つて全く其影を蔽ふた。我等はもはや彼を見ることができない。靜寂の境に呼求め、暴風の中に耳を傾くるも彼の聲は聞えない。暗をさぐり、雲の切間から殺人の穴、火の谷、逃ぐる人々の群を見つめても、活ける者の中にも死ねる者のうちにもパウロの影に似たものすら認められない。我等は仕方なく両手で眼を蔽ふよりほかない。たゞ最後に想見し得るのは、パウロがたゞ一人で體を鍵につながれたまゝ、精神は自由に、聖き愛と榮光に燃え立ちつゝ、彼が上訴した、カイザルの白い手で放火された懼ろしい炎燒の眞中に、將に没し去らんとする雄姿である。

## 二二五 ローマ炎上

ローマ・六十歳から六十四歳

今や我等は將に火の塊となるローマを視なければならぬ。二人の情慾の權化、内にはボビア、外にはチゲリナスがついてゐてネロは益悪行の道を跳ね踊つていつた。



ローマに飽いた彼は、外國に出かけて風を切つて歩いて見たくなつた。教養あるアテネのギリシヤ人等は、まだ彼のヒビの入つた聲を聞いたことが無い。古い市に住む銅色のエジプト人は、彼のちやれ毛となよ／＼しい歩調とを見たことが無い。然し元老院は、皇帝がお留守になつてはローマの人は面白くない。また食物の供給が其不在中に缺いたら困ると云つて是丈けは思止らせた。

ネロの宮殿の近所に大きな池があつて、周圍には美しい樹木が植つてゐた。ある日のこと彼はこゝに貴族貴婦人達を招集して、彼等が倚羅星の如く岸に列んでゐる中を素晴らしく飾立てた筏に寵臣美伎達と乗込んで、靜な音楽に合わせて池中を銀の橈で漕ぎ回つた。またローマ人の決して忘れることの出来ない日に若い皇帝は婦人の着物をきて花嫁のヴェールをかけ、一人の寵臣を新郎に仕立てさせてリボンで飾られた其筏に乗つて結婚遊戯をやつたものである。

然るに恐しい災厄がまさにローマ市に落かゝらんとしてゐた。空前絶後の火災と破壊が、やがてローマを廢趾たらしめんとしてゐた。誰が放火を命じて、誰が手を下したのかは永遠の謎である。

基督紀元六十三年の炎暑の候、七月十九日に、ローマの木造の長屋が、焦けつく陽の下に火絨の如く乾燥しきつてゐた時に、炎々たる火穂が、マキシマス競技場の宏大な木造座席の東端に接して建てられた可燃物の貯藏倉から突如として上つた。見る／＼大競技場が一面の火の柱となつて天に沖するや、東の烈風が、火炎の流を、家で満ちてゐる重なる谷間に吹送つた。炎は町から町、谷から谷に飛び

怖しい勢で貧民の長屋を焼き拂ひ、樹木を傳うて、丘上の大厦高樓を甜めた。火事は市を横断して漸くタイバー河に至つて喰止められたが、ユダヤ人の町も焼失した。パウロの家も一緒であつたらう。河に喰止められた炎は北方に擴がつていつた、そして六日間と云ふもの、晝は朦々たる黒烟の爲に夏の陽も暗く、夜は眞赤な火炎が天に沖した。六日に亘る火災が漸く終熄するかと思つたとき、今まで免れてゐた悪魔チゲリナスの所有物から再た炎が上つた。風が變つて更に三日間火炎天を甜めた、其時神殿や公の諸建物が灰燼に歸した。火は九日間にローマ市の端から端で三往復したのであつた。漸くのこと天晴れ、陽が黒焦の火事跡を照すと、家を失つて惨めな様をした人々は、誰の罪であるか吟味し初めた。彼等は何でもよい事があれば皇帝を讚め、不幸があれば、皇帝を非難した、皇帝は彼等の神様であるから尤のことである。火事が起つたときネロはアンテオムに在つて海風を楽しんでゐたが、ローマ炎上の報があつても平氣でゐた。そのうち自分の好きな庭園に火が迫つたと聞いて始めて、市に驅返つたのである。

人民は皇帝の冷淡なのに憤つた、殊に火事後の彼の態度が人々の猜疑心を高めた。火事が熾であつた最中にネロは丘の上の宮殿に居て、子供のやうに喜び、手馴れた七絃琴を取寄せて、二三の友にトラス焼失の歌を唱うてゐたと云ふ噂が市中に廣まり、遂に地方にまで傳つた。また「俺の存命中に世界ぢうを焼き却てろ」と云つたと云ふ噂もあつた。彼はまた澤山の材木を用意して、平民は皆タイ



パル河の向ふに小屋を造つて其に入れ、ローマは「黄金殿」と稱する古今未曾有の大宮殿を中心にして真直ぐな街路を造り、大建築物を列べやうと云ふ再建の計畫を企てた。

そこで人民達は、ネロがローマに火をつけさせたのだと噂き初め、それがいつとなく信ぜられ、本統になり噂が評判となり、遂には壁に落書されるに至つた。其がネロの耳に入つたので、さすがの彼も驚いた。ネロは人民の御機嫌取りに、養つてやり、樂ませてやり、墮落までさせたではないか。然るに今ローマの狼共は彼を八つ裂にしかゝつてゐる。どうしてやらうか。彼の頭にはたつた一つの考が有つた。其は無辜の民に罪を被せて最惨忍な手段で之を殺し、其によつて自分から狼共の眼を轉じさせやうと云ふのであつた。恰度其處にユダヤ宗徒が居た、皇帝の前に膝を曲けず拜みもしないで見えざる神を拜すると稱ひ、イエス・キリストを主として仰ぐと云ふ連中である。クリスチャン等はどこでも嫌はれ嘲罵されてゐた、ネロの青い眼は、彼等に注がれたのである。

## 二一六 「基督教徒を獅子に喰はせ」

ローマ・六十歳から六十四歳

探偵共の報告によるとクリスチャンは夜市外の寂しい處で秘密に會合し、うす暗い灯提の下で禮拜を守り、理の解らぬ恐しい儀式を行つてゐる。彼等は市の宮に詣でず、偶像を拜まず、公の祭壇に獻

物もしないで、たゞ見えざる神と其子イエス・キリストとに事へて而も賽錢も上げなければ香も焚かない。祭壇も神社も持たずたゞ手を合せてひざまづいて祈り、次のやうな奇態な讃詠を誦してをる、

「おゝキリストよ、汝の羊を

いづこにても守り導き給へ。

汝の足の踏みし處

神に近づく凡の道へ。

此世の深き淵瀬より

我等は願ふ、主よ、

我等を汝の愛の胸に

上なる光の野邊に。

おゝキリスト、我等を救ひ、聽き給へ、

汝いつまでも我等に近く在し給へ。」

彼等はまた未來の事を信じてをる、其時にはキリストと云ふ者が此世に歸つて来て、彼に反對する者を火と劍にて亡し、クリスチャンでない者を皆殺す。其日には世界は燒盡されて、彼等と共に主を禮拜しない者は皆殺されて終ふと信じてをる。キリストを見之と語つたことのある人々が此市に来て



彼等の秘密集會で説教したと云ふことである、其中にタルソのパウロと云ふのがある。彼はカイザルに上訴する爲にエルサレムから來た囚人で、而も大先生である。彼は河の側の家を借りてゐて、來訪者に一々其教を傳へてをる、其爲に下層社會には大部信者が出來た。クリスチャンの生活は熱心且嚴格で、汚はしい宴會や競技場の殺戮を見物になど行かず、又酒もあまり用ひない。あまり行儀が固くて善良な者を罵詈するには、クリスチャン奴と云ふ程である。

此宗教を教へに來た者は皆ユダヤ人である。キリストからしてユダヤ人で、彼等はユダヤ人の神を祀つてをる。大火は此ローマのベストであつて、二度逐放されたがまた知らぬ間に歸つて來てをるユダヤ人が起したのである。ユダヤ人はローマに生活する權利がない。彼等はローマも皇帝も憎んでをるのだ。火事は屑物を賣つて歩くユダヤ人等の、マキシマス競技場附近の汚い小屋掛から發したのである。

右の様な偽言交りの報告を受けた若い臆病者の皇帝は、先の大火はクリスチャンが其宗教の一儀式として放火したものである。若し其教を棄てない者は皆殺害して、ローマから基督教と云ふ危險物を除去すると云ふ布令を出させた。勅令は時を移さず公議所の廣告掛によつて叫ばれ、七丘の間に、クリストの輩の命數は靜な神宮參詣者の前に、賣買の喧しい街に宣言された。

世界に於ける基督教徒迫害の恐るべき第一頁はこゝに初められたのである。此迫害の慘憺たる物語

は多の書物に書かれてをる、放縱生活に墮落し切つた若い帝王は、兵隊に命じて基督教徒を家々から驅出させ街上を追っかけさせた、野次馬が之に加つて「クリスチャンを獅子に喰せろ」と叫びまはつた。老幼男女の區別なく誰でも投獄し、拷問し、あらゆる慘忍な方法で死刑に處して一人も生して置かないと云ふ決心であつた。クリスチャン等は主イエスの手本に倣うて、反抗もせず、逃げやうともしなかつた。直ぐ殺されない者も多かつたが其は競技場の見せ物に野獸に喰殺させるつもりで仕舞つて置いたのである。ラテン史家タシタスは最初に捕つた人々丈けが本統にクリスチャンであると云ふことを告白したのだと記してをる。後には疑がかゝれば其丈けで殺されたので、火事を起したからと云ふよりも、人間の敵だと云つて殺したのである。死刑は嘲弄半分に行はれた。獸皮に包んで犬に食はしたり、十字架上に懸り殺したり、夜燈火代りに火を點けられた。ネロは其を見物させる爲に自分の庭園を開放した。

ネロはそんな慘忍な見せ物を工夫して人民を喜ばせるつもりであつたが、人々はいつとはなしに、反抗もしないで祈禱しながら獅子の餌となる此クリスチャン等は、信仰を棄てない爲ではなく、皇帝の胸中に騒ぐ他の理由によつて殺されてをるのだと云ふことに氣が付いて來た。タシタスはローマの人達が、例の移氣から、却て迫害に惱まされてゐる人達に同情するやうになり、罰は當然だが、殺されるのは罪の爲や市の安全の爲ではなく、たつた一人の殘忍性を満足させる爲に過ぎないと考へるに



至つたと記してをる。それでも殺戮は止まなかつた、人間の血になれてゐる皇帝は、ほろを着てをる乞食から紫衣の帝王まで支配し給ふ神の手の加へられるまでは平然としてその非業をつゞけたのである。

かゝる炎と烟、焼くる家の音、恐怖に襲れた人々の叫、流血、獅子の咆哮、鬼の如き皇帝の血走つた眼の下で喝采する幾千萬の人々の聲の中に、年老いたるパウロの姿は掻き消されたのである。炎で死んだか、獅子の牙にかゝつたか、それとも斬首吏の閃く斧に首を落されたか、誰が知らうぞ。人々にも兵隊にも法官にも宮中の人にもでも、ローマに於けるクリスチャンの指導者と知られてをるパウロが、どうして遁れることが出来たらうか。他の信徒達の元氣の目標塔たる彼は頭を陰すやうなことは爲なかつたであらう。婦女子や子供が震えながら刑所に行くを彼がどうして見逃がしに爲やうぞ。ある日の如きは競技場の宏大な廣場も、十字架がぎつしり立てられて、間を通る隙も無い程であつた。ある夜、ネロは、庭園を人間を炬火にして照したと云ふ。

犠牲と熱誠とを以て消耗された長いパウロの終末が如何なる様子であつたかは秘められてをる。然し我慾に生き放縱の限を盡し悪事の範圍を極みなく擴げていつたネロの終は知られてをる。健康は潰され、頭は亂れ、臆病神の捕虜になつたネロは、猶も悪事をつゞけたが、さすがのローマも彼を戴くに堪えなくなつて、彼を脅迫した。悪夢に襲はれ、幻の聲に劫へた彼は、金の箱に秘密の毒薬を入れ

て其を持つて田舎の別荘に驅込んだ。其處で騎兵隊が自分を捕へに来る音に戦いて、己の胸に短刀を突當て、一人の奴隷の介添によつて、歳三十にして斃れたのである。

## 二二七 イエスとパウロ

パウロを見ると我々は常にイエスを想ふ、そして兩者の近似點と差違點とを考へさせられる。彼等の少年時代は違つてゐた、成人の後も同じではなかつた。イエスは單純な田舎生活の間に育つた、山川、林野、風雲、野獸、草花、星晨を友として生長した。田舎のことであるから成人と子供との間の交友も極めて自然に親しかつた。これらの美しい感化が、彼の公生涯の短い間にも、輝かしい強い味を出してをる。「汝等は幼兒の如くならざれば」とイエスは言つた、「幼兒のことを棄てよ」と言つたのはパウロである。

イエスの幼少時代の境遇がかゝる感化の跡を残したとすればパウロの幼少時代に受けた印象は更に深かつたと思はなければならぬ。彼は都市育ちであつた。咲く花、色づける雲、紫の山、空飛ぶ鳥は彼に何の言も通じなかつた。力の記である兵隊の武装したり其を解いたりする有様、熟練の記である運動家の競走、角力、鐵拳を揮ふ拳闘、暗黒の表號である木石の偶像などが彼の幼少時代に印象を残して終身其感化を及してゐた。人生は力と訓練と注意と便法、ペンでも舌でも、を用ひるべき戦闘で



あつた。

彼の父はバリサイ人でもまたローマ人でありパウロは其を誇りとした。彼は宗教を學ぶは子供に求めたき第一事である、其によつて聖に達することが出来るからだと言つたが、彼自ら子供の時から三十歳まで、今日の學生には不可解の努力苦心を以て學問をして、進歩するに隨ひ學研の陰れたる面白味が出て來ると、單純と美的世界は引込んでしまつた。哲學、神學、論理が彼が各種の樂を奏した三本の絛であつた。「若し是が左様ならば、何か他の物も左様でなければならぬ」と云ふのが學者たる彼の筆法で、これによつて論理の塔を一つ々々積上げて天に達せしめ、理論の鏈を一環づつ縛いでいつて大海を量らしめたのである。然し必竟するに、そんなものは、一つ「若し」が間違つてをれば轉倒してしまふ塔や鏈に過ぎなかつたのである。イエスが權威を以て説教して聽衆を驚かしたに反し、パウロが三十になるまでは、たゞ詭辯論客流の議論を弄し、教法師達の教を反覆するに過ぎなかつたのは宜なるかなである。此思想の習慣は彼の重要な一部となつて、その書簡や演説に我々が其跡を認め得るのである。

かの大變化が彼に起つた時に、變化したのは思想や辯説の形式ではなくて、最高善に關する彼の中心信仰、精神が變化したのであつた。彼は初から神は信じてゐたが、少年時代から善良の生涯に進み天國を得るはユダヤの律法を學んで其に服従することに依ると教へられたに反し、此時からは、イエ

スを信じて彼に従順にある事に依ると云ふことを知つたのである。異教の行ふところに比すればユダヤの律法は大いに善いが、然しイエスに於て見た高い生涯と其完全さに較べれば遙に及ばず、彼はイエスに於てのみ満足を得たのである。

斯様にして、光は取代へられたが、燈臺は同じであつた、彼の古い智識は忘れられはしないで、たゞ押退けられてゐた。思索、演説、文筆に於ける舊形式は追出されず、自然に後の生涯に現れて、彼の長い辛苦した教育の記號が残つてをるのは蓋し當然であらう。彼は自ら告白したやうに「諸君と同じ感情の人間である。」パウロはイエスでは無かつた、恰も光がガラスから色を取るやうに、パウロを通して現れたイエスの教は、主の精神に添へて、此弟子の何物かゝ附加へられてをる。

是を記憶すれば、パウロがイエスの教を傳へるときに幾分教法師型に窺つてゐた點は寛恕しなければならぬし、また彼が時々議論を離れて靈感の爆發するまゝに單純な言語を用ゐて權威を持てるものゝ如く教へてゐる處は大に尊敬しなければならぬ。これ等の部分は、結晶體の如く固くて破り難くペテロがパウロを評して「解するに困難なところ」があると云つた層の中に通つてをる黄金の鑛脈である。彼がエルサレムから來た執念深いユダヤ人に町から町へと後をつけられたときには、内なる闘士が頭を擡げて、教法師が教法師に對ふやうに、彼等に對抗したのである。その爲に彼の書簡中には當時爭論の中心問題であつた割禮のことだの、食物のことだの、儀式のことだの、今日の我々には興



味の無いことが論じてある。然し彼が戦ふべき問題の如何に容易でなかつたかを知る上に於て面白い材料である。一度信徒となつた者が偶像教の舊慣に歸らぬやう屢教へてをるのを見ると、當時の信仰を變へることが如何に困難であり、隨つてパウロの奮闘の尋常一様のものでなかつたことが解る。

## 二一八 奮闘、信仰、冠

此新福音を宣傳へるにパウロは今日我々の持つてをるやうなイエスの言行を録したものを持つてゐなかつたのである。四福音書はまだ書かれてなかつた。彼はガリラヤ人イエスと毎日親しく交るの機會が無かつたので、如何に語り、如何なる言に其思想が包まれてあつたか知ることが出来なかつた。若し彼がイエスと直接交つたならば、彼の學者的性質に感化を受けたらうと思ふのは無理であらうか。若し其親交が有つたら、彼の書簡中に子供の聖いこと、天國に入る第一は子供であることなどを書さなかつたであらうか。パウロは子供の顔にイエスの認めた光を認め得ず、婦人の同情と柔和とをイエスの如く感じなかつた。でなければ婦人は凡の事に於て男子に従へとは書かなかつたであらう。教法師の眼は婦人を避けて、男子ばかり見た。イエスの言の斷片が時々パウロの説教や手紙に出て来るが、特に彼の腦中深く焼付けられてゐたのは、イエスの福音は全世界に傳へらるべきものであると云ふ言であつた。パウロは苦い經驗によつてエルサレムの人達は彼に耳を藉さず、ユダヤの人々は彼を信じ

てくれぬことを見た。彼天來の使命は他の國土に福音を運ぶことであつた。彼はエルサレムには直弟子共が居ながら福音をユダヤ教の束縛の中に入れやうとする企圖のあるを見て、彼等に其危険と主の最後の言の重大なることを警告した。此大理想を抱いたパウロは、ローマの七丘上に立つて、恰も大河の流るゝが如く、帝國の凡ての權力が全世界に基督教の活ける水の流を運んでをるのを望見する者の如くであつた。

彼はどの市に行つても必ず先づ自國民に懇へた。ユダヤ人は既に神、高き生活、救世主を信じてゐたので、一度基督教徒になれば、忽ち他の者を改心させる宣教者になつたのである。彼等に對してパウロは彼等の聞馴れてゐる教法師の論法を用ひて、ユダヤ民族の歴史から、モーセの書、メシヤを迎ふるの希望へと説いて行つたのである。義しきを得ると云ふのは律法を守つても不可能だ、イエスの弟子となつて罪を赦されなければ駄目であると云ふのが彼のユダヤ人に對する論點であつた。勿論若しユダヤの律法を完全に守り得れば聖いのだが、その「若し」が仲々の問題で、到底律法によつて義を得ることは不可能である。

ユダヤ議會に對しては、イエスのやうに、蛇、まむし、偽善者だと云つて、抗撃はしないで、巧に議論をして、敵自らの劍で内輪もめのするやうに仕向けた。同じ調子でアグリッパ王を感心させた。ペリクスもフェストもパウロに罪は無いと見た。それに上訴したのは何の爲であつたか、少し解釋し



難い點である。また彼の終焉がルカのペンによつて記されていないのも物足りない。種々説をなす者もあるが要するに想像である。多分多くの人々が迫害された時に一緒に殺された爲に其様を審つひらにしたなかつたので、ルカは何とも書かなかつたのであらう。

基督教傳播の爲のパウロ生涯の活動は偉大なものであつた。イエスの命に忠實なる心に勵まされ、天の啓示に従順に、彼は遠くパレスチナを旅立つて、到る處友を得て光をつけ、其光を傳へられた人々も亦、進んで、新しい福音が新しい地新しい市邑に傳へられる爲ならば試練に堪へ死をさへ辭せぬ程の信仰を植付けて歩いた。この火の如き熱誠に加へて、彼は、大膽不敵の旅行家の元氣と忍耐とを持ち、連日盜賊や野獸の間に身を置いても平氣であつた。彼は復た、教會を新設して、彼等を教育し嘲笑と迫害の前に決意と信仰に満ちて、彼の据ゑて置いた土臺の上に建設をして行ける丈の力を與へる得難い天才を持つてゐた。

イエスの爲の證人あかしびととして彼は最大人物の列に在る。パウロがイエスに生き、イエスを語り、イエスを書いたことは誰も疑はない。彼は自らイエスは自分と共に活き自分と共に十字架にかゝり給ふたと云つてをる。ユダヤ人等は、彼にあらゆる反對を試み迫害を加へたが、此事實は一度も否認しなかつた。彼等はたゞイエスのメシヤたることを否認したのである。イエスを疑ふ者は、タルソのローマ市民パウロをも共に抹殺しなければならぬ。

然らばパウロの我々に對する短い教は何か。諸君の天よりの啓示に背くな。諸君は自分の行爲おこなひで罪から救はれることは出来ない。神に歸つて神の意を行ひイエスを信じなければならぬ。イエスの生涯は最高の生涯である。イエスの死は凡の人の爲である。イエスの生くる限り諸君も生きるのである。

イエスの公生涯僅三年で切斷きりきりされたが、パウロのは少くとも三十年は有つた。彼が美しい理想としたイエスの徳に達せざること幾許いさかであつたかは彼自ら最よく知つてゐて、常にイエスの如くならむことを祈願してゐた。パウロはイエスと違ふところを深く自覺してゐた。然しパウロに與へられたイエスの靈の尺度は完全であつて、ヤコブが毎日神殿に詣でて祈の爲に膝を磨す切るを以て能事あたりたりとしたのに比較すれば雲泥の差である。パウロは火と燃ゆる魂、人類の必要を痛感する心を以て、更に廣い軌道に突進したのである。改心の初から彼の生涯は闘に満ちてゐた。抗撃、敗亡、勝利失敗、而して勝利へ、其は取返とりかへしのつかぬ過去の生涯の償ついでを爲さんとの無益な試みからではなく、残る生涯を彼が迫害したイエスに事つかへるが爲に全く猷身いんしんせんとした決意を以て爲られたのである。疑惑しゆんと逡巡しゆん、試練と敗亡、失敗と成功を通して彼は、イエスを望み、神を信じて、完全には達しなかつたが、靈感れんかんに激おどまされつゝ大に奮闘した。

「我は使徒と稱せられるに不適當だ」と彼は正直に言つたけれども亦、かう言つたのも正當である。「われ善き戰闘たたかひをたゝかひ、走るべき道程みちのほどを果し、信仰を守つた。今からのちは義の冠冕かんげんわが爲に備



へられてをる。かの日に至りて正しき審判主なる主が、これを我に賜ふであらう。管に我ばかりではない、凡てその顯現を慕ふ者にも賜ふであらう。」

……終り……

大正十四年四月廿九日印刷  
大正十四年五月十日發行

版權所有

定價 三圓五十錢

譯者 高垣勳次郎

發行者 福永文之助

印刷者 澤田文雄

發兌

東京市京橋區尾張町  
振替東京五五三番

警醒社書店

電話銀座一五八七番



山田寅之助著	耶蘇傳	□ 定價二圓五十錢 送料書留廿一錢
柴田 勝衛譯	ハビニーきりすご傳(上)	□ 定價二圓十八錢 送料書留十八錢
波多野精一著	基督教の起源	□ 定價二圓 送料書留廿一錢
小崎 弘道著	基督教の本質	□ 定價二圓 送料書留廿一錢
賀川 豊彦著	イエスの宗教と其眞理	□ 定價二圓二十錢 送料書留廿一錢
賀川 豊彦著	イエスの内部生活	□ 定價二圓 送料書留廿一錢
賀川 豊彦著	福音書に現れたるイエスの姿	□ 定價六十錢 送料 四十錢
道簇 泰誠著	阿彌陀佛より基督へ	□ 定價一圓五十錢 送料書留十六錢
小野 一樹譯	耶蘇の理解へ	□ 定價一圓五十錢 送料書留十五錢
門馬 紫苑譯	女處アデイナミイエス	□ 定價二圓 送料書留廿一錢

植村 正久著	信仰の友	□ 定價一圓十四錢 送料書留十四錢
植村 正久著	靈性の危機	□ 定價一圓十四錢 送料書留十四錢
徳永 規矩著	逆境の恩寵	□ 定價一圓十四錢 送料書留十四錢
綱島 佳吉著	逆境の福音	□ 定價一圓五十錢 送料書留十八錢
内村 鑑三著	苦痛の福音	□ 定價一圓五十錢 送料書留十八錢
内村 鑑三著	基督信徒の慰め	□ 定價七十錢 送料 六十錢
内村 鑑三著	求安錄	□ 定價一圓五十錢 送料書留十八錢
賀川 豊彦著	苦難に對する態度	□ 定價一圓八十錢 送料書留十八錢
武本喜代藏著	信仰に生きて	□ 定價一圓六十錢 送料書留十八錢
田中 龍夫著	天地生き活く	□ 定價一圓二十錢 送料書留十四錢



下村孝太郎著	靈魂不滅觀	□ 定價二圓十八錢 送料書留十八錢
有馬 純清著	心靈現象研究	□ 定價二圓五十錢 送料書留廿一錢
田中 龍夫著	物質觀の革命	□ 定價一圓四十錢 送料書留十七錢
木村 德藏著	兩性問題と生物學	□ 定價五圓五十錢 送料書留三十錢
松村 松年著	最近昆蟲學	□ 定價三圓 送料書留廿五錢
留岡 幸助著	自然と兒童の教養	□ 定價一圓七十錢 送料書留十八錢
大川 周明譯	リシヤル永遠の智慧	□ 定價一圓五十錢 送料書留十八錢
牧野 英一著	最後の一人の生存權	□ 定價五十錢 送料 四十錢
吉田源治郎著	肉眼に星の研究	□ 定價三圓五十錢 送料書留廿一錢
久留 弘三著	ホルムス暴力否定	□ 定價一圓二十錢 送料書留十四錢

田村 直臣著	信仰五十年史	□ 定價二圓十八錢 送料書留十八錢
田村 直臣著	聖書辭典	□ 定價三圓 送料書留廿三錢
警醒社編纂	聖書の常識	□ 定價一圓二十錢 送料書留十四錢
日高 善一著	基督者の常識	□ 定價二圓十八錢 送料書留十八錢
松本 雲舟編	日々の祈り	□ 定價八十錢 送料書留十四錢
内村 鑑三著	英和對照 愛 吟	□ 定價五十錢 送料 四十錢
内村 鑑三著	英余は如何にして 基督信徒となりしか	□ 定價一圓十四錢 送料書留十四錢
内村 鑑三著	宗教座談	□ 定價七十錢 送料 六十錢
日本基督教會編	我等の講壇より	□ 定價一圓十四錢 送料書留十四錢
山本美越乃譯	デビス新島襄先生傳	□ 定價二圓五十錢 送料書留廿一錢



德富健次郎著	説小寄	生木	□ 定價三圓五十錢 送料書留廿四錢
德富健次郎著	説小黒	潮	□ 定價一圓五十錢 送料書留十八錢
德富健次郎著	順禮紀行	草	□ 定價一圓八十錢 送料書留十五錢
永島 忠重著	野	草	□ 定價一圓五十錢 送料書留十五錢
山中峯太郎著	「彼れ在り」この直感		□ 定價一圓八十錢 送料書留十九錢
山中峯太郎著	我れ爾を救ふ		□ 定價一圓九十錢 送料書留十九錢
村田 勤編	我子の思ひ出		□ 定價二圓 送料書留十八錢
松村 介石著	リンコルン傳		□ 定價一圓十四錢 送料書留十四錢
松村 介石著	男女青年訓		□ 定價八圓 送料書留十四錢
住谷 天來譯	カーライル英雄崇拜論		□ 定價一圓九十錢 送料書留廿一錢

別所梅之助著	運命以外の一路	□ 定價二圓五十錢 送料書留廿一錢
別所梅之助著	山のしづく	□ 定價二圓三十錢 送料書留十九錢
別所梅之助著	武藏野の一角に立ちて	□ 定價二圓五十錢 送料書留廿一錢
畔上 賢造著	宗教師人としてのブラウニング	□ 定價一圓八十錢 送料書留十八錢
内村畔上共著	平民詩人	□ 定價一圓三十錢 送料書留十四錢
渡邊 善太著	舊約書の文學 預言文學	□ 定價三圓 送料書留廿一錢
渡邊 善太著	舊約書の文學 詩歌と劇	□ 定價二圓二十錢 送料書留廿一錢
渡邊 善太著	舊約書の文學 歴史文學	□ 定價三圓五十錢 送料書留廿五錢
柏井 園著	ヨハネ傳研究	□ 定價二圓八十錢 送料書留廿一錢
松本 雲舟譯	パンヤン天路歷程	□ 定價二圓五十錢 送料書留廿四錢



島田三郎全集1	議會演說集	□	定價四圓 送料書留廿四錢
島田三郎全集2	社會教育論集	□	定價四圓 送料書留廿四錢
島田三郎全集3	井伊大老傳	□	定價四圓 送料書留廿四錢
島田三郎全集4	政教史論	□	定價四圓 送料書留廿四錢
大西博士全集1	論理學	□	定價二圓五十錢 送料書留廿四錢
大西博士全集2	倫理學	□	定價二圓五十錢 送料書留廿四錢
大西博士全集3	西洋哲學史上	□	定價二圓五十錢 送料書留廿四錢
大西博士全集4	西洋哲學史下	□	定價二圓五十錢 送料書留廿四錢
山本一清著	星座の親しみ	□	定價一圓 送料書留十四錢
山本一清著	火星の研究	□	定價一圓五十錢 送料書留十五錢







終

